

地域連携共同研究所年報

第 8 号

(2022年度)

地域連携共同研究所年報 第 8 号の発刊にあたって	1
地域連携共同研究所 所長 星野 敦子	
地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用 ～新たな 6 次産業化の創出に向けて～	3
曾矢 麻理子、加藤 茂、平田 香織、太田 啓亮、小林 三智子	
大学生の企画による小学生向けワークショップの実施報告 - 保護者の会と連携して -	9
星野 祐子、名塚 清	
野火止用水におけるホテル再生プロジェクト - HUG ネットによる 6 年間の取り組みの成果 -	19
星野 敦子、工藤 一、永瀬 巖	
身体を通して音楽をつかむ実践	
- 学生による初等音楽科のデジタル鑑賞教材制作と対話的な学習活動の探求 -	29
久保田 葉子、狩野 浩二、棚谷 祐一、川瀬 基寛、久保 裕子、小林 愛佳	
子ども・地域の居場所支援を対象とするサービスラーニングのデザイン	
～「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開（3 期）～	39
矢野 景子、大山 博幸	
健康増進に向けたプラスごはんプロジェクトからの地域への情報発信・交信・共振	
学生食堂メニューコンテスト実施による成果	49
木村 靖子、名倉 秀子、村田 浩子、佐々木 菜穂、菅原 沙恵子、岡本 節子、中岡 加奈絵、 石井 和美、鴨下 澄子、星野 祐子	
多世代交流を可能とする地域の居場所づくり	61
佐藤 陽、山下 倫実、山口 由美、人見 優子、西村 百絵	
栄養管理技術の提供による持続可能な開発目標（SDGs）への試み	
～糖質管理スイーツの開発を通じた地域社会との関わりについて 第 2 報～	73
國井 大輔、落合 葉南、高梨 理子、石沢 美和子、吉山 裕子、石井 由紀子	
地域共生社会にむけたコミュニティ形成の試み	
- 多様な主体の連携による地域活動を事例として -	81
星野 敦子	



地域連携共同研究所年報 第 8 号の発刊にあたって

地域連携共同研究所 所長 星野 敦子

「地域連携共同研究所年報 第 8 号」が完成いたしました。十文字学園は創立 101 年目を迎えました。100 年というひとつの節目を超え、新たな時代に向けて、まさに荒波の中の船出といってもいいかもしれません。これからの時代の教育のあり方として、指針となるのが、今年発表された教育振興基本計画における以下の 2 つのコンセプトです。

- ①2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成
- ②日本社会に根差したウェルビーイングの向上

もう少しわかりやすく言うと、「予測困難な時代において、自らが社会の創り手となり、課題解決などを通じて、持続可能な社会を維持・発展させていく」こと、そして「多様な個人それぞれの幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるための教育の在り方」を追求していくことです。

2014 年に「地（知）の拠点整備事業」に採択されて以来、私たちは、地域における課題解決を図るため、行政や地域における多様な主体と連携を図り、専門性を生かした研究活動を通じて地域社会の幸せの実現を目指して活動してきました。そして現在もその姿勢は変わっていません。今回掲載した 9 編の論文は、いずれも地域課題解決を目的とし、持続可能社会の維持・発展に向けた意欲的な実践研究の成果となっています。

「ウェルビーイング」とは、単に「幸せや生きがいを感じる」ことではありません。一人ひとりが自らの能力や個性、資質を生かして、自分らしく生き生きと活動すること、そしてそれが地域や社会の幸せや豊かさにつながっていくことを意味しています。地域連携共同研究所におけるプロジェクトでは、まずは研究に関わる教員や学生が生き生きと自分らしく活動すること、そして、地域の方たちと連携する中で、新たな学びやつながりを作っていくことに喜びを見出すことが最も重要であると思います。このような形で進められた研究活動は、結果として地域社会に幸せや豊かさをもたらすのです。

学園創立 101 年目にして、あらためて本学に課された使命を再認識し、地域社会に生きるすべての人たちの幸福の実現に向けて研鑽を重ねていきたいと思います。

2023 年 11 月

地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用 ～ 新たな 6 次産業化の創出に向けて ～

Effective use of local vegetables through cooperation activity with region
～For the creation of new 6th industrialization～

曾矢 麻理子¹⁾ 加藤 茂²⁾ 平田香織³⁾ 太田啓亮³⁾ 小林 三智子¹⁾
Mariko SOYA Shigeru KATO Kaori HIRATA Keisuke OTA Michiko KOBAYASHI

1) 十文字学園女子大学 食品開発学科 2) 株式会社フーディング・パス 3) 新座市シティプロモーション課

キーワード：地場野菜 ドレッシング 商品開発 6 次産業化

要旨：本研究は、地場野菜の有効活用としてドレッシングの開発に着手してから、8 年目を迎えた。近年は、その出口を 6 次産業化の一環として「食の 6 次産業化プロデューサー」を目指す学生の実践の場としている。これまでに 4 種類（にんじん・ごぼう・ブロッコリー・いちご）の野菜畑ドレッシングを開発し販売してきたが、販路の拡大が課題であった。そのため、令和 4 年度はコーディネーターを交えて、販路拡大に関して考察した。その結果、本研究のような「社会共感性型」の事例の場合、小規模でも共感する仲間づくりに重点をおき、事業の拡充ではなく、持続的な事業の確立を目指すべきと思われた。6 次産業化の成功例は様々といえ、経済的効果はもとより、農家の意欲向上など、非経済的一面も今後の日本農業の存続にとって重要なことと考えられる。6 次産業化には大学の知見を活かす余地が多くみられ、今後は「農村資源×大学」で取り組み、新たな 6 次産業化へと展開していくことを目指していく。

1 はじめに

本研究は、平成 26 年度に文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に採択されたことに始まり、研究に着手して 8 年になる。これまで、農業の 6 次産業化の新しいモデルとして、1 次産業を地域農家、2 次・3 次産業の一部を大学が担う形で地場野菜を活用したドレッシングの開発を進めてきた。本学の食品開発学科では、授業のカリキュラムに「食農体験」や「食品加工学」、「フードマーケティング論」「地域食品企画演習」などが組み込まれており、「食の 6 次産業化プロデューサー」の資格を取得することができる。この資格を活かして、食分野での新たなビジネスを創出することが可能となり、将来、「食のプロデューサー」としての活躍も期待できる。本研究は、「食のプロデューサー」を目指す学生にとって実践的なフィールドワークの場といえる。

農林水産省が平成 23 年 3 月に六次産業化・地産地消法を施行してから、多くの地域で、農家が農産物の加工に組み込み、商品化している。農家自身が 2 次産業（商品開発、農産物の加工）に参画することで、売上げが増加傾向になる一方で、販路開拓に要する人材や、商品開発のノウハウの不足も課題になっていった（日本政策金融公庫 2013）。令和 4 年には、農林水産省が新しい農村政策として「農山漁村発イノベーション」を構築し、その中で、6 次産業化の取り組みを加速化するとともに、その考え方を拡張するとしている。農村が有する地域資源を発掘し、その価値を磨き上げたうえで、農業以外を含む他分野と「農村資源×○○」の形にすることで、新たな事業・価値を創出することを目的としたものである。食品開発学科での教育は、これまでの 6 次産業化に「地域資源に磨きをかけ付加価値を創出する」ことを付加でき、新しい 6 次産業化の加速に貢献できると考えている。

令和 4 年度は、これまで大きな課題であった販路拡大の解決策を得るべく、コーディネーターを入れて取り組みを行った。本稿では、これまでの研究および、コーディネーターを交えて得た販路拡大に関する見解を報告する。将来的には、6 次産業化の新しい取り組み事例として

「農村資源×大学」を構築し、農業発展への貢献および、学生のフィールドワークの場を創出することを目指している。

2 研究背景と既存研究の整理

本学の立地する新座市は東京都に隣接する都市農業地帯で農業の盛んな地域である。関東ローム層で覆われた水はけのよい土壌は根菜類を栽培するのに適しており、冬ににんじんにおいては、国の指定産地に認定された一大生産地である¹⁾。新座市で収穫された農産物の大半は生鮮食品として販売されており、加工食品として展開の余地があったため、調理の必要性がなく、簡単に使用でき、新座市の土産物になるような商品として「ドレッシング」に着目した。平成29年度に開発した地場のにんじんを用いた「にんじん畑ドレッシング」を皮切りに「ごぼう畑ドレッシング」、「ブロッコリー畑ドレッシング」、「いちご畑ドレッシング」が商品化され、これまでに4種類のドレッシングをシリーズ化した。コロナ禍であったため、販売先に学生が出向き、直接消費者に商品PRをすることはできなかったが、販促ツールとして、学生が作成したポップを販売先に置くなどの形で参加した。



写真1 シリーズ化した野菜畑ドレッシング



写真2 ドレッシング開発の様子



写真3 学生が作成した販促用ポップ



写真4 食農体験で作業をする様子

3 販路におけるコーディネーターからの見解

毎年、製造するたびに販路を探すことは、大変困難なことであった。多くの6次産業化を進める団体においても、販売への取り組みや、他サービスへの展開は弱く、異なる業種との連携形成のた

めには計画を推進するコーディネーターの支援が必要であると櫻井(2014)は述べている。そこで、令和4年度は、(株)三百 望月雅之氏に本取り組みのコーディネーターを依頼し、販路に関する課題解決の見解を得た。望月氏の見解では、本取り組みのような「社会共感性型」の場合、マーケットイン思考でないため、市場の要求を考慮していない、すなわち「経済合理性型」を目的として販路の課題に臨まないと解決は難しく、また、大学が「経済合理性型」を追求した取り組みを行うことは困難ということであった。6次産業化の市場は多様である。成功例を経済的な側面で評価されてしまいがちであるが、非経済的な側面（農業への理解、経営者の精神的な充足など）も農山漁村の振興につながっている（工藤 2014）。これまで、販路を拡大し、製造ロット数を増やしていくことを課題としてきたが、本取り組みのような「社会共感性型」の場合、小規模でも共感する仲間づくりに重点をおき、事業の拡充ではなく、持続的な事業の確立を目指すべきと思われた。

地元密着型 食品商品開発 販路拡充 **【課題整理 ～ アプローチポイント】**

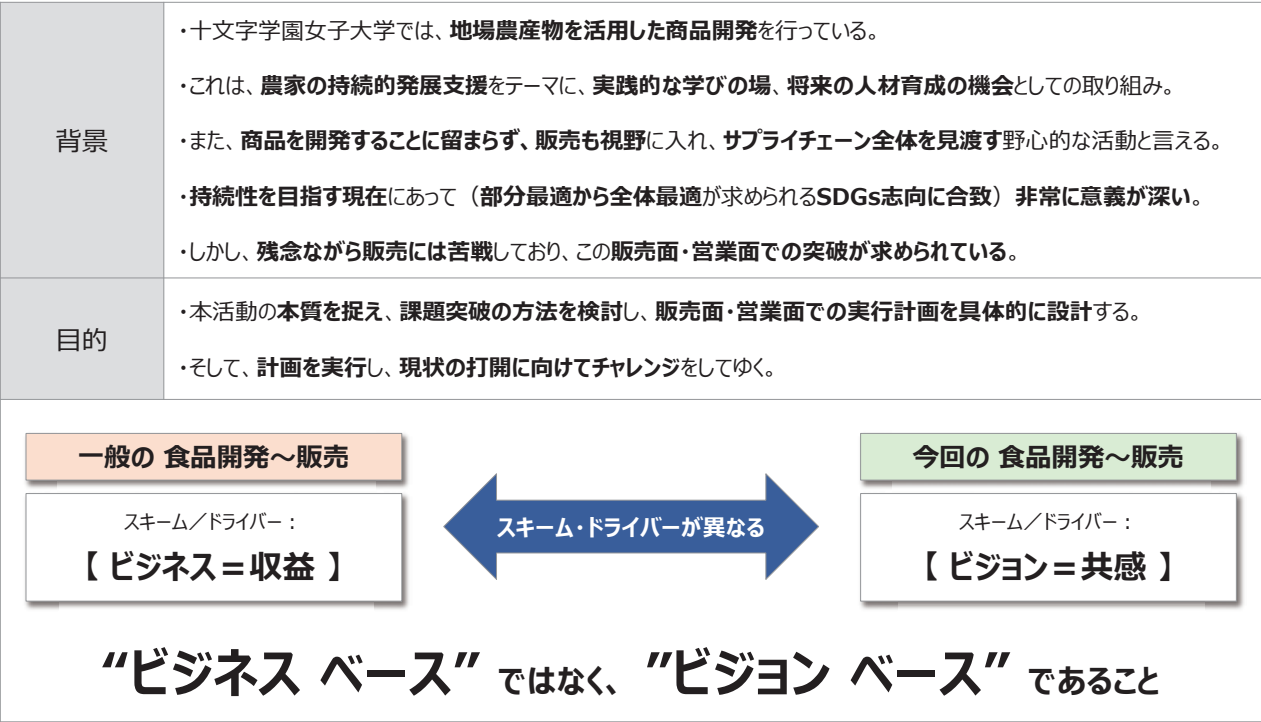


図 1. 研究課題の整理（望月氏作成）

地元密着型 食品商品開発 販路拡充 【“ビジョン ベース” バリューチェーン（価値共有の仲間探し）】

商品開発 が 販売営業 に、しっかり繋がることとは、

“ビジョン” に共感する バリューチェーンの 仲間探し（仲間づくり）

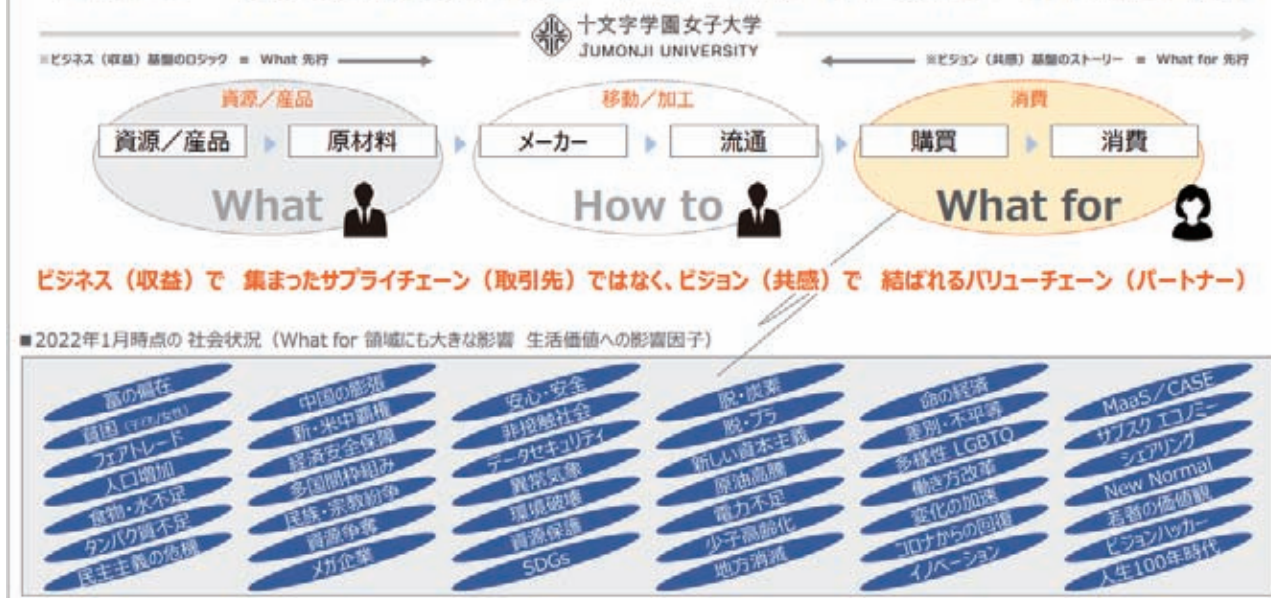


図 2. ビジョンベースのバリューチェーン（望月氏作成）

地元密着型 食品商品開発 販路拡充 【施策展開への視点と流れ】

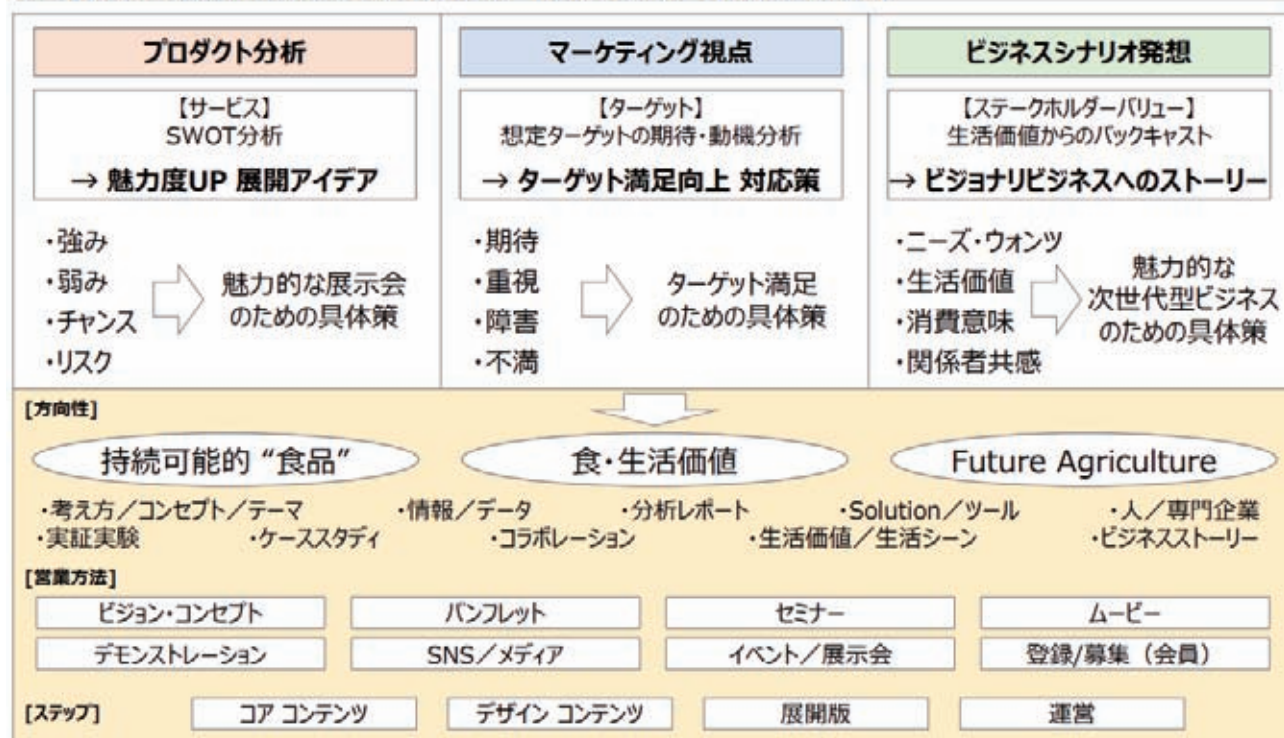


図 3. 施策展開への視点と流れ（望月氏作成）

4 農商工連携フェアへの参加

令和4年2月1日に埼玉県が主催した「農商工連携フェア」に出展した。本フェアは、県産農産物及び県産農産物を利用した食料品等の販路開拓を図るために開催されたイベントである。本研究で開発したドレッシングについて、学生が開発の経緯や商品の特徴を説明し、多くの参加企業にアピールすることができた。大学の出店は本学のみであったため、アカデミックな要素を取り入れた企業から多くの相談を受け、それに学生たちが対応し、これまで修得した知識を発揮する場となった。食品開発学科の学生にとって、履修した授業の内容が、どのような企業や職種で、どのように生きていくのか、また、企業の相談から、どのようなことが自分たちに求められているのかという、社会との繋がりを体感できた貴重な機会であった。販路に関しては、これを機に埼玉りそな銀行から助言を賜うことができ、小ロットで製造可能な業者が見つかり、今後の製造に目途が立った。また、埼玉県内の多くの農家や企業から、共同開発の依頼が入り、現在次なる商品の開発に着手している。



写真5 農商工連携フェアでの様子①



写真6 農商工連携フェアでの様子②

5 今後の6次産業化の展望と大学の関わり方

六次産業化法が施行されてから十数年が経過し、多くの農家で商品の開発が行われ、農林水産省では毎年、6次産業化アワードにて優秀な取り組み事例を報告している。しかしながら、開発のノウハウの向上、食品の栄養成分、機能性など、地域資源を磨き上げ、付加価値の高い商品にするエビデンスの取得に関しては、事業主だけでは着手することが難しいのが現状で、実際に農商工連携フェアにおいて、このような相談を多く受けた。それは一方で、社会のニーズに、学生が大学で得た知識を持って応えられる契機といえる。6次産業化の成功例は様々といえ、経済的効果はもとより、農家の意欲向上など、非経済的一面も今後の日本農業の存続にとって重要なことと考えている。6次産業化には大学の知見を活かす余地が多くみられ、「農村資源×大学」で取り組み、新たな6次産業化の一例を築いていくことを目指していきたい。

注

1) 農林水産省, 2022, 野菜指定産地一覧, p25.

<引用文献・参考文献>

- ・ 日本政策金融公庫, 2013, 平成 24 年度 農業の 6 次産業化等に関する調査, AFC フォーラム別冊 情報戦略レポート, 35.
- ・ 櫻井清一, 2014, 6 次産業化の発想を活かした地域活性化に関する資料, 1-3.
- ・ 工藤康彦, 今野聖士, 2014, 6 次産業化における小規模取り組みの実態と政策の課題, 農経論叢, 69:63-76.
- ・ 所吉彦, 2015, 6 次産業化の現状および課題解決に向けた一考察-九州ブロック熊本県を事例として-, 尚絅大学研究紀要, 47:73-88.
- ・ 曾矢麻理子, 小林三智子, 2017, 地場野菜を活用した加工食品の開発-新座産にんじんを用いたドレッシングの商品化-, 十文字学園女子大学紀要, 48, 1:269-276.
- ・ 曾矢麻理子, 小林三智子, 2018, 地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用, 十文字学園女子大学地域志向教育研究プロジェクト研究成果論文集, 2014-2018:89-97.
- ・ 曾矢麻理子, 加藤茂, 高橋憲行, 小林三智子, 2021, 地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用, 十文字学園女子大学地域連携共同研究所研究プロジェクト年報, 2021.
- ・ 常清秀, 2022, 「6 次産業化」の戦略と戦術について考える, 農林金融, 75, 3(913):46-47.

大学生の企画による小学生向けワークショップの実施報告—保護者の会と連携して—

A Report on the Workshops planned by University Students for Elementary School Students in cooperation with Parents' Association

星野 祐子¹⁾ 名塚 清²⁾
Yuko HOSHINO Kiyoshi NAZUKA

1) 十文字学園女子大学・文芸文化学科 2) 元・十文字学園女子大学・地域連携推進センター

キーワード：ワークショップ 小学生 コミュニティ・スクール 地域活動 地域学校協働活動

要旨：本学マスコットキャラクター「プラスちゃん」と共に地域活動を行う組織が「プラスちゃんくらぶ」である。本稿では「プラスちゃんくらぶ」が2022年度に注力したイベントとして、和光市立広沢小学校との地域連携活動を取り上げる。5日間行われたイベントにおいて、学生たちは運営のサポートを行ったり、4つの企画を実施したりした。4つの企画は、プログラミング体験・ペーパークロマトグラフィーの実験・タオルやリボンを使ったハンドメイド・水引でのアクセサリ作りである。企画の実施にあたって、幼児教育学科・児童教育学科の学生たちは、日頃の学びを活かし、子どもたちに細やかな配慮を見せた。対して、教育系の学科以外に所属する学生たちは、普段関わることが少ない子どもたちの対応に戸惑いもあったようだが、徐々に慣れていくことができた。そして、学生相互に協力し合うことで、「プラスちゃんくらぶ」としての一体感を醸成することができた。また、今回のイベントには、一般企業や各種団体の職員など、立場の異なる方が運営側として関わった。加えて、参加者側も、子どもたち、保護者、外国籍の方など様々であった。学生たちは、そうした立場の異なる方と積極的に関わりを持つことで、改めて自分たちの活動の意義を実感することができた。

1 はじめに

2022年度は学内外でのイベントが徐々に再開され、本学マスコットキャラクター「プラスちゃん」を活用した活動も、以前に近い形で実施されるようになった。着ぐるみが出動することも増え、幅広い年代の方々と直接関わることができた。「プラスちゃん」と共に地域活動に励む「プラスちゃんくらぶ」の活動もより活性化し、異学年・異学科の学生がイベント準備に励む姿が多くみられた。

もっとも、2020年度、2021年度も「できるときに できることを」をモットーに、オンラインツールを活用した活動に取り組んだ。コロナ禍において、小学生向けオンラインでのプログラミング教室を実施することになったのも、「できる範囲で できること」を模索した成果である¹⁾。

そして、コロナ禍の時期は、近いうちに対面イベントが実施されることを願って、新たな企画に着手する時期ともなった。その一つが、和光市立広沢小学校で開催された夏休みイベントへの参加である。2021年度を準備期間とし、2022年度の夏休みに実施となった。以下では、活動内容を紹介すると共に、様々な方との関わりを通して学生たちが学んだことを記述する。

2 広沢小学校との連携

広沢小学校と連携することになったきっかけと、2022年度の夏休みイベント実施に至るまでの経緯について示す。

¹⁾ オンラインプログラミング教室の実施報告については、星野他（2021, 2022）を参照されたい。

2. 1 連携のきっかけ

本学は、地域に根ざす大学として、近隣自治体と包括連携協定を締結している。和光市も包括連携協定を締結している自治体の一つであり、日々の教育活動や地域連携活動等でフィールドを提供していただいている。「プラスちゃんくらぶ」としては、和光市制 50 周年記念歌「ひかりさすまち」のダンス動画の制作に参加させていただいたことがある。

和光市立広沢小学校と「プラスちゃんくらぶ」が連携するきっかけは、2021 年 10 月にさかのぼる。広沢小学校保護者の会の会長と当時の地域連携推進センターコーディネーターとが、同小学校と本学の連携の可能性について意見を交わす機会があった。その際、会長が IT 企業である「ソルクリエイト株式会社」²の COO（最高経営責任者）を務めていることから、「プラスちゃんくらぶ」で小学生向けのプログラミング教室を実施したことが話題として挙げた。また、小学生向けプログラミング教室以外にも、子ども向けの講座を企画・実施した実績があることから、「プラスちゃんくらぶ」と広沢小学校保護者の会との連携を進めていくことになった。

2. 2 イベントは 2022 年の夏休みに

2021 年 10 月末、本学にて保護者の会の会長と今後の連携について打ち合わせを行った。その後、メールや対面でやりとりを重ね、2022 年 1 月にイベントの概要を示していただいた。イベントは 2022 年 8 月 22 日～26 日に 5 日間実施、そのイベント内で「プラスちゃんくらぶ」の関わりを考えることになった。

なお、広沢小学校は、自衛隊和光官舎が学区となるため、年間 100 件に達するほどの転出・転入がある。そのため、会長曰く、「ふるさと」を意識することが難しく、さらに、コロナ禍で活動が制限されていることから、子どもたちが地域の人と関わる体験が乏しくなっているとのことだった。そこで、夏のイベントは、「プラスちゃんくらぶ」以外にも、様々な職種・立場の方々が関わり、地域全体で子どもたちの学びや体験活動を推進するよう企画されていた。

言うまでもないが、多種多様な方々とイベントを実施する機会は、学生にとっても得難い機会となる。加えて、2020 年度、2021 年度は、学生たちも地域の方と関わる場面が減少していた。5 日間のイベントは、きっと学生たちにとってもよい経験となるだろう。そうした期待感を持ちながら、学生たちと企画を立てていくことになった。

2. 3 イベントの計画

夏のイベントに向けて、準備を進めることになった。これまでの経験を活かし「プラスちゃんくらぶ」では、5 日間のうち 2 日間、4 コマを担当することにした。

表 1 プラスちゃんくらぶの実施イベント

	8 月 24 日（水）	8 月 26 日（金）
10 : 00～11 : 30	ペーパークロマトグラフィーの実験 をしてみよう！	プラスちゃんを作ろう！
14 : 00～15 : 30	プログラミングロボット embot を動かそう！	水引アクセサリを作ろう！

イベントの計画と並行して、イベントに携わるメンバーを 2022 年 5 月から募集した。メンバー募集にあたっては、保護者の会の会長自らが「プラスちゃんくらぶ」のミーティングに顔を出し、イベント協力を要請した。会長には、折に触れて「プラスちゃんくらぶ」のミーティングや

² ソルクリエイト株式会社 (<https://www.solcreate.co.jp/>)

自社クラウドサービスの運用やシステム開発に携わり、IT コンサルティング等を行う。2023 年度より、SDGs への取り組みとして、プログラミングクラブの支援を定期的に行っている。

イベントにご参加いただいている。イベントだけに留まらない関わりの継続は、学生たちにとっても励みになっている。

7月に入り、広沢小学校にてイベントの告知を行った。図1は、広沢小学校の保護者に配布された「プラスちゃんくらぶ」主催イベントのチラシである。



図1 夏休みイベント参加者募集チラシ

3 イベントの実施

イベントは5日間に渡って実施された。イベント内容と参加人数の記載にあたっては、「広沢小学校保護者の会」HPの開催記録を参照した³。

表2 「広沢小 あそび まなびの広場」の開催記録

イベント		対象	開催回数	参加者
プログラミング	スフィロ	低学年向け	2回開催	35名
		中学年向け	2回開催	
	Edison	中学年向け	2回開催	
	ドローン	高学年向け	2回開催	
	★ embot	4年生～6年生	1回開催	
自然あそび プレパーク		1年生～6年生	各イベント 1回開催	14名
最先端ARスポーツ HADO		1年生～6年生		30名
問題解決型学習「広沢こどもエリア会議」		4年生～6年生		16名
ビームライフル		5年生, 6年生		21名
★日本文化体験「水引」		4年生～6年生		14名
★理科実験「ペーパークロマトグラフィー」		1年生～3年生		6名
★手芸「プラスちゃんを作ろう」		1年生～3年生		14名

³ 広沢小学校保護者の会 HP (<https://hirosawapa.com/>)

表2の通り、5日間で様々な内容のイベントが実施された。「プラスちゃんくらぶ」が担当した内容は★で示している。なお、「プラスちゃんくらぶ」が企画した embot 以外のプログラミングイベントは、会長が COO を務める企業「ソルクリエイト株式会社」の社員が担当した。社員の方々は2022年度の新入社員で、研修の一環として、プログラミング教室の企画・運営を担当した。

その他、「自然あそび プレパーク」と「最先端 AR スポーツ HADO」は和光市広沢複合施設「わびあ」にある総合児童センター職員が担当し、「広沢こどもエリア会議」は和光市社会福祉協議会が企画・運営、ビームライフル体験は埼玉県ライフル射撃協会が実施した。

5日間の参加者数は延べ150名、協力者の人数は延べ153名となった。「プラスちゃんくらぶ」の学生は、自分たちの企画イベント以外にも、サポーターとして5日間に渡って参加し、延べ37名（18名）の学生が本イベントに関わった。

以下、担当したイベントについてその成果を記載する。

3. 1 ペーパークロマトグラフィー

ペーパークロマトグラフィーの実験は、2018年8月、新座市内の小学校3校で実施した経験がある。その時に使ったキットをリメイクすると共に、新たにパワーポイントのスライドを作成して、視覚的にも理解がしやすいよう工夫を講じた。

当日は、2名の学生が司会・進行を務めた。サポート学生は5名で、手分けをしながら6名の子どもたちの実験を手伝った。プログラミング教室を運営した「ソルクリエイト株式会社」の社員もサポートとして参加した。

【イベントの写真】



図2 ペーパークロマトグラフィーのワークショップの様子

【参加者の声】

- ・ぼかしがたくさんできて楽しかった（2年）。
- ・一つの色がいろいろな色に変わって楽しかった（3年）。
- ・いろいろな色の組み合わせがわかって楽しかった（3年）。

3. 2 embot

ペーパークロマトグラフィーの実験を行っている隣の教室で、embot を活用したプログラミング教室の準備を行った。具体的には、リーダーを中心に、使用するタブレットとロボットの接続、サポートの手順などを確認した。準備にあたっては、リーダーが広沢小学校用のマニュアルを自作し、そのマニュアルをもとに効率的に作業を行った。

実は embot を用いたプログラミング教室は、オンラインでの経験でしかなく、対面で実施するのは初めてだった。なお、今回のプログラミングイベントの担当学生は10名で、前年度にオンラインプログラミングイベントを経験した学生は半数であった。そこで、経験者が中心となり、事前に学内で予行演習を行い、当日を迎えた。

また、対面イベントの実施にあたっては、全体の流れや基本的な操作方法を示したパワーポイントを準備し、さらに、参加者のペースで embot を動かせるように、個別のガイドブックを準備

した。講座で使用したガイドブックは、イベント終了後に参加者にプレゼントし、自宅でもプログラミングに親しんでもらうことを期待した。embot のアプリには、シミュレーション機能があるため、実際にロボットがなくても、プログラミングを体験することができる。

【イベントの写真】



図3 embot のワークショップの様子

【参加者の声】

- ・じゃんけんのプログラミングが楽しかった（2年）。
- ・子ども教室に来てほしい（5年）。
- ・はじめはどのように動かせばよいかわからなかったけど、教えてくれて楽しくできた（5年）。
- ・かわいい動物のロボットを動かしてプログラミング体験できたことが面白かった（6年）。

3. 3 プラスちゃんを作ろう

募集チラシの段階では、何を作るかが決まっていなかったのが「プラスちゃんを作ろう」の企画である。「タオルプラスちゃん」は、2017年度に実施したキャラクターイベントで、作成したことがあったが、その他の企画である「折り紙」と「ロゼット」は、今回初めて実施する企画となった。そのため、本企画については経験の有無が問われず、「プラスちゃんを作ろう」は、1年生の新メンバーが中心となることができた。

スライド作りにも1年生が積極的に関わり、特に「折り紙」のパートにおいては、難しい工程を考慮し、事前に折ったものを用意するなど低学年の参加者にも配慮することができた。

【イベントの写真】



図4 プラスちゃんを作ろうのワークショップの様子

【参加者の声】

- ・3つも作れてよかった（1年）。
- ・またやりたいです（2年）。
- ・じょうずに作れたと思いました（2年）。
- ・タオルでプラスちゃんを作るのがたのしかったです（2年）。
- ・ブローチがたのしかったです（2年）。
- ・かんたんにできてたのしかったです（2年）。

- ・思っていたよりもかわいいのができてうれしかったです（3年）。

3. 4 水引を作ろう

水引イベントは、「プラスちゃんくらぶ」の担当教員が担当しているゼミで実施したことがある。ただ、小学生向けには行ったことがないので、配布資料等にルビを振ったり、表現を易しく改めたりした。こちらの企画にも1年生がリーダーとして関わった。

また、当日は外国籍の方が参加することになった。日本語の理解が十分な方もいれば、来日して間もない親子の参加もあった。学生たちは自分の手元を見せながら、水引の作り方を伝えていく。学生たちにとって、使い慣れない英語を使用するのレクチャーは難しい部分もあったようだが、スマートフォンの翻訳機能を使いながらコミュニケーションをとっていたようだった。

【イベントの写真】

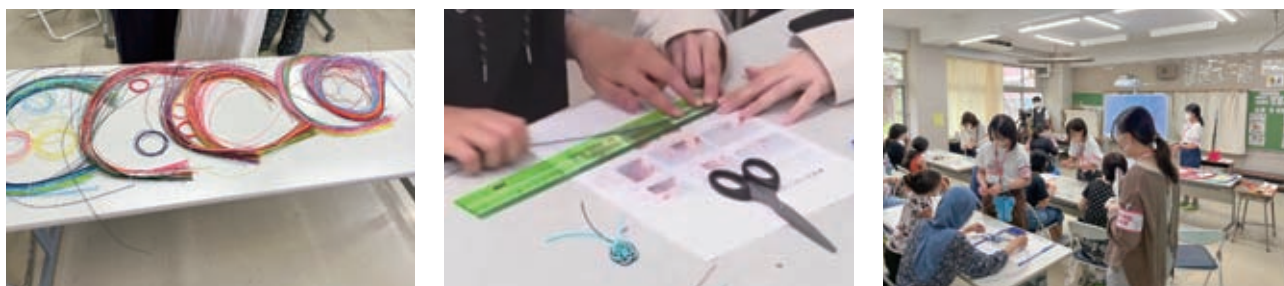


図5 水引のワークショップの様子

【参加者の声】

- ・むずかしかったがたのしかった（4年）。
- ・おねえさんがやさしく手伝ってくれたので楽しくできました（4年）。
- ・けっこん式に使う水引がアクセサリーになって楽しかった（6年）。
- ・最初は難しそうでしたが、教えてもらったらきれいにできて驚きました（保護者）。
- ・くわしく説明してくれたおかげでうまくできた（外国籍の参加者）。
- ・I have fun. I'm very happy. I made new things and learn Mizuhiki（3年）。

4 学生たちの気づき

5日間のイベントを経ての学生の気づきを、イベント実施後に行ったミーティングの記録より抜粋して示す。

4. 1 学びを活かす・仲間から学ぶ

幼児教育学科の学生や児童教育学科の学生は、子どもたちと関わる経験があるため、ワークショップの実施にあたって、日頃の学びを活かすことができたようだった。

- ・対象の年齢は違っても実習での経験を活かすことができました。
- ・どのように関わっていこうか、どのように伝えたらいいかなと試行錯誤しながら関わることができ、就職後にも活かすことができる経験となりました。
- ・イベント中に細やかな配慮や個々の児童に合わせたサポートをすることができたと感じており、学科の学びを活かせる場になりました。

一方、教育系の学科以外に在籍する学生は、子どもたちとの関わりを次のように振り返る。

- ・小さい子どもの接し方を他の参加者から学びました。
- ・視線を合わせるためにしゃがむと話しやすいことがわかりました。

このように、日頃子どもたちと接する経験が少ない学生は、その対応に慣れている学生の姿に、子どもに対する対応を学んでいった。

4. 2 活動しながら仲間になる

「プラスちゃんくらぶ」の活動は不定期で行うため、イベント準備を経て仲間意識を醸成していく。コロナ禍ではオンラインを使った話し合いが多かったが、広沢小学校でのイベント準備は、可能な限り対面で行った。

イベントで中心的な役割を担った学生は、以下のような感想を述べる。

- ・接続などの事前準備では数名の学生にもお手伝いしてもらいました。自分ができることを他の学生にも共有する時間がとれたことで「みんなで作り上げるイベント」に近づけることができたのではないかと感じています。

また、上記の所感に関連して、以下のコメントを取り上げたい。

- ・「プラスちゃんくらぶ」でもあまり関わったことのない人がいて、初対面の方と多く関わるイベントでしたが、その分細かな共有の大切さを実感しました。
- ・わからないことは、すぐに聞くことを意識しました。

以上の記述から、「自分ができること」を周りと共有する、全体の流れや情報を丁寧に共有していくことが、組織としての一体感を高め、組織への帰属意識を高めることにつながっていくことがうかがえる。

5 様々な人との関わりのなかで

学生は、イベントを動かす側として、保護者の会の会長、IT 会社の新入社員、企業・地域の協力者などに関わりをもった。また、来場者である 1 年生から 6 年生の小学生、保護者の方に対しては、イベント運営者としてホスピタリティをもって対応をした。

様々な人と関わりを持ちながら、イベントを実施していくことで学生たちはどのような気づきを得ることになったのだろうか。

5. 1 小学生との関わり

4. 1 でも触れたが、普段関わりのない年代との関わりに対して、当初は躊躇している様子が見受けられた。

ただ、小学生と共に作業を進めていくことで、徐々に距離感をつかんでいったことがわかる。

- ・小学生と関わる機会はなかなかないので、距離感を掴むのは大変でしたが、徐々にどのように関われば良いのかわかってきて、最後は打ち解けることができました。
- ・子どもたちに教えたり一緒に遊んだりすることを通して、自信を持つことができました。
- ・小学生にもわかりやすい・理解しやすいことばに変えることは少し難しく感じました。一方、そのことばで問題なく理解してもらえたとき、達成感に似たものを感じました。

以上の所感から、試行錯誤しながらも工夫したことがうまくいった際に、達成感を得たり、自信を持てたりすることがうかがえる。

さらに、参加者の保護者の方が次のようなコメントをくださった。当該児童を担当した学生にとっては、自分の対応が適切であったことが実感され、励みとなっていたようだった。

- ・(ペーパークロマトグラフィーの実験に参加した2年生の保護者の方から)

下の子(年中)も参加させてくださりありがとうございました。相手をしてくださったお姉さんが優しくて楽しむことができました。

5. 2 イベントを創る人々との関わり

今回のイベントは、5日間を通した大規模なものであったため、学生たちは様々な方と関わるようになった。ここでは特に年齢が上の方との関わりについて、学生が実感した点を記述する。

- ・イベントを企画してくださる方、イベントに携わる方、イベントに参加してくださる方がいて初めてイベントが成立します。人と関わる機会というのはどんな形であれ、自分にとっての学びとなるので、自ら積極的に話しかけるようにしました。
- ・会長の会社の方が皆さん優しくて、積極的に話しかけてくださいました。年齢もあまり変わらないというお話でしたが、凜としていらして、気遣いが感じられました。自分が同じ歳になった時に、同じ態度や気遣いができるか心配です。
- ・社会人の方の冷静な対応や、親御さんに対しての関わり方を学びたいと思いました。外国籍の方の対応については、自分なりに関わってみようとする事ができたので、できた喜びを共有することができ嬉しかったです。

今回は、彼女たちにとってロールモデルとなるだろう社会人1年目の方との関わりに学びが大きかったようだ。具体的には、企業の方々が進めるワークショップのサポートをしたり、自分たちのワークショップを手伝ってもらったりしながら、彼女たちの姿に「将来こうなりたい」というイメージを形成しているようだった。

また、保護者の方や外国籍の方などの関わりについては、難しい部分もあったと想像されるが、意欲的に関わる事ができていた。今後も、多様な立場の方と関わりながら、相手に合わせた柔軟なコミュニケーションの方法を身に付けてもらいたい。

6 地域と連携した教育活動

和光市では、平成30年度より全ての小中学校が「コミュニティ・スクール」として指定されている⁴。「コミュニティ・スクール」とは、「学校運営協議会」が設置されている学校であり、「学校運営協議会」とは、「法律に基づき教育委員会により任命された委員が、一定の権限を持って、学校の運営とそのために必要な支援について協議する合議制の機関」のことを指す(文部科学省2020:3)。

さらに、令和4年度より、和光市では各中学校区において「地域学校協働本部」が設置され、「学校運営協議会」と連携して、地域の教育力を活かした教育活動が展開されている⁵。

その「地域学校協働本部」が学校と連携して進める活動が「地域学校協働活動」である。「地域学校協働活動」とは「地域の高齢者、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、学校を核とした地域

⁴ 和光市 HP「コミュニティ・スクール(学校運営協議会)」より
https://www.city.wako.lg.jp/home/kyoiku/gakkou/syoutyuu/_18776/communjtytschool.html
(2023年6月10日閲覧)

⁵ 和光市 HP「地域学校協働本部」より
https://www.city.wako.lg.jp/home/kyoiku/gakusyu/_21512.html
(2023年6月10日閲覧)

づくりを目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動」と定義される（文部科学省 2017：3）。

「プラスちゃんくらぶ」の学生が関わった活動も「地域学校協働活動」と考えてよいだろう。文部科学省（2017：55）には次のような記述がある。

地域学校協働活動の幅広い担い手を確保するためには、教員を目指す大学生や社会貢献活動や地域政策に関心のある大学生等の地域学校協働活動への参画を促進することも有効です。教育委員会は、地域の大学や専門学校等の高等教育機関との連携を推進し、教員養成系の学部や学科の教職課程の学生をはじめとして、地域貢献や人材育成に関心を持つ学生に対して、地域学校協働活動を体験してもらう学校インターンシップやボランティア実習などの取組の実施を推進することが重要です。こうした取組は、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義であるとともに、大学生の社会参画意識の向上にも大きな意義があると考えられます。

「プラスちゃんくらぶ」に所属する学生は、教員を目指す学生に限らないが、地域の中で経験を積むことで、大学卒業後、社会人になるにあたって求められるコンピテンシーを磨くことができる。そのためには、PDCA サイクルを意識し、得られた反省点を次に活かしたり、経験者が翌年度には指示役を担ったりと、活動を長いスパンで捉え、継続的に取り組んでいくことが肝要となる。

そして、こうした持続的な「地域学校協働活動」を推進していくためには、関係各所との関係が一回きりにならないよう、継続的で互恵的な関係を築いていくことが重要なのは言うまでもない。

今回の広沢小学校のイベントにあたっては、イベント実施後も、保護者の会の会長が幾度となく大学に訪れ、学生と共にイベントの振り返りをしたり、次年度の計画について話し合いを行ったりした。学生たちの懇親会にも足を運んでくれた。このような関係性の継続が、次年度のイベント開催に向けて、学生の意欲を促すことになる。

7 おわりに

今回の広沢小学校のイベント「広沢小 あそび まなびの広場」には、延べ 150 名の小学生が参加、延べ 157 名の協力者が関わった。学生たちは様々な立場の人と協働してイベント運営に携わることができた。

また、5 日間実施されたイベントのうち、2 日間 J:COM の取材を受けることになった。いずれも地域情報を扱う番組の取材である。両日とも学生がインタビューを受け、自分たちの企画や活動を広く伝えることができた。このように自らの活動を発信する機会を得ることで、学生たちは、その活動の意義を再認識することができ、活動に誇りを持つことができる。

今後も、地域において期待される活動を、地域の方々と共に推進し、プラスちゃんと共に地域に＋（プラス）をもたらすことができるよう、活動に励んでいきたい。

付記

本活動は、十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。学生に活動の場を提供して下さったみなさま、学生の成長を支援して下さった全ての方に感謝申し上げます。また、2022 年度は、広沢小学校の保護者の会の会長山崎雄一さまをはじめ、広沢小学校のご関係のみなさまに多大なるご協力いただいた。深く感謝申し上げます。

<参考文献>

星野祐子・安達一寿・塚田昭一・名塚清（2021）「小学生を対象にしたオンラインプログラミング

教室の実践—アンプラグド型プログラミング教育の実施効果を考える—」『地域連携共同研究所年報』第 6 号（2020 年度） 十文字学園女子大学 pp.11-23

星野祐子・安達一寿・塚田昭一・名塚清（2022）「小学生を対象にしたオンラインプログラミング教室の実践（第二報）—電子キットを用いたプログラミングの実施効果を考える—」『十文字学園女子大学地域連携共同研究所年報』第 7 号（2021 年度） 十文字学園女子大学 pp.9-19

文部科学省（2017）『地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン』

<https://manabi->

[mirai.mext.go.jp/document/gaidorain\(tiikigakkoukyoudoukatsudounosuishinnimuketa\).pdf](https://manabi-mirai.mext.go.jp/document/gaidorain(tiikigakkoukyoudoukatsudounosuishinnimuketa).pdf)

（2023 年 6 月 1 日参照）

文部科学省（2020）『これからの学校と地域 コミュニティ・スクールと地域学校協働活動』

https://manabi-mirai.mext.go.jp/upload/korekaranogakkoutotiiki_pamphlet2020.pdf

（2023 年 6 月 1 日参照）

野火止用水におけるホタル再生プロジェクト —HUG ネットによる 6 年間の取り組みの成果—

Firefly Restoration Project in Nobidome-Yosui River
—Results of efforts by HUG Net for 6 years—

星野 敦子¹⁾ 工藤 一²⁾ 永瀬 巖³⁾
Atsuko HOSHINO Hajime KUDO Iwao NAGASE

1) 十文字学園女子大学教育人文学部・児童教育学科 2) 畑中ホタルの里づくりの会 3) 川爺

キーワード：野火止用水 ホタル再生 環境保全活動 HUG ネット

要旨：2018 年度から 6 年間にわたり、地域環境ネットワーク HUG ネット」として、野火止用水における「ホタル再生プロジェクト」に取り組んできた。成果として、以下の 5 点にまとめることができる。①「畑中ホタル愛好会」の念願であった、西分橋下流地域での放流が実現し、「野火止ホタルの里を作る会」「川爺」など、他の団体との連携を図ることができた。②2018 年から 2020 年の 3 年間はヘイケボタルのみを放流していたが、条件が整っているのに成虫化率が低いことから、2021 年からはゲンジボタルの放流も開始した。その結果ゲンジボタルのほうが環境に適応していることが明らかとなった。③ヘイケボタルの成虫化率が低い要因は、主として川の流速にある。④川爺などによる環境保全活動により、野火止用水の水環境がホタルの生息に対して適正な状態に保たれている。⑤「畑中ホタル愛好会」は、幼虫の飼育や放流などを行っているが、ホタル再生に向けては、餌であるカワニナの確保、野火止用水の環境保全などもあわせて行う必要があり、これについては主として「川爺」が担当した。いずれの団体も高齢化が進んでおり、体力的に厳しい面もあるが、「HUG ネット」の枠組みの中で協同的な活動が展開できたのは大きな成果である。

1 はじめに

「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」（通称：HUG ネット）は、十文字学園女子大学が、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC）に採択されたことを契機として、2015 年 3 月に設立された。新座市内で野火止用水や雑木林に関わる地域環境保全、まちづくり等の活動をしている団体をネットワーク化し、十文字学園女子大学がプラットフォームとなり、地域団体を支援する新座市の関係課が、それまでは実現できなかった団体同士の横のつながりを作り、「安らぎと憩いを求め、野火止用水とその周辺に人が集い、子どもが親しめる空間づくりを目指す」ことを目的として、活動を継続している。2021 年 3 月には、これまでの活動成果が認められ、「令和 2 年度埼玉県彩の国環境大賞優秀賞」を受賞している。

「野火止用水におけるホタルの再生」は HUG ネット設立当初からの念願であったが、実際に「ホタル再生プロジェクト」を立ち上げて活動を開始したのは 2018 年度からである。ホタルの再生を目的として、「畑中ホタルの里づくりの会」（通称：畑中ホタル愛好会）が 2017 年に HUG ネットに入会したことが直接的なきっかけであり、それまで積み上げてきた畑中ホタル愛好会の実績を生かすとともに、他の HUG ネットメンバーとの連携により最強のホタル再生チームが創設された。

本論文は 2018 年から 2023 年までの 6 年間の「ホタル再生プロジェクト」の活動の経緯と成果について明らかにすることを目的としている。

2 HUG ネットの組織と「ホタル再生プロジェクト」

2. 1 HUG ネットの構成

表1は「ふるさとの緑との野火止用水を育む会」(HUG ネット)の所属団体(2023年4月8日現在)を示している。市民団体13、町内会2、大学1、新座市関係課8となっており、市内16団体と新座市とのネットワークである。新座市のHUG ネット担当窓口は、2023年度より「新座市立歴史民俗資料館」が担当している。

活動はプロジェクト方式をとっており、現在以下の5プロジェクトが活動している。

A: 自然環境保全プロジェクト: 野火止用水や雑木林の自然環境保全活動、樹木剪定、プレート管理、クリーン活動他

B: 子どもの自然体験プロジェクト: 雑木林や児童センターにおける工作、遊び、料理等の自然体験活動

C: 黒目川体験プロジェクト: 黒目川における川探検、魚とり、水質検査、水性生物の観察など

D: 研修プロジェクト: 川や雑木林等、環境保全活動地域の見学、野火止用水に関わる研修など

E: ホタル再生プロジェクト: ホタルの幼虫の放流と環境保全を通して、ホタルの再生を目指す

【表1】「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」所属団体

2023年4月8日現在

	市民団体等	代表者
1	川爺	永瀬 巖
2	野火止用水美化ピカ隊	中島 賢治
3	環境保全協力員の会	横山 稔
4	新座市グリーンサポーター	みどりと公園課
5	雑木の会	島田 保
6	野火止ホタルの里を作る会	須田 庄次
7	畑中ホタル愛好会	工藤 一
8	チーム・キャロット	高畑 正
9	新座市観光ボランティアガイド協会	小林 直人
10	サンアール10	五月女 精一
11	西分町内会	臼田 亮
12	新堀一丁目町内会	伊藤 信太郎
13	新座稲門会	伊藤 雅夫
14	特定非営利活動法人 オハナプロジェクト	佐野 浩子
15	野火止緑道環境保全ボランティア あかねこくらぶ	峯崎 なお子
16	新座市立歴史民俗資料館 (HUG代表窓口) (生涯学習スポーツ課)	川端 真実
17	まちづくり未来部みどりと公園部	
18	インフラ整備部道路管理課	
19	インフラ整備部道路河川課	
20	教育総務部生涯学習スポーツ課	
21	総合政策部シティプロモーション課	
22	市民生活部地域活動推進課	
23	市民生活部環境課	
24	十文字学園女子大学	星野 敦子
25	相談役(前会長)	佐藤 弘信(川爺)
26	顧問(埼玉県魚類研究会)	金沢 光

出典: 著者作成

「E:ホタル再生プロジェクト」は、「畑中ホタル愛好会」と「川爺」が中心となり、「野火止ホタルの里を作る会」「西分町内会」などが連携して活動を行っている「畑中ホタル愛好会」は、放流会にむけて、ホタルの幼虫の育成を行っている。「川爺」は、カワナナの捕獲・投入、水環境保全活動、水質検査などを中心に担っており、放流会後は、連日観察を実施している。

木村他（2008）は滋賀県守山市において、水環境保全活動に取り組んでいるコミュニティに対する調査を行い、活動内容について明らかにしている。これを見ると、活動初期は、清掃等の水質保全のための活動が中心となるが、水質が改善してくると、生き物飼育活動がはじまり、その中でも、最も熱心に取り組まれているのがホタルの飼育活動であった。さらに、ホタルの飼育について、専門知識が必要とされることから、組織内に専門組織を設置した団体も多かった。ホタルの飼育が、組織の活性化を促していることが明らかとなっている。

2. 2 「畑中ホタル愛好会」の活動経緯

2004年11月に「畑中ホタル愛好会」が発足し、2007年には「せせらぎ」（ドーム内の人工的な川の流れ）が完成した。これは長野県辰野町のホタル施設を参考として作られたそうである、ホタルの幼虫の飼育は、8名のスタッフが当番制で飼育小屋2棟（ホタルハウス、スーパーハウス）ならびにホタルビオトープ「せせらぎ」において飼育管理を行っている。最初は畑中地区に生息していた「ヘイケボタル」のみであったが、2008年から「ゲンジボタル」の飼育も始めた。「ゲンジボタル」は飼育が難しく、なかなか安定した数の終齢幼虫を育てることができなかったが、山梨や都内などいろいろなところに勉強に出向き、研究を重ねた結果、現在では300匹前後の終齢幼虫を安定して飼育できるようになった。また、「ヘイケボタル」についても、最初は水替え方式をとっていたが、浄化装置付きの循環式に変更したところ、毎年10000匹前後の終齢幼虫を安定して育成できるようになった。

その後、ホタルの復元を目指し、市内の様々な地点で実験をしたり、水を採取して幼虫を育てたりしてきたが、結果として野火止用水が最適であるという結論に達した。2017年にHUGネットに入会することになった理由を、工藤会長は以下のように述べている。

「できれば西分地区で幼虫の放流をやりたいと思いました。しかしながら、私たちの活動フィールドは畑中であり、西分には『野火止ホタルの里を作る会』があるので、私たちが西分で勝手に活動するわけにはいかない。そこで、『HUG ネット』に加入すれば、西分のホタルの会と一緒に、野火止用水で活動できるのではないかと思います。」

「畑中ホタル愛好会」の加入は、HUG ネットにとっても大きな希望となった。2018年度から「E:ホタル再生プロジェクト」をたちあげ、4月には第1回のホタル放流会を開催した。2023年度まで6年間継続して、野火止用水において、ホタルの幼虫の放流を行い、野火止用水沿いをホタルが飛び交う様子が、毎年見られるようになった。また、畑中の「せせらぎ」ではすでに「ゲンジボタル」も「ヘイケボタル」も自生している。



【写真1】畑中の放流会



【写真2】畑中ホタルビオトープ「せせらぎ」

3 「ホタル再生プロジェクト」の成果

3. 1 放流事業の経緯

表2は西分橋下流付近におけるホタルの放流数と成虫化数を示している。2018年には第1回の放流会を4月28日に開催し、西分橋下流地域ならびに本多緑道において、それぞれ約1000匹のヘイケボタルの幼虫を放流した。ヘイケボタルは体が小さいため、水流に流されないように、用水に入ってからわきの草むらあたりに、餌となるカワニナと一緒に静かに放流するという方法をとった。西分下流地域における成虫化率は約2%であった。

2019年度は、平林寺で国の調査があるとのことで、影響を考慮して西分橋下流地域では放流を見送り、野火止用水公園（岸から放流）ならびに、本多緑道（用水に入ってから放流）において、ヘイケボタル1,500匹とカワニナの放流を行った。野火止用水公園は、子どもが池に入ってから遊んだり、水が枯れたりという状況があり、成虫化率は0%であった。本多緑道は、2018年度と同様、2～3%となった。

2020年度まではヘイケボタルのみの放流となった。西分橋下流地域においては、1900匹とこれまでで最も多い幼虫を放流したものの、成虫化率は2.1%と満足のいく結果とはならなかった。水質検査の結果等、様々な要因を考慮しても、成虫化のための阻害要因を見出すことはできず、唯一の可能性は、ヘイケボタルの体の大きさに比して、水流が早すぎるのではないかという点であった。

「畑中ホタル愛好会」ではゲンジボタルの飼育にも成功していたことから、2021年度からはゲンジボタルの放流も併せて行うこととなった。2021年度には100匹、2022年度には200匹、そして2023年度には160匹（放流地域はやや範囲を拡大）の放流を行った。その結果、ヘイケボタルの成虫化率が低下傾向にある一方、ゲンジボタルのほうは年々成虫化率が向上し、2023年度には

【表2】 西分橋下流地域における幼虫放流数と成虫化率

年度	ヘイケ			ゲンジ		
	放流数	成虫数	成虫化率(%)	放流数	成虫数	成虫化率(%)
2018	1000	20	2.0			
2019						
2020	1900	40	2.1			
2021	1600	21	1.3	100	7	7.0
2022	900	8	0.9	200	32	16.0
2023	500	1	0.2	160	108	67.5

出典：川爺の観察記録に基づいて著者作成

67.5%となった。しかしながら、23年度については、放流の時期に比較して、飛翔が早すぎることで、また飛翔する成虫の数が多すぎることから、23年度に放流した幼虫ではなく、前年に成虫化したホタルが自生したものと考えられる。

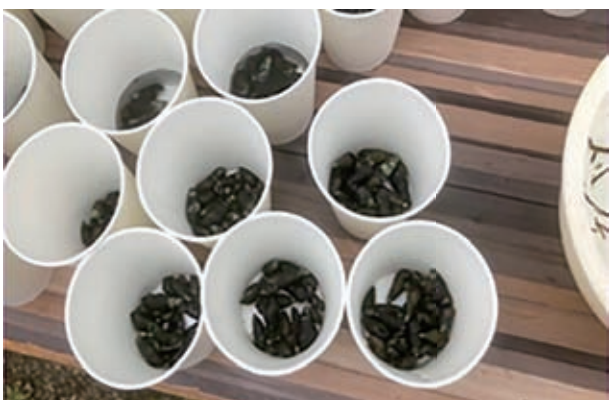
この点について、飛翔する時期が早すぎるということと合わせ、2022年12月8日の川爺による調査で用水内にゲンジボタルの幼虫一匹が確認されている点も、自生説を裏付ける根拠となるものである。また幼虫の餌であるカワニナについても2020年くらいから自生していることが確認されている。



【写真3】2022年度放流会であいさつする工藤会長



【写真4】用水に入って放流する学生たち



【写真5】餌となるカワニナ



【写真6】ヘイケボタルの幼虫

3. 2 野火止用水の水環境の実態

表3は野火止用水（西分橋下流地域）の水質検査と水生生物調査の結果である。いずれも川爺のメンバーが直接検査・調査を行っている。

川爺は定期的に水質検査を合わせて、「川床の清掃（堆積したヘドロの除去）」「ゴミの回収除去」「法面に繁茂する草木の刈込み」「外来生物の駆除」等を実施して、野火止用水の環境保全に努めている。

表4は、坂井他（1992）によるホタルの生息環境にふさわしい条件を示したものである。表3と表4を比較すると、以下の特徴が明らかとなる。

【表 3】 野火止用水（西分橋下流地域）の水質検査と水生生物調査

2023/06/07 水質検査			2022/0901 全国水生生物調査			
測定地点		西分橋下流	指標生物	水質階級Ⅰ	なし	0
気温		24.5℃		水質階級Ⅱ	カワニナ類	23
水温		21.0℃		水質階級Ⅲ	なし	0
COD		4		水質階級Ⅳ	アメリカザリガニ	3
PH		7.5	その他の生物	エビ・昆虫・カニ・貝類	サホコカゲロウ	4
EC		199			ニンギョウトビケラ	7
NO ₂ -N		0.005			ヌマエビ	1
NH ₄ -N		0.2			タイワンシジミ	1
透視度	最大値	68	魚類		ヌマムツ	9
	最小値	67	流れの速さ		普通 毎秒30-60cm	
	平均値	67.5	川底の状態		頭大の石・こぶし大の石・泥	
水質指標	川底の感触	2	水のにおい		においは感じられない	
	水のおい	1	水のごり		透明またはきれい	
	ゴミの量	2				
河況項目	流速	0.49m/s	調査場所:野火止用水西分橋下流 調査団体:川爺 調査参加人数:9人 測定者(代表者):五月女精一			
	流れ幅	2.1m				
	平均水深	0.163m				
	水量	0.168m ³ /s				

出典：川爺の観察記録に基づいて著者作成

【表 4】 ホタルの生息環境集計表

			調査地点番号									
区 分	生 息 環 境 条 件	条 件 の 根 拠	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
水 環 境	水 質	農薬、合成洗剤、工場排水等の汚水が混入しない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△
		貝類が生息している	○	○	○	○	○	○	×	△	○	×
		水素イオン濃度が微アルカリ性(7.25)か中性(7.0)であること	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
		水中の溶存酸素量(DO)が、7.3 ～11.2mg/l	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
	水 温	10℃～20℃の間である	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×
		安定している	△	○	○	△	○	○	○	△	○	○
	日 照	所々陽が射し込む	○	○	○	○	○	○	×	△	○	×
		直射日光がさえぎられる	○	△	○	○	×	×	○	○	△	○
	流 速	静水域や淀みがある	○	○	○	○	○	△	○	×	×	○
		均一ではなく、変化がある	○	○	△	×	△	○	△	△	○	△
	水 深	水面から100 cm位の深さ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
水 辺 環 境	底 質	礫質ないし砂礫質	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○
		砂泥質ないし泥	△	○	○	○	○	○	○	○	△	△
		泥質	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		軟岩、固結シルト	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	水 路	変化に富んでいる	○	△	○	×	×	△	△	×	○	○
		水路と湿地が一体化	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△
		形状 水路が蛇行している	○	△	○	○	△	△	○	○	○	○
	岸 辺 状 況	水際周辺が土である	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
		水辺が湿地で苔や湿った植物がある。	○	○	○	△	△	○	△	△	○	△
	水 辺 空 間	岸辺、水面上にオープンスペースがある	○	○	○	○	△	○	△	○	○	○
	植 生	水中や水際に植生がある	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○
		落葉広葉樹が水際に近い	○	○	○	×	×	○	△	○	○	○
周 辺 条 件	立 地	人工照明(人家、街灯など)の影響が少ない	△	△	○	△	○	○	○	○	○	○
	土 地 条 件	水路の両岸に雑木林や水田(湿地)が隣接している。	○	△	○	○	×	△	○	○	○	○
ホタル成虫確認個体数(平成4年7月27日調査)			10	14	13	4	0	1	0	2	21	0
(凡例 ○:ホタルの生息環境条件を満たしている △:やや満たしている ×:満たしていない)												

出典：坂井他(1992) p82 より転載

【ふさわしい条件】

【野火止用水西分橋下流付近】

①水質	貝類が生息している	カワニナが自生している
②PH	微アルカリ性か中性	7.5
	※ゲンジはまれにアルカリ性（7.5-7.8）のやや高いところにも棲む	
③水温	10℃-20℃ 安定している	21℃
	※冬期は5℃よりも高く、夏期は21℃よりも低い場所 最高でも25℃程度	
④日射	ところどころ陽が差し込む	○
	直射日光が遮られる	◎
⑤流速	静水域や淀みがある	△
⑥底質	砂泥質または泥	◎
⑦岸边状況	水路周辺が土である	◎
	水辺が湿地でコケや湿った植物がある	◎
⑧植生	水中や水際に植生がある	◎
⑨立地	人口照明（人家・街灯など）の影響がすくない	◎

4 まとめ

地域環境保全とコミュニティの創生を目的とした「HUG ネット」による「ホタル再生プロジェクト」の、6年間の経緯について検証を行った。2023年にはゲンジボタルの自生の可能性が認められ、新たな検証が待たれるところである。

「ホタル再生プロジェクト」の成果について、以下の5点にまとめることができる。

- ①「畑中ホタル愛好会」の念願であった、西分橋下流地域での放流が実現し、「野火止ホタルの里を作る会」「川爺」「西分町内会」「観光ボランティアガイド協会」など、他の団体との連携を図ることができた。また HUG ネットメンバーではないが、以前からホタルの育成を行っている「新栄町内会」も放流会に参加するなど、連携の輪が広がっていった。
- ②2018年から2020年の3年間はヘイケボタルのみを放流していたが、条件が整っているのに成虫化率が低いことから、2021年からはゲンジボタルの放流も開始した。その結果ゲンジボタルのほうが環境に適応していることが明らかとなった。
- ③ヘイケボタルの成虫化率が低い要因は、主として川の流速にある。
- ④川爺や野火止用水美化・びか隊などによる環境保全活動により、野火止用水の水環境がホタルの生息に対して適正な状態に保たれている。
- ⑤「畑中ホタル愛好会」は、幼虫の飼育や放流などを行っているが、ホタル再生に向けては、餌であるカワニナの確保、野火止用水の環境保全などもあわせて行う必要があり、これについては主として「川爺」が担当した。いずれの団体も高齢化が進んでおり、体力的に厳しい面もあるが、「HUG ネット」の枠組みの中で協同的な活動が展開できたのは大きな成果である。

< 参考・引用文献 >

- 星野敦子（2015） 大学と行政の連携による地域人材育成制度の評価、地域活性学会 第7回研究大会年会論文集. 2015, p219-222.
- 星野敦子（2016） 新座市における大学との協働による人材育成― 地域に貢献する人材を育てる―, 産学官連携ジャーナル Vol. 12 No. 2, pp20-22
- 星野敦子（2017） 新座市における人材育成のための生涯学習制度と地域ボランティアの展開、十文字学園女子大学紀要 Vol148, p255-267
- 星野敦子（2019） 地域環境を生かした子どものための自然体験活動の実践と評価、十文字学園女子大学地域志向教育研究プロジェクト研究成果論文集、pp135-144
- 星野敦子、星野祐子、名塚清、佐藤弘信、星野敦子（2020） 地域人材育成と地域環境保全を目指したネットワークの構築、地域連携共同研究所年報 第5号、pp39-48
- 木村道德、宮城亜由子、井手慎司（2008） コミュニティ組織による水環境保全活動の継続要因に関する研究 ―滋賀県守山市の自治会を事例として―、環境システム研究論文集 vol. 36、pp475-482
- 坂井一浩、羽山英人、甲岡宏次（1992） 水環境の調査手法について―ホテル調査を事例として―、第36回北海道開発局技術研究発表会、pp79-84

身体を通して音楽をつかむ実践 —学生による初等音楽科のデジタル鑑賞教材制作と対話的な学習活動の探求—

Grasping Music with Body and Mind
Students' production of digital learning materials for elementary music classes
and exploring interactive learning activities

久保田 葉子¹⁾
Yoko KUBOTA

狩野 浩二¹⁾
Koji KARINO

棚谷 祐一²⁾
Yuichi TANAYA

川瀬 基寛²⁾
Motohiro KAWASE

久保 裕子³⁾
Yuko KUBO

小林 愛佳¹⁾
Manaka KOBAYASHI

1) 十文字学園女子大学・児童教育学科 2) 同・社会情報デザイン学科 3) 同・学生支援課

キーワード：音楽鑑賞 デジタル学習教材 言語活動 音楽教育 アンサンブル指導

要旨：本プロジェクトでは、教職を目指す学生が初等音楽科のデジタル学習教材を制作した。体を動かしながら音楽を鑑賞することによって、「音楽を形づくっている要素」を認識・言語化し、個人学習、授業、参加型コンサートに応用可能な動画作品に仕上げることができた。一つの楽曲でも音楽の魅力を伝えるためには環境や対象者に合わせて進行や演出を工夫する必要がある、動画制作とその活用方法の研究を通して学生の思考力（楽曲分析・構想・他者との協働を創造する力）が鍛えられた。①音楽の構成や特徴を体の動きを通して理解し、デジタル学習教材を対話的な学習やコンサートに活用する方法 ②動画の収録と編集にあたり必要となる手順と個々の作業の目的 ③イメージを伝えるチラシデザインの指導について ④少人数によるコンサートのアンサンブル指導、とくにアレンジ面における助言について ⑤子どもが体を通して身の周りの事象を理解し思考することについて、指導者それぞれの立場から述べる。

1 はじめに

本学は、包括連携協定を締結している近隣自治体の協力を得て、地域を志向した教育・研究・社会貢献の取り組みを展開している。代表研究者の久保田は、平成 27 年度からふるさと新座館ホールにてクラシック音楽の演奏と学生による総合表現の発表で構成された「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」に取り組み、地域と連携した学修が学生を成長させることを目の当たりにしてきた。令和元年度からは公益財団法人和光市文化振興公社と協働して、地域の小学生が学生の共演者として参加するワークショップや公演の企画制作に携わってきた。学生により選ばれた研究テーマは、歌唱や踊りによる参加型コンサートの企画制作（令和元年）、即興演奏（令和 2 年度）、手づくり楽器によるアンサンブル（令和 3 年度）、小学生を対象とした音楽の ICT 教材制作と活用方法の研究（令和 4 年度）で、歌唱や器楽の演奏だけでなく、特別な音楽経験を前提としない誰でも参加できるアンサンブルの探求を含んでいた。いずれの企画も将来、学生が教壇に立った時に授業や他者とのかわりにおいて応用することが可能となる普遍的な内容であった。

2 新座市・和光市と連携した研究の概要

本年度は、新座市・和光市の二つの自治体でそれぞれ実践されていた音楽による表現活動を統合し、より広域で連携して複数のプロジェクトを積み上げる形をとった。

新型コロナウイルスの感染拡大により、音楽科の授業においても歌唱や器楽演奏、鑑賞等のグループ活動に制約が生じた。学生自身も大学の授業でオンラインを活用し、学びを止めない工夫をする中で知識や技術、思考力を高めてきた。その経験を生かして今回、児童がタブレット等を活用し

て個人学習できるだけでなく、反転授業の形でクラスまたは学年単位で発展的な学習に活用することができる動画教材を二種類制作した。一つは体を動かしながら音楽を鑑賞し、音楽のしくみを理解することができる「トレパーク」（チャイコフスキー作曲）である。音楽に合わせて踊ることでリズム、強弱、音の高さといった音楽を形づくっている要素を認識し、曲の構成も把握できる内容となっている。二つ目は、「小さな世界」（Sherman 作詞・作曲）を日本語/英語/ドイツ語の3ヶ国語で歌う歌唱教材である。音楽を理解するためには、耳で音をよく聴き、意味のあるまとまりとして捉え、アクセントや音色に気を配りながら発音してみること、また、自分が出した音を聴いて判断する力が必要である。この教材は、字幕（視覚情報）を基にするのではなく、耳で聴いて真似をしながら外国語で歌えるように工夫されている。一つの曲を複数の言語で歌う活動を通して、児童が外国の文化や言葉に関心を持つきっかけになることも目指して制作した。

動画の収録にあたり、漏れなく素材を録音・録画して学生が自力で編集できるよう、川瀬基寛教授が台本の書き方と編集ソフト Adobe Premiere Pro の操作方法を指導した。録音とミキシングは外部の専門家に依頼し、録画には学内の機材を用いた。映像と音源を合体させる編集は、児童教育学科の学生と筆者が担当し、技術面で川瀬基寛教授と棚谷祐一教授より支援を受けた。編集を終えた動画は新座市教育委員会に寄贈し、地域の児童に届けるための助言を受け、令和4年12月22日に新座市立大和田小学校にて学生が訪問授業を経験する機会を得た。筆者と学生は、事前に動画を見て内容を把握していた児童と対面で交流し、体を使って鑑賞することで音楽の仕組みを発見していく学習方法の効果や、身体表現をした後で「動き」の意味を言語化する授業の実際、そして、一人一人が発見したことを対話的な授業に発展させる難しさや喜びを知ることができた。

授業に続き、令和5年3月29日には和光市民文化センターサンアゼリア小ホールにて公益財団法人和光市文化振興公社と本学の協働主催でコンサート「未来につなげよう音楽の輪～楽器と体で生み出すハーモニー～」を実施した。ここでも動画を事前に公開して、来場者参加型のプログラムをつくることができた。

一年間にわたり音楽科の教材づくりと、その活用方法の研究を続けた学生は令和5年度「第39回学習デジタル教材コンクール」（主催：公益財団法人学習情報研究センター）で成果を発表し、佳作に選出された。

3 研究目的と方法

音楽科の学習を通して児童や学生が世界のさまざまな音楽、言語、文化に興味を持ち、関心を持ったことについて調べたり、人と意見交換をすることでさらに知識を深めたりして交流を生み出し、豊かな人生を送れることが筆者の願いである。

音楽の鑑賞では、一瞬で消えてしまう音の細かいニュアンスの違いを聞き分ける集中力や、音楽がどのような仕組みで成り立っているのか分析的に捉える力が必要である。音楽を形づくっている要素を知ればより内容を記憶しやすく、自身で再現することも可能となる。何度も繰り返し聴くことによって楽曲や音色に対する気づきが増えて、自ら発見する喜びを味わうことができる。学生たちは、児童が繰り返し音楽を聴く経験を通して音楽の魅力をより深く発見していき、「自ら聴き取る体験」こそが音楽が好きな児童を育てることにつながると考え、教材づくりを開始した。

音楽科の教材は、できるだけ良い音響で撮影をしたいと考えた。新座市教育委員会に相談し、ふるさと新座館ホールと Steinway ピアノを使わせていただけることになった。児童はテレビ番組や動画の視聴に慣れており、メリハリのある構成にしないと飽きてしまうことが予想されたため、解説の入れ方、適切な区切り方を含めた台本づくりについて事前に学修した（第4章参照）。

歌唱教材「小さな世界」では3つの国の言語とピアノ伴奏を同時に提示する場面があるが、デジタルの強みを生かして画面を四分割し、音に関しても4つが左右からバランスよく分かれて聞こえてくる仕掛けを施した。これにより、児童に「好きな言葉を選んで一緒に歌いましょう」と呼びかけることができ、一人一人の主体性を尊重したいという学生の思いも表現することができた。

体を動かしながら鑑賞する「トレパーク」では、まず制作者自身が音楽に乗って動けるかが問わ

れた。音楽に合わせた動きにはいろいろな可能性があるが、教材として「音楽を形づくっている要素」がはっきり動きに表れることを重視した。動きを探す過程では筆者はダルクローズやオルフの音楽教育から影響を受けたが、学生もオリジナルの身体表現を複数見つけ出すことができた。これらの身体表現は、①一つの動きを覚えたらさらに難易度の高い動きに挑戦することで意欲を育む ②動きの意味を児童が互いに説明することで言語活動の充実につなげる ③動画を見た児童自身が音楽に合った表現を考え創造性を発揮するなど、さまざまに活用することができる。音楽を聴いた時に、リズムに乗って曲調に合った自分らしい表現ができることは、心と体が音楽と一体になっていることを示している。私たちの制作した教材が、児童が音楽に親しみ、世界のさまざまな音楽にさらに関心を持つきっかけとなれば幸いである。



体を動かしながら鑑賞する
「トレパーク」



日本語・英語・ドイツ語で
歌う「小さな世界」

次に、動画制作の事前指導と公演チラシの制作指導をした川瀬基寛教授、コンサートの企画・演出・出演を経験した児童教育学科の学生 小林愛佳さん、出演者個々の経験や個性を生かす編曲を担当し共演した棚谷祐一教授それぞれの立場から、音楽科の教材づくりの手順や実演の工夫について記述する。(以上、久保田葉子)

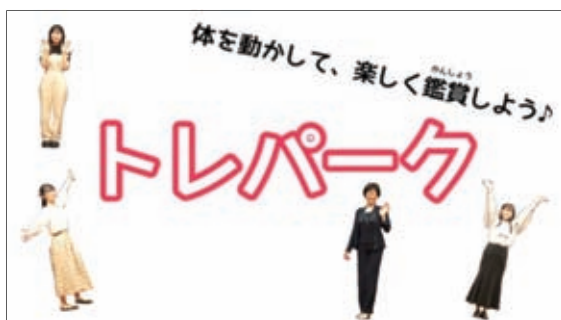
4 ゴールを可視化する動画制作の準備と指導

映像制作にはある程度決まったワークフローがあり、その意味と目的を知らないと最終的な目的に沿った映像表現やメッセージ性を表現することが難しい。動画制作者である児童教育学科の3年生は映像制作の初心者であったため、まずはワークフローの理解と企画・構成を理解するための特別講義を実施した。

ワークフローは一般的な番組制作と同様に、「企画→構成→絵コンテ→素材撮影・音声収録→仮編集→本編集→ポストプロダクション(MA、テロップ、トランジション効果など)→オーサリング(映像データをDVDやYouTube用データなどに変換)→完成」とした。企画・構成に関しては、動画のゴールである「目的」と「題材」が決まっていたため、絵コンテを中心に映像のイメージを可視化する作業から入った。動画制作者は実際の出演者であるため、この絵コンテの作業により明確な画面イメージを持つことができる。絵コンテでは「カット割り」という意識でキーとなる画面(動き)を描き、そこで流れる音楽と映像のサイズ感をイメージして可視化していった。この絵コンテが設計図となり映像素材の収録ができるため、この部分を重要視した。ただし、映像制作初心者には画面に映し出される出演者の画面サイズや空間の空き、動きを伴うサイズ調整は難しい点もあり、この点は指導者である川瀬が微調整した。加えて素材撮影時のカメラマンも川瀬が担当したが、編集作業は参加者が行うため、編集のしやすさと動画鑑賞時に小学生でも理解できるようにすることを考慮して、画面は原則Fix(固定カメラ)とし、全体の流れが分かるサイズ感とマルチカメラ(今回は2台想定)の同時収録として、編集時にインサートすることでポイントとなる部分をアップ映像として理解を促進させる方向とした。この方向性にしたことで、参加者も絵コンテの段階でイメージが持ちやすく、出演時には自分の動きがカメラにどのように収録され観られるのかを意識できていた。しかし、ピアノ伴奏と踊りや歌唱がずれるとNGも多く出るため、マルチカメラ構成は断念し、部分撮りに変更して音の繋がりを意識した編集とした。

短期間かつ映像制作の基礎を学ぶだけでは限界もあり、次作の機会があればマルチカメラによる実践ができるように考慮したい。ただ、このような客観性を持った映像制作になったことで、映像

制作初心者であったが明確な目的に沿った表現となり、観て楽しめる作品になったと感じる。(川瀬基寛)



5 イメージを伝えるコンサートのチラシデザインの指導

コンサートのチラシデザインについては、デザインを主に学んでいる社会情報デザイン学科の3年生に依頼した。その中でデザイン案をコンペ形式として1作品選び採用することとした。採用された作品は微修正した後に印刷されることとなった。

このようなイベント告知に際しては、情報の取捨選択が重要である。提供される情報はタイトル・場所・日時・出演者・曲目などに加え、公共施設利用に関するルールの特記など概ね多く、この情報に対しプライオリティを決める情報整理から始める指導をした。

A4サイズ・縦型のチラシ形態であり、表と裏の2面フルカラー印刷という設定から、一般的な「表面：表題とキービジュアル、演目、日時、場所」「裏面：マップ、ルール、出演者、付随情報」とした。まずはコンサートのイメージを定着させるためタイトルの「未来につなげよう音楽の輪」、サブタイトルの「楽器と体で生み出すハーモニー」からイメージカラーの選定とキービジュアルの作成からスタートさせた。その後、実際の画面デザインを作成して行くのだが、広告のように1C1V（ワンキャッチ・ワンビジュアル）の手法が使えないほどの文字情報量であるため、チャンキング（情報のユニット化）を意識したで画面構成する方針をとった。

基本的にはエリア・アライメント（領域配列）がデザインの基本となるが、その中でもキービジュアルとサブビジュアルの配置を意識しなければ、ただ画面が煩いだけになってしまうため注意した。グラフィックデザインの学習をしている3年生ではあるが、やはりホラー・ヴァキューイ（空間恐怖）の傾向が多く、余白や空間を埋めようとする。しかし、情報の羅列にならずコンサートの楽しさや目的のイメージを伝えるためには、ある程度の余白やリズムが出るようにしなければデザインとしては効果が薄い。そのため、バックグラウンドをホワイトではなくペールトーンのグリーンとして、サイズ違いのドット形状のオブジェクトを配置しホラー・ヴァキューイを回避すると同時に、他のオブジェクトもグリーン系で統一したデザインとなった。

なお、デザイン作業に関してはAdobeのグラフィック系ソフトウェアで作成した。PCはApple社のMacを使用した。支給された画像素材はPhotoshopで加工・編集し、全体のデザインはIllustratorで作成した。印刷に関してはPDFに変換し、完全原稿での入稿となるが、PDFも印刷に適した種類や印刷所から指定される場合も多く（今回はPDF/X1-a:2001形式）、形式によりIllustratorでの透明度設定などがPDF変換に影響を与えることもあり、この部分は指導している川瀬が担当した。採用されたデザインは、柔らかな音のイメージと「楽しむ」方向性に重きを置き、目的に沿った表現としてコンサートのイベント告知として及第点の作品になった。制作者である社会情報デザイン学科の3年生は、この結果からもデザイン理論を実践から習得していったと感じる。(川瀬基寛)



6 コンサートの企画・演出について

今回は、『未来につなげよう 音楽の輪～楽器と体で生み出すハーモニー～』というタイトルの通り、どの年代の方も参加できるような内容で、会場全体で体を使って鑑賞したりハーモニーを生み出したりするプログラムを含めたコンサートだった。

私は、参加型プログラム『トレパーク』のMCを務めた。事前に練習用の動画を制作し、コンサートのチラシに動画のQRコードを載せていた。来場者の中には、動画を全く視聴していない人、動画を見て少しなら踊ることができる人、完璧に踊れるまで練習した人、などさまざまな人がいると予想した。そのため、会場の誰もが参加できるように、踊りについてフレーズごとに解説しながら進行した。もう踊ることができる、体を大きく動かして踊りたい、というような人は客席の前の空きスペースに呼んだ。客席に座ったままの人も参加できるように、簡単に手や足だけを動かす動きと私たちと同じく立って踊る動きの2種類の動きを選択できるようにした。出演者の人数の関係で、座ったままの動きをする人がいなかったが、見本がなくてもすぐにできるような簡単な動きを提案した。「立って踊るのは恥ずかしい。」と思う来場者もいたと考えられるが、選択制にしたことで会場の誰もが参加することができるプログラムになったと感じている。

また、私は『Greetings』をソロで歌わせていただいた。久保田先生によるピアノソロのあとに私の独唱だったため、世界観を大切にしたい演出にしたいと考えていた。しかし、独唱の次は『ラデツキー行進曲』でパッと明るく雰囲気を変えたかったため、いつMCをするかととても迷った。結果として、独唱から『ラデツキー行進曲』の間、場の空気を一転させ、明るくすることを優先した。ピアノソロと独唱の間にMCを入れることになったが、私の『Greetings』への想いを演奏前に伝えることができた。演奏後、すぐに切り替えることで来場者に「次は何が起こるんだろう。」というワクワク感を与えられたと考えている。

コンサートのスペシャルプログラムとして、『花は咲く』を棚谷先生のアコーディオンによる演奏とともに女声三部合唱で演奏した。このコンサートをしめくくるアンコールの位置づけで、音楽の素晴らしさや、歌うことの喜びを届けたいと考えた。歌唱メンバーはガーベラの造花を持ち、より想いを込めて演奏できた。

この度は、このようなコンサートを開催させていただき、ありがとうございました。企画から開催まで私たちで行うことができ、貴重な経験になりました。(児童教育学科3年 小林愛佳)

7 参加者個々の能力を生かすアレンジについて

活動参加の目的

筆者が「未来につなげよう音楽の輪～楽器と体で生み出すハーモニー～」のリハーサルに参加したのは2022年10月からだった。参加した時点でセットリストはすでにできあがっていたが、アレンジ面での補強が必要と思われる楽曲が2曲あった。以下に具体的な活動内容をかいつまんで記したい。

「RPG」

「RPG」はSEKAI NO OWARIが2013年にリリースした楽曲である。YouTubeに上がっているMVの再生回数だけでも2023年5月現在2.2億回をカウントする大ヒット曲として知られている。この曲を少人数、しかも楽器がピアノ、エレクトリック・ベース（筆者）に加えてキーボード・シンセサイザーの3名のみで成り立たせるというのはかなり大きな障壁があった。というのも、原曲はいわゆるサビ部分を印象づけるため、合計8回も繰り返しているからだ。これは似たような構成をとることが多いJ-Popのなかでもかなり多い方だといえる。この繰り返しの多さは楽曲を覚えやすくする効果をもたらす一方、単調さにつながりやすいというデメリットがある。

では原曲は単調さをどのように回避しているのか？それはおもに、録音作品特有の自由さを活かし、バンドメンバーだけでは演奏できない多様な楽器、具体的にはオーケストラやクワイヤ（合唱隊）をも参加させてゴージャスな装飾を施すことでそのようなデメリットを回避していると筆者は考える。その他にもブリッジ（つなぎ部分）の工夫やミキシング上のさまざまな加工によって支えられていることも確かだが、最大の要因は過剰ともいえる装飾による部分が多い。それを少人数で、ある程度遜色のないよう表現するには、主たる指導者である久保田のコンサートピアニストとしての腕前に多くを期待するほかなかった。とくに間奏部分において、原曲では華麗なオーケストレーションで表現されている要素を敢えて簡略化し、ポリフォニックなアレンジを施すことによって簡素ながらもクラシカルで奥行きのある印象を与えるよう工夫した。

「花が咲く」

この楽曲はいうまでもなく東日本大震災復興支援ソングとして2012年に発表されたものである。演奏用の合唱およびピアノアレンジはゼミ生のKさんが行った。その完成度は素晴らしく、筆者はおもわずKさんに「アカデミックな音楽理論を修得しているのか」と尋ねてしまったほどである。結果としてそのようなことはなく、合唱部としての経験値と、おそらくは生来の耳の良さでこれを仕上げたらしいと知り再度驚くこととなった。

そのようなアレンジに、アコーディオンによる繊細なオブリガートを加えれば更に素晴らしくなるのでは、と考え、筆者によるアコーディオンアレンジおよび演奏を追加した。

紙面の都合上、非常にかいつまんだ報告となったが、今回は指導的立場で参加したにもかかわらず、学生のモチベーションや能力に多くを負うことになった。演奏上の細かい助言等も行ったが、それよりも筆者自身が学ぶものが多かったように感じるコンサートだった。このような機会を与えられたことに感謝したい。（棚谷祐一）

8 結果と考察

一人一人が創造性を発揮することで、グループで演奏した時に一人では決して味わうことのできない響きの重なりを生み出す音ができる。音楽には、演奏や鑑賞を通して自己と対話させたり、他者（共演者、作者だけでなく共に聴く人）とのつながりを深めたりする力がある。学生は好きな音楽をより深く理解し、音楽が持つ限りない可能性と魅力を児童に伝えていこうと、「未来につなげよう音楽の輪～楽器と体で生み出すハーモニー～」という企画名を考え、地域連携による教育プログラムを実施した。小学生と共に体を動かしながら音楽を鑑賞する活動を通して、「音楽で起こってい

ること」を可視化し、音楽を形づくっている要素をより具体的に認識し、楽しみながら音楽を味わえることが理解できた。

筆者は、令和元年、令和2年にドイツの公立小学校で低学年の授業を見学する機会を得た。学校生活全般で視覚に頼らず聴いて記憶する練習を非常に多く取り入れており、児童の集中力と記憶力が非常に高いことが印象に残っている。筆者が紹介した日本の歌を聴いた児童は、文字や絵といった視覚情報に頼らず、耳で何度か聴いて真似することで外国語にもかかわらずすぐに覚えてしまう。日本の歌を覚えたら、建築、言葉、食べ物、学校生活といった文化についての学習と組み合わせ、教科横断的な学びにしていく。今回、音楽科のデジタル学習教材の制作にあたり、学生たちは児童が自分の耳で聴いて判断する経験をたくさんしてほしいと考えた。しかし、字幕がないと覚えられず視聴者の気持ちが前向きにならないのは惜しいため、基本的な考え方は残しつつ、3ヶ国語で歌う「小さな世界」では、教材公開のために用いたYouTubeの特長を生かして、「字幕あり」を選択すれば外国語の歌詞の説明を見られるように工夫した。個別最適な学びを可能にするという観点からも、さまざまなニーズを考慮して複数の難易度を提供し、説明的な要素を必要とするかは個々の視聴者が判断できるようにした。それは音楽鑑賞を通して個人の自由な考えや判断力を育み、児童にこれからも音楽の素晴らしさを発見して欲しいという願いからである。教員養成課程の学生が、児童が自分なりの考えを持ちながら音楽に向き合うにはどのように働きかけたら良いのか議論し、身体表現と解説の方法において複数の選択肢を考え出してオリジナル教材を制作することができたのは、指導法の検討の観点からも収穫であった。

小学校における訪問授業で学生が学んだことは、どんなに準備を重ねても児童の反応が学生の想像を超えることがあること、そして教師として計画通りに授業を進めようとしすぎるのではなく、児童の考えや状態に感性を研ぎ澄ませて、時には大胆に目的地に向かう道や発問を変更しながら、伝えたい内容や本題から逸れないように授業を組み立てる難しさと楽しさである。ICT教材は好きな時間に何度も繰り返し視聴でき、時間芸術としてすぐに消えてしまう音楽を視覚的にも捉えて音楽の仕組みを学ぶのに役立つことや、体で表現した動きについて児童に問うことにより言語活動の充実につなげる可能性を持っていることも体験的に知ることができた。

学生が動画を制作した「トレパーク」と「小さな世界」は、和光市民文化センターサンアゼリアにおけるコンサートでも観客と一緒に体を動かしながら演奏した。コンサートには未就学児から高齢者まで幅広い年代の方が参加した。動画、小学校訪問授業、コンサートと3つの実践において学生たちは同じ楽曲でも音楽作品の魅力を伝えるためには実施形態や環境、対象者に合わせて進行や演出を工夫することを学んだ。参加してくださる人の身になって、想像力を働かせて授業やコンサートプログラムを構成することを経験し、思考力を鍛えることができたことは、地域連携による活動の素晴らしい点であった。



9 子どもはいかにして世界をとらえるのか

情報の出発点

人間が現実を理解するとはいかなることであるか。この世の中に起きている現象を捉えるということは、いわゆる知覚であると一般的には思われている。手許の辞書によれば、知覚とは次のようなことである。「ち かく [0] 【知覚・〈智覚】ーする（他サ）感覚器官が外界の事物をとらえ、そ

れが何であるかを見分けること。また、その働き。視覚・聴覚・嗅(キユウ)覚・味覚・触覚など。「知覚作用 [4]・知覚表象 [4]・知覚麻痺(マヒ) [4]」→ 知覚神経^{*i}」この語釈と同様にして、一般的に視覚や聴覚、嗅覚、触覚、味覚などの五官を通した知覚が現実を把握する術だと思われる。

ところが近年、人間はもっと幅広い仕方で、外界の情報を得ていることが分かってきた。教育研究者であった大田堯と対談した生命誌研究者の中村桂子は、情報は、この地球上に生物が誕生して以来存在するという^{*ii}。つまり生物がこの地球上に発生した時から、何らかの形で、この世界の情報を受けとるようになったのである。当たり前のようであるが、まったくそうした生物が存在しない時代は、情報を受容することが出来なかったわけである。そして、その上で大事なことは、その受けとり方は、ただ単に五官によって捉えたということではない。五官が発達する以前においては、例えば、粘菌のような極めて単純な仕組みで生きている生物においても、自分が嫌う環境を避けて（好む環境や食べ物に近づく）生活していることが知られているし、植物さえも、昆虫による被害を受けると、複数の植物通しが情報の効果をしつつ、外敵から身を守るのであるといわれる^{*iii}。このように生物というのは、さまざまな環境からの影響をうけつつ、生を維持しているのである。言い換えれば、環境からの影響なしには生きながらえないということである。

こうして考えてみると、人類が五官のみによって情報を把握しているというのは、端から無理がある。今日では、細胞の一つひとつが情報を受けとりつつ、反応し、柔軟に対応していることが分かっている^{*iv}。人類は、松葉からしたたり落ちる水滴にも、身体を覆うような霧にも、さまざまに反応している。五官では捉えきれないようなさまざまな刺激を受け、環境からの情報を受けとっている。そのように発想することがまずは大事なことである。ただ単に、教師の発言や同級生の声に影響されるばかりではない。むしろ、声にならない声や視線、その際の湿度や温度、雰囲気のようなものにさえ、豊かに反応しているわけである。例えば、聴覚によって捉えられないような非可聴音さえも、人間は皮膚によって把握しているという研究がある^{*v}。森の中で感じるような背筋の凍るような経験や深い洞窟の中で身体全体が包まれるような不思議な感覚は、人間の身体が環境からさまざまな情報を受けとっていることの証左なのであろう。近年、そうした非可聴音を発生させる音源が開発され、すでに広告の世界などではそれが応用されつつあるというのである。このままぼっとしていれば、教育現場だけが置き去りになってしまうということである。

では、はたしてこうした環境等から受けとられる情報を私たちはいかに生かし、人間の形成に不可欠のものとしていけるのだろうか。その手がかりは、表現活動にあるとみている。というのも、表現活動は、瞬間瞬間にその場の空気や雰囲気、温度や湿度、さまざまな可聴音や非可聴音、もっとも底知れない影響力を受けつつ、実現される世界であるからである。表現する際に、私たちに影響を与える諸要素というものが豊かにあり、それに臨機応変に対応しながら繰り出されるのが表現である。その瞬間瞬間に、何を捉えて、何を捨てているのか。何を採用し、何を採用しないのか。そうした判断が私たちの身体の内側において行われているわけである。それが意識するかしないにかかわらず起きていることなのである。つまり表現するという取り組みは、出力であると同時に、入力である。声を発したり、表情があらわれたり、身体全体が動いたりするのは、アウトプット（出力）でありつつ、インプット（入力）ということである。自らのイメージを表しているようでいて、そのイメージには、その際周囲から受けるさまざまな情報のもとで歪められ、変形される。思いもしなかったようなアウトプットが起こったり、想像を絶するような表出が生まれる。こうしたことがリアルタイムに、瞬間瞬間に生じるのである。まさに、リアリズムの極地である。誤魔化しようのない、いま自らの最大の解釈や表現が目の前に展開するわけである。こうした生の、リアルの、実際の表現と認識の統一体が表現活動の正体なのである。

したがって、広い砂浜でおこなわれる場合と、静かな高原の広場でおこなわれる場合とでは、自ら異なる表現になる。同じようになり得ないわけである。ましてや人間は動的平衡の渦中に存在する^{*vi}。一瞬たりとも同じではない。常に変化しているわけである。同じ個体が、同じように、同じ場所で表現しても、二度と同じ表現はできない。そういう一回限りの世界なのである。

身体と思考

人間が草原などを転がるようなイメージを把握することにおいて、その草原で、コロコロと転がるような直接的な実体験が不可欠であるという。身体の実験が私たちのからだには刻まれ、それらが認識や表現に影響を及ぼしている。このように人間がものごとを捉える際には、身体性がものごととの認識に深く関わっている。例えば、遠近法である。近くのはより大きく、遠くのは、より小さく見える。これは、子どもの頃に、対象物に近づいたり、遠ざかったりする経験から身につくといわれる^{*vii}。赤ん坊の這い這いを想像してみればよいだろう。近づくと大きく見える。遠ざかると小さく見える。しかし、そのものの大きさは変わらない。こうした体験を通して、認識の枠組みが形成されるという。電車に乗っている子どもは、たいてい車窓を眺めているものである。次第に近づいてくる対象物が次第に大きく見える世界に夢中になっているのだろう。こうした原初的な実体験が私たちの思考には深く関わっている。生まれ落ちてから今日に至るまでにさまざまな身体的な経験が刻まれている。それらが学問として再認識される。表現活動は、そうした人間の原初的な経験を再構成する場であり、機会である。

身体と解放（開放）

心身の解放（開放）は、表現活動によって生じることが多い。心身は、表現活動に取り組むことによって解き放たれ、ひらかれていく。一般的に言えば、カラオケなどの歌唱は、心をひらくといわれる。実際、カラオケは人気がある。カラオケでストレス解消などということもいわれる。運動やスポーツなども、ストレス解消にはもってこいである。いずれも身体的な活動が基盤である。心をひらくためには、身体をひらく必要がある。たとえば、椅子に深く腰掛けただけでも、心がひらかれるという研究がある。胸をはるだけでも自信に繋がるという。口角を上げるだけでもよい。これだけで心がひらかれる。ましてや表現活動は、呼吸や身体表現、朗読など、あらゆる身体活動が総動員される。実際、児童や生徒が取り組む表現活動のみならず、学生たちが取り組む表現活動も同様である。そして、心身の解放（開放）は、学習の原点である。解放（開放）されたときに、最も気持ちが集中する。幼児や児童、生徒の場合は、そのことが特に顕著に現れる。したがって、表現活動に取り組む際も、心身の解放（開放）を維持することが大事になる。叱責や小言、お説教より、賞賛の言葉が必要になるのは、こうした原理に基づいているからである。賞賛され、認められ、そこにいてよいということになることによって、表現する場が整えられるのである。楽しそうに表現することによって、心身は解放（開放）され、さらに、もっと表現したいという気持ちもまたあらわれてくるのである。結果として、認識と表現という思考活動のサイクルが回転しはじめる。学習にとって、表現する活動はかくも大事なもののなのである。（狩野浩二）

10 おわりに

本研究にあたり、学内外の多くの方から支援を受けた。新座市教育委員会の皆様には音楽科の教材を収録する会場の提供だけでなく「新座市公式チャンネル」への動画の掲載と、授業実践に向けた協力をいただいた。ふるさと新座館における収録では曾山一峰氏、伊倉浩子氏（舞台技術）、青木正人氏（ピアノ調律・録画）、古山俊一氏（録音）、府川千紗氏（録画）が二日間の収録に協力してくださった。新座市立大和田小学校の全4年生を対象とした2時間の授業は、坂口智校長、真田朋美教頭、4年生の担任の先生方の温かいご指導の賜物であり、児童の積極的な参加が学生を力づけてくれた。和光市でのコンサートにおいては、塚田美穂氏、山崎悟館長をはじめ公益財団法人和光市文化振興公社の皆様が、学生の研究と成果発表が実現するように後押ししてくださった。舞台スタッフの石山武文氏（音響・舞台）、佐藤日菜氏（音響）、梅本博之氏（照明）、佐藤謙行氏（舞台）、青木正人氏（ピアノ調律）、和光市、和光市教育委員会の皆様のご協力と、144名の来場者が学生と共に鑑賞・表現活動に参加して下さったことに大いに励まされた。

学内からは共同研究者以外にも、地域連携推進センターの名塚清氏、地域連携推進課の野口志都代氏、小峯洋美氏、古澤まゆみ氏、広報課の原一彰氏をはじめ多くの方がそれぞれの専門分野で学

生の教育と地域連携活動に参加した。会場で受付誘導やアナウンス、備品の設置等を担当した児童教育学科の学生スタッフ6名の活躍も特筆すべきものであった。音楽の教材づくりとその活用方法の研究に取り組んだ学生たちはこれからも音楽を愛し、どのような課題に対しても周りの人と協働して粘り強く挑み、創造性を発揮していこう。

本活動は十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費及び基盤研究費により実施した。

-
- *i 新明解国語辞典 第八版 (C) Sanseido Co.,Ltd. 2020 より。
 - *ii 大田堯、中村桂子『百歳の遺言——いのちから「教育」を考える』藤原書店、2018年、58-65頁
 - *iii 塩尻かおり「外敵から身を守る植物の不思議な防衛メカニズム」
https://rec.seta.ryukoku.ac.jp/iag/seeds_digest/shiojiri.html 参照 2023年5月17日
 - *iv 「大腸が「心」も動かす？ 神経細胞が多く存在、脳と関係」
<https://www.asahi.com/relife/article/12487397> 参照 2023年5月17日
 - *v 「“皮膚” 0番目の脳」<https://www.nhk.jp/p/ts/X4VK5R2LR1/episode/te/VGKW867RWG/>
参照 2023年5月17日
 - *vi 「福岡伸一「動的平衡」をわかりやすく解説」<https://www.bou-tou.net/dotekiheiko/>
参照 2023年5月17日
 - *vii 「2022年10月26日 朝刊 教育1 026ページ, 01529文字(私たちはなぜ学ぶのか) 身体動かし得た経験、大切に 養老孟司さん」<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1684365774364>
参照 2023年5月18日

子ども・地域の居場所支援を対象とするサービスラーニングのデザイン ～「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開（3期）～

Design of the service learning for a child, the local place to stay support
- An activity and development of "Shiawase Ibasho Network"3rd term-

矢野 景子¹⁾ 大山 博幸¹⁾
Keiko YANO Hiroyuki OYAMA

1) 十文字学園女子大学・人間福祉学科

キーワード：子ども、地域、居場所、サービスラーニング、子どもの権利保障

要旨：本研究は、学生のサービスラーニングデザインの機会を通して、卒後に福祉と教育に携わる学生の学びの深化を明らかにすることを目的とする。2019年度の本学元気プロジェクトの採択研究を発展させ、2020年度に設立した「しあわせ居場所ネットワーク」の活動と展開の発展的研究（2期 2021年度）を経て、3期目（2022年度）は継続的な活動における組織の維持と学年移行と接続の課題をもちつつも、企画・運営を学生が行うことができる組織としての意義を探究することを目的として活動を実施した。本研究では、地域の子どもの居場所支援活動への学生ボランティアとしての参加及び当該活動に関する継続的な学習活動を通して、学生ボランティア活動経験を対象とするサービスラーニングのプログラムの開発、実施、評価を試み、運営・企画・活動の実際について、実践研究としての学生の活動の実際（実践報告と事例）より検討を行った。その結果、3期の活動の成果として、（1）コロナ禍における地域活動として継続性の中で学生を含む地域の交流の場をつくることができたこと（2）学生主体による運営と企画により、依頼に応える活動ではなく、目的に応じて学生が考え、その場に応じて修正する機会としての経験学習の場となっていること（3）遊びを通した多世代交流の場の機会の提供と学生の世代に遊びが伝承されることの意義が見いだされたこと（4）継続的な活動にみる地域との関係性の変化（学生への信頼と理解によって、学生に任せる機会へ）が見られたことの4点について成果を見出すことができた。また、学習の場としてのサービスラーニングの意義にとどまらず、地域における場において、コレクティブ・インパクト¹⁾の構造を見出し、学生がステークホルダーとしての役割をもつことを明らかにした。さらに、しあわせ居場所ネットワークの運営と個々の主体的な参加が、その重要な要素の一つであることが示唆された。

1. 活動及び研究の目的

地域の子どもの居場所支援活動への学生ボランティアとしての参加及び当該活動に関する継続的な学習活動を通して、学生ボランティア活動経験を対象とするサービスラーニングのプログラムを実施する3期目となる。また、当該サービスラーニングによる学習活動を子どもの権利条約思想及びSDGsと関連づけ、地域における子どもの権利保障としての場づくりを目指す。

2. しあわせ居場所ネットワークハピネスの組織化と活動（3期）

人間福祉学科の学生による本活動主体として2020年に「しあわせ居場所ネットワーク」を設立した。2021年度より学生の広報活動が始まり、「ハピネス」の通称をつけた。ハピネスとは「ハ(happy: 幸せ)、ピ(place: 居場所)、ネ(network: つながり)、ス(三単現のS: みんなで創る)」の意であ

¹⁾ マーク R. クラマー/マーク W. フィッツァー（2017）は、コレクティブ・インパクトの5つの要素として、①共通アジェンダ②共通の評価システム③相互に補強し合う活動④定期的なコミュニケーション⑤活動に特化した「支柱」となるサポート、をあげている。

る。本組織の特徴として、運営委員として、世話人、会計、活動リーダー、広報、会員担当の役割分担を担い、教員とメンバー（約 50 名）の学生の連絡調整機能をはかるよう組織体制を確立した。広報は、学生が主体的に動画作成および SNS による発信を行い、学内外の活動発信を行っている。（本稿では、「ハピネス」と表記する）

2022 年度は 2021 年度の活動を継続し、①フードパントリーと親子支援の場づくり②十文字の森プレーパーク③子ども食堂「ポトフ」の支援の 3 つを柱として活動を行った（表 1）。

表1:活動日と活動内容

	たまりば フードパントリー & 親子の居場所さかなつり、わなげ
6月5日(月)	野火止用水灯明まつり
6月13日(月)	ポトフパントリー 鶴瀬会場
6月14日(月)	ポトフパントリー 清瀬会場
6月18日(土)	学生子ども食堂全国大会交流会 登壇-ハピネスの活動報告-
7月15日(金)	ポトフパントリー みずほ台会場
8月10日(水)	ポトフパントリー みずほ台会場
10月18日(火)	ポトフパントリー 鶴瀬会場
10月29日(土)	学生子ども食堂活動発表会 参加 運営・受付、子どもの権利イラストパネル展開催
11月3日(木)	十文字の森プレーパーク森の工作、森のビンゴ、子どもの権利イラスト展、昔遊び(バイゴマ、コマ)コーナー
11月18日(金)	ポトフパントリー みずほ台会場
12月14日(水)	ポトフパントリー 鶴瀬会場
12月24日(土)	十文字の森プレーパーク森の工作、森のビンゴ、子どもの権利イラスト展、昔遊び(バイゴマ、コマ)コーナー
1月20日(金)	ポトフパントリー みずほ台会場
2月15日(水)	ポトフパントリー 鶴瀬会場
1月29日(日)	十文字の森プレーパーク 森の工作、森のビンゴ、子どもの権利イラスト展、昔遊び(バイゴマ、コマ)コーナー
3月15日(水)	ポトフパントリー 鶴瀬会場
3月17日(水)	ポトフパントリー みずほ台会場
3月25日(土)	Buddy's Walk in TOKYO for all(矢野ゼミと合同)福祉ブースにて、親子の居場所:ソルトマラカスのワークショップ/昔遊びの提供・販売

その他、活動を通じて新たな活動への展開したことも特徴であり、2022 年度は枝分かれの活動として、「野火止用水灯明まつり 日時：6 月 5 日 16:00-20:00 ふるさと新座館前」へ参加し、バルーンアートを企画し、実施した（写真 1）。また、他大学との交流も行われ、「全国学生子ども食堂交流会」にて、他大学の子ども食堂の発表を聴講し、ディスカッションにて課題を共有した（写真 2）。全国学生子ども食堂発表の会場が十文字学園女子大学であったことから、これまでは十文字の森プレーパークと同時開催をしていた子どもの権利イラストパネル展を小スペースではあったが企画・

開催を行った（写真3）。さらに、新たなネットワークとして Buddy's Walk in TOKYO for all（代々木公園にて開催）に多様性社会を考えるイベントとして、福祉ブースを企画し、多様な親子とソルトマラカスづくりを行った（写真4）。



写真1「バルーンアートづくり」



写真2「他大学や支援者との交流」



写真3「子どもの権利イラストパネル展」



写真4「ソルトマラカスづくり」

3. 活動の実践と考察

（1）実践報告1「フードパントリーと親子の居場所づくり」

①子どもに応じた遊びの変化にみる経験の変換と伝達

新座栄4丁目商店街フリースペース「たまりば」にて、2022年5月22日に行われた「フードパントリーと親子の居場所づくり」に「ハピネス」からこの活動に初めて参加する2名の学生が参加した。2021年度から「たまりば」のフードパントリーに参加しており、一面に親子の居場所（キッズスペース）や遊び場を企画し、学生たちによって実践と改善が繰り返される中で、さかなつりやわなげ、ボーリング、おりがみが定番の企画となっていた。4月時の年度を超えた接続として、どのようにこれまでの経験や企画を引き継ぐのか、また、どのように次の学年やはじめて参加する学生に伝えるのかが課題であったが、経験した学生から遊び方やルールを引継ぎつつも、利用者やフードパントリーの動線に合わせて、ルールや遊び道具を柔軟に変更して環境設定を行う姿がみられた。3期目では、特にこれまでの経験から、さかなつりの遊びのルールに段階をつけ、釣った後、裏に丸印がついていたら「あたり」、というルールへ変更した（写真5）。さらに、未就学児が釣りやすいよう、竿もマグネット式タイプを作成して増やし、魚もマグネットで釣りやすいものも用意し、3つ釣れたら「あたり」とした（写真6）。前者のルールでは釣ることに加えて、くじ運のゲーム性へ段階をあげるようなルールに変更し、手作りの魚にしかけを加え、後者は釣ることの面白さを味わえるよう道具を修正した。このように活動経験のない学生が参加することにおいても、組織内の伝達および接続として、学生同士が「教える―教わる関係」を生かす姿がみられた。さらには、2021年度より「たまりば」における親子の居場所の継続的な活動を行ってきていることから、他学生が経験し伝承された経験知を生かしつつも当日の動線や

利用者の動きをみながら遊びを修正する柔軟性をもち、子どもが楽しむしかけを工夫する姿は、これまでの大学での学びを新たな知として発展させる力と評価できる。図1に示すように、馬場（2021）の示す経験学習モデルの経験の変換と経験の理解が、個人の学習において行われたのではなく、「ハピネス」の集団において行われたことが特徴的である。接続・伝承の難しさはあるものの、個々の経験の理解と経験の変換を経験していない学生へ伝達し、新しい経験の理解と変換を生み出していくことにより、個の経験にとどまらない集団としての省察、具体的経験の集団的意味づけへの価値を見出すことができていたことがわかった。今後も遊びの内容や環境設定の修正や改善について学生の選択と決定を中心として、その変化について検討をしていきたい。

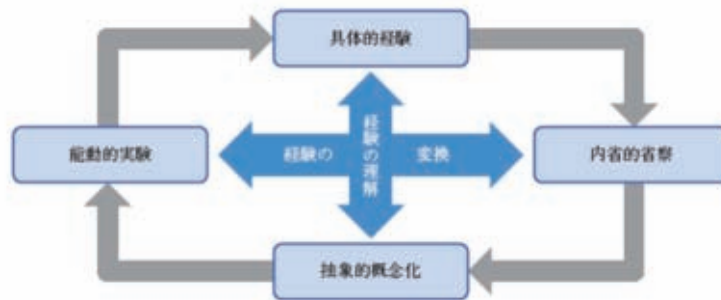


図1. 経験学習モデル

（馬場, 2021. p. 90 を基に筆者作図 ）



写真5「子どもの縁日 さかなつり」



写真6「子どもの縁日さかなつり未就学児向け」

②他団体との連携によるサービスラーニングの意義

「たまりば」の活動では、「ハピネス」がキッズスペースや子どもの遊びを主に担当するが、事前準備（フードパントリーの仕分け）や受付なども協力して行う。児童教育学科星野敦子教授とゼミ生や子ども食堂まぜこぜ食堂の支援者、そのほか協力団体との打ち合わせや振り返りに学生も主体的に参加することになっている。この経験の省察を通して、経験の理解と変換が個や「ハピネス」内にとどまらず、拓かれた集団において行われることもこの活動の特徴である。また、この活動そのものがコレクティブ・インパクトの5つの要素として、①共通アジェンダ②共通の評価システム③相互に補強し合う活動④定期的なコミュニケーション⑤活動に特化した「支柱」となるサポート、がそろそろサービスラーニングの場を超えた活動となっており、学生がステークホルダーとして在ることに意義があるといえる。



写真 7「他団体との事前・事後ミーティング」

(2) 実践報告 2「こども食堂ポトフの活動」

富士見市にある NPO 法人ポトフでは、毎月 1 回開催していたオープン型（登録制）の子ども食堂はコロナ禍により中止であったが、フードパントリーは 2021 年度と同様に毎月 1 回実施していた。2022 年度においては、延べ合計 21 名の学生がボランティアとして参加した（表 2）。

表 2「こども食堂ポトフ活動の実際」

実施日	場所	参加学生数
6/13	鶴瀬駅前メモリードホール	6
7/15	みずほ台中央公園	6
10/18	鶴瀬駅前メモリードホール	3
11/8	みずほ台中央公園	3
12/14	鶴瀬駅前メモリードホール	3

パントリーの会場で、学生は主に来場者に対して衣類や文具等を希望者に提供・配布する役割を担当した。また、鶴瀬駅前メモリードホールでは、当該法人の相談担当者が来場者の個別の相談を受ける「何でも相談」のスペースで、相談中の保護者を待っている子どもを対象としたあそび場コーナーをあわせて担当することもあった。

衣類を希望者に提供するブースでは、学生は来場者の保護者と子どもに丁寧に話しかけ接していた様子が見られた。また「なんでも相談」スペースのあそび場コーナーでは、学生が用意した「おてだま・けん玉」や「竹とんぼづくり」、「魚釣りゲーム」などの遊びを実施し、子どもたちと楽しく過ごす様子が見られた。また学生のうち 1 名は、保護者とともに来場した女子中学生と和やかに会話する様子も見られた。いずれもスタッフとして参加していた地域のボランティアの方から高評価であった。

今年度は参加した学生が各自 1 度のみで継続した参加がなかったことから、本研究デザインとして設定したリフレクションが実施できなかった。

なお、鶴瀬メモリード会場で実施する「なんでも相談」スペースには、同法人の子育て相談の経験を持つスタッフ 2 名が担当していた。参加者の中には支援のニーズから行政等のサービスにリファールするケースなどがみられた。そのため筆者（大山）は、相談担当者が相談時の記録を行うシートを開発し提供した（図 2）。

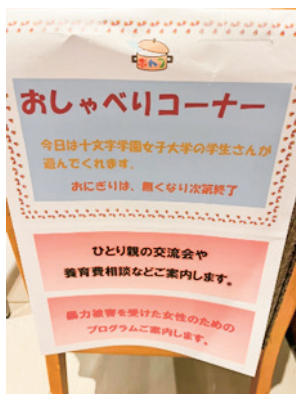


写真 8「相談ブースの掲示」

写真 9「参加学生」

2022 年度は参加した学生が各自 1 度のみで継続した参加がなかったことから、本研究デザインとして設定したリフレクションが実施できなかったものの、学生の継続的な参加は当該団体の活動においても重要であると思われた。今後は継続した学生の参加の仕組み作りを検討する必要がある。継続した活動に対してリフレクションがなされることで、活動に対する経験の意味づけや経験の再構成を経由し、結果学生自身の変容が導かれるものとする。しかしながら、限られた学生の参加ではあったが、学生は来場した保護者や子どもとかわる経験が得られたこと、そのことはスタッフとしての地域のボランティアの方にも肯定的な影響を与えた様子が見られたことは、意義があったと考える。

図 2：記録シート

相談記録	
■来談日時:	年 月 日
■場所:	☐ 鶴瀬会場 ☐ みずは台会場 ☐ 本人自宅 ☐ その他 _____
■面接者:	_____
■来談者氏名:	_____ 性別 ☐ 男性 ☐ 女性
■来談者の家族属性:	☐ 父 ☐ 母 ☐ 息子 ☐ 他 ☐ その他 _____
■主な会話、相談等の内容	
■今後の対応(必要と思われる場合、下記の項目の□にチェック) ☐ 次回参加時もしくは会話の機会に声をかけ(経過観察) ☐ 他機関へのリファール必要 ある場合、対象となる機関: _____ ☐ 次回面談の必要あり ある場合、その内容:(例:だれがいつどこでだれとどのような目的で...) _____ ☐ その他 _____	

(3) 実践報告 3「十文字の森プレーパークの活動」

十文字の森プレーパークの活動は 2021 年度（2 回実施）に続き 2 期目（3 回実施）となる。「ハピネス」は森のビンゴと森の工作を継続して企画し、経験のある学生から初めて経験する学生へと内容の継承が行われた。また、森の子どもの権利条約イラストパネル展の開催と伝承遊びコーナーは矢野ゼミの学生（一部「ハピネス」にも在席）と合同で企画・運営を行った。

①森のビンゴと工作コーナー

森のビンゴでは、森に落ちている木の実や枝や葉を探し見つけるとコップや袋に入れるのを親子で楽しむ様子がみられた。その後、ビンゴで集めた森の素材を使って子どもが思い思いに工作を楽しむコーナーでじっくりと製作する子どもたちも集まり、学生と対話をしながら様々な作品が完成していった。子どもたちの取り組みの様子をみながら、関わり方や距離感を配慮する学生の様子もみられ、子どもが遊び続けることを保障し、子どもの選択や意思を尊重する姿は、子どもの権利条約の第 31 条（遊ぶ権利）、第 3 条（子どもの最善の利益）、第 12 条（意見表明権）について授業やハピネスの勉強会（2 期実施）で学んできた学習を実践に活かしていくことができた成果と考える。



写真 10「森の工作コーナー」



写真 11「製作に寄り添う学生」

②森の「子どもの権利条約イラストパネル展」

2021 年度より森のイラストパネル展として、子どもの権利条約の普及啓発を目的に学生たちとプレーパーク内に展示を行ってきた。学生たちは、子どもの権利条約について学び、また展示を通して改めて関心を持ち続けることにつながっている。さらに、プレーパークに来る親子や地域の方も足を止め、一つひとつに目を向け、条文を読む姿がみられた。子どもの遊ぶ姿を通して、今一度子どもの権利を考える大人への啓発を子ども期から成年への移行期である学生が行っていることに活動の意義があるといえよう。



写真 12「子どもの権利条約イラストパネル展」

③伝承遊びコーナー コマ・バイゴマ遊び

十文字の森プレーパークにおいて 2022 年度に新規に取り入れた場が伝承遊びコーナーである。バイゴマや木ゴマエリアでは上述した森の工作エリアに次いで、多くの親子が遊び、3 回実施を通

して連続して遊びにきた親子やその祖父など、世代を超えた遊びの空間となった。ベイゴマは新座市菅沢にお住まいであった菅原道彦氏（日本ベイゴマ協会発足者）のご自宅に伺い、学生が事前にレクチャーを受けた。ベイゴマの舞台づくりや紐づくり（回しやすいように2か所に玉止めを行う）はすべて学生が行った。学生の中には学童でよく遊んでいたため遊び方や回し方をすぐに思い出し習得した学生もいれば、何度も練習をしながら体得していった学生もいた。また、プレーパークに孫を連れて遊びにきたAさんから、子ども時代のベイゴマ遊びが懐かしいと話をききながら、紐の巻き方のコツ（紐を水に濡らしてしごく）や、ベイゴマの削り方（より強く安定的に回るためにコマをやすりで削る）、どの位置に入れると強いのかなど、学生や子どもたちも一緒に遊びながら「教える一教わる関係」の中で遊びが続いた。Aさんは、3回行われたプレーパークには必ず足を運んでくださり、その度に加工して強くなったベイゴマでの対戦が行われた。コマあそびは、年齢問わず、技術とコツで勝ち負けが決まるため、子どもと大人の立場の逆転も大いにある遊びである。大人も子どもも同じ条件の中でベイゴマ合戦が熱く繰り広げられた（写真13）。また、なかなか勝負にまで至らない子どもや大人も、コマに紐をまく、投げる、回すまでのプロセスを楽しみ、習得までの難しさを楽しむ様子がみられた。学生との話し合いから、ベイゴマエリアの横に木ゴマやひもゴマエリアを想定して板を置くと、板の上でコマを回す子どもたちも集まり、思い思いの場所を選択して遊ぶことの保障につながった（写真14）。

さらには、ベイゴマエリアの横に置いた板は、子どもたちの遊びに応じて多様に使われ方が変化した。チョークで絵を描く子や、その絵にまた描き加える子など絵を描く姿（写真15）や板の上に集めてきた葉や木の実を広げ、包丁で切りながら小さくしたり、すりつぶして色の変化を楽しんだりする子どももいた（写真16）。子どもが主体的に場や素材、空間や道具を選ぶことができ、多様な使い方が保障されていることで学生が想定してなかった遊びへと展開した。その様子を見守る学生や遠くからその遊びを眺めている学生の姿もみられ、子どもの遊びの姿を通して子どもの遊びを保障する関わりへと、関わり方にも変化がみられるようになった。また、ベイゴマエリアは「子ども一学生一親世代一祖父母世代」と多世代交流の場となり、伝承遊びの再生によって、遊びの伝承を通じた交流の場となったことの意義は大きい。



写真13「Aさんと対決する学生」



写真14「ひもゴマエリア」



写真15「板にチョークで絵を描く」



写真16「葉や木の実を使ったあそび」

④関係者、関係団体との協働について

十文字の森プレーパークでは、開始前の準備、事後の片付け、事前打ち合わせ、事後振り返りは関係者全員で行う。準備～振り返りを通して、プレーパークエリアの安全や各エリアの内容の共通理解をはかる。また、事前打ち合わせや事後振り返りは、個々の体験を理解し、内省的省察を集団的な関係の中で行われることが特徴である。また、この一連の工程の中に学生が参画することで、関係者（ステークホルダー）も学生の振り返りの内容や気づきを通して学生を理解することにつながった。2回、3回につなぐ評価、修正の機会としても学生の気づきが重要な役割を担っていた。



写真 17「事後振り返り」

⑤遊び込む経験を通して

子どもの権利条約は第 31 条子どもの遊ぶ権利を保障している。子ども期を経て子どもと関わる学生たちは、これまでの大学での学びを統合しながら、経験の変換としての経験学習をプレーパークの活動の中で実践している。しかし、子どもたちと関わりながらも、学生自身が遊び込み、プレーパークを楽しむ姿も多くみられた。一人ひとりの在り方や選択が保障され、また遊び込む経験を通して遊びを再構成することにより、プレーパークの意義やそこに学生として在ることの役割を学生なりに理解していく様子がみられた。サービslラーニングとしてのプレーパークの活動の意義として、学生自身の遊び込む体験は、①遊びとは何か②子どもとは何か③プレーパークの役割とは何か、についての内省的省察の機会となることの意義が見いだされた。



写真 18「ハンモックで揺れる」



写真 19「子どもとベイゴマ対戦」

3. 総合考察

3 期となる 2022 年度は組織の安定と活動の安定が課題となる 1 年であった。サービslラーニングの構造化の課題として、しあわせ居場所ネットワークの学生組織の移行と接続の課題がみられた。人間福祉学科の学生の約 50 名が在席する「ハピネス」は、学科のカリキュラムに影響を受けるため、実習の時期や就職準備によって、活動できる時期が限られ、またその時期が重なること

が組織の弱点である。また、主体的に参加することを理念にしていることもあり、参加人数が少ない時も運営を工夫する必要がある。さらに、体験の伝承の課題として、主に活動に参加できる1年～2年生へ活動を引き継いでいくことが求められる。ゼミ以外の学年を超えた縦のつながりが生まれる「ハピネス」の組織はサービ斯拉ーニングの場としての機能だけでなく、学年を超えた人間関係の広がりとしての集団形成の利点も大きい。そのため、体験の伝承については、体験していない学生に活動の魅力も含めて実践知と理念をどのように伝承していくのかが重要になる。3期では、広報担当の学生がこれまでの広報の素材を更新しながら、活動動画やInstagramを作成し、学内外へ発信することも活発に行われた。

3期の活動の成果として、4点あげられる。(1) コロナ禍における地域活動として継続性の中で学生を含む地域の交流の場をつくることができたこと (2) 学生主体による運営と企画により、依頼に応える活動ではなく、目的に応じて学生が考え、その場に応じて修正する機会としての経験学習の場となっていること (3) 遊びを通した多世代交流の場の機会の提供と学生の世代に遊びが伝承されることの意義が見いだされたこと (4) 継続的な活動にみる地域との関係性の変化(学生への信頼と理解によって、学生に任せる機会へ) がみられたこと、である。

最後に、マーク R. クラマー・マーク W. フィッツァー (2017) は、新しいリーダーシップであるシステムリーダーがコレクティブ・インパクトの要素に求められるとし、システムリーダーは「一人だけ存在することはなく、異なる構成要素を代表する複数の個人が共同でリーダーシップを執る」(p. 226) と示している。しあわせ居場所ネットワークの活動「ハピネス」は、学科を超えた教員、子ども食堂を運営する団体と支援者、プレーパークの専門の担い手に加え、学生そのものも共同でリーダーシップを執る存在として成立するネットワークとなっているといえる。3期となる継続的活動を通して、しあわせ居場所ネットワークの活動が、サービ斯拉ーニングとしての学びの場としての役割にとどまらず、次世代を担う学生が共同のリーダーシップを執る「システムリーダー」の可能性となることが示唆されたことも大きな成果といえよう。

組織の継続と安定にむけた課題はある一方で、その脆さを学生たちなりに強みにし、体験の伝承と活動の発信を工夫する姿がみられた。今後は学生のヒアリングを通して学生の実践知にみる組織の構造とその課題についても検討を進めたい。

<引用・参考文献>

- (1) マーク R. クラマー/マーク W. フィッツァー (2017) 「コレクティブ・インパクト」を実現する5つの要素. ダイヤモンド社
- (2) 馬場洸志 (2021) サービス・ラーニングにおけるリフレクションの理論と手法
基盤教育論集; Bulletin of Institute of Liberal Arts, OttemonGakuinUniversity (8), 89-99
- (3) 矢野景子 (2023) 「保育者養成における子どもの権利条約—子どもの権利意識の醸成を超えた先へ」 p. 67 「発達 No. 174 いま、0歳からの子どもの権利を考える」 ミネルヴァ書房

謝辞

本活動及び研究にご協力いただいた、新座栄4丁目商店街関係者の方々、柏の葉の会の皆様、関戸博樹氏はじめ、あさかプレーパークに従事されるプレーワーカーの皆様他、活動の企画運営に関わった学生の皆さん、そして筆者らに多大なるご指導とご支援をいただきました本学星野敦子教授に、心より感謝申し上げます。

健康増進に向けたプラスごはんプロジェクトからの地域への情報発信・交信・共振 学生食堂メニューコンテスト実施による成果

Information, communication, and resource to a positive meal project
for health promotion to the community
Results from the student cafeteria menu contest

木村 靖子 ¹⁾ Yasuko KIMURA	名倉 秀子 ¹⁾ Hideko NAGURA	村田 浩子 ¹⁾ Hiroko MURATA	佐々木 菜穂 ¹⁾ Naho SASASKI	菅原 沙恵子 ¹⁾ Saeko SUGAWARA
岡本 節子 ²⁾ Setsuko OKAMOTO	中岡 加奈絵 ²⁾ Kanae NAKAOKA	石井 和美 ²⁾ Kazumi ISHII	鴨下 澄子 ²⁾ Sumiko KAMOSHITA	星野 祐子 ³⁾ Yuko HOSHINO

1) 十文字学園女子大学・健康栄養学科 2) 同・食物栄養学科 3) 同・文芸文化学科

キーワード：健康増進 地域 メニュー 学生食堂 料理レシピ集

要旨：本プロジェクトは、健康づくりのために昼食に焦点をあて、本学学生食堂（以下、学食）のメニューコンテストによる学食メニューづくりをとおして、地域への食の情報発信の仕組みづくりを学生主体で企画・運営していくとともに、学生および教職員等の学食利用者自身の健康増進に寄与することが目的である。2022（令和 4）年度は、本学も新型コロナウイルス感染症拡大による行動制限が緩和され、学食の利用者も徐々に回復がみられた。本プロジェクト活動も 3 年目となり、メニューコンテストの認知は進み、コンテストで選ばれたメニューが提供される際は学食の利用者数も増え、健康増進への意識づけに成果がみられた。応募学生が撮影する料理写真のスキルや宣伝ポスターのデザイン力なども向上し、教育効果が得られている。また、3 年間の成果として良質な料理献立が集積されたため、料理レシピ集（冊子）を学生の企画、編集により作成した。地域への情報発信は、いまだコロナ禍の影響を受け、大学ホームページ等の情報提供にとどまり、地域住民と直接関わり合う活動等には至らなかった。今後、本年度の活動成果をもとに地域への積極的な情報発信、交信、共振に向けた活動を学生主体に企画・運営する仕組みづくりを検討する。

1 はじめに

国民の健康づくりをめざす「健康日本 21（第二次）」を受けて、埼玉県、新座市では、健康増進の仕組みや体制づくりの具体的な内容と目標、達成年を示している。「栄養・食生活」については、食品や料理における食塩相当量の低減や給食施設等での栄養・食事管理により、バランスのよい食事を摂る人や生活に生きがいややりがいを持つ人の増加を令和 6 年達成として目標を掲げている。

本プロジェクトは、この目標達成に寄与するために、健康増進に関する分野を専攻する学生とその他の専門分野の学生により、大学内外（地域）へ「健康課題」の解決を発信し、地域との交信により、学生と地域の共振を生み出す取り組みとして、2020 年度より開始されたが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う食事提供や共食の活動制限の影響を受け、特に学外への働きかけは困難を極めていた。コロナ禍において本プロジェクトを進めるために、メニュー提案をテーマとして実施可能な本学学生食堂（以下学食とする）におけるメニューコンテストを主な活動として取り組んできた。2021 年度までに 3 回のコンテストを企画し、応募メニュー数も回を重ねるごとに増加した。本プロジェクトの内容が理解され、本企画を継続することで、食生活をとおしての健康増進への意識づけの効果が窺える。また、応募した学生は給食利用者にアピールするメニューのコメントや料理写真の撮影なども上達し、給食販売におけるプロモーション活動について

実践を通して習得することができ、学生の教育的な成果も得られた。

2 プロジェクト継続のための取り組み

2022年度は、本プロジェクト活動が3年目となった。コロナ禍での行動制限も緩和され、学生は全員登校となった。それに伴い、学食の利用者数はコロナ禍前の状況に回復した。メニューコンテストにおける給食の展開をさらに明確にし、食事の提供・販売のマーケティング等を意識する活動について、学生の参画を促すことを推進した。とくに前年度までの課題である学食メニューの応募などが食関連学科に留まっていることに対して、食を専門領域としない学生が学科の学びをいかした関わり方でコンテストの企画、運営に貢献することを組み入れた。

さらに、メニューコンテストをとおして集積した情報をもとに、学外（地域）へ向けた食・栄養の情報発信を紙および電子媒体など多角的に実施し、学生と地域住民とつながりを創出することをめざした。このような取り組みにあたり、本プロジェクト活動の学生への参画を促し、教育効果を上げるために、あらたに2人の食・栄養関連のメンバーを迎え、計10人に再構成した。

なお、本プロジェクト活動の継続ができるのは、学食のコントラクトフードサービスの株）グリーンハウス様およびその店長の多大なるご理解と協力によるものである。

3 2022年度プロジェクト活動報告

3.1 学食メニューコンテストの実施

学食メニューコンテストは、前年度と同様に、本学学生および教職員を対象に春と秋の2回、募集テーマに応じたメニューの募集から審査・選考、学食におけるメニュー提供まで、図1の募集要項に示すスケジュールにしたがって進めた。通算で第4回（第四弾）となる前期メニューコンテストは、テーマ「十文字学園 創立100周年を記念して」に、定食またはめん類を条件に募集した。第5回目（第五弾）の後期メニューコンテストは、「やさいをたっぷり楽しもう」をテーマに、定食あるいは主菜または副菜の単品料理を条件に募集した。募集締め切り後、一次審査として、応募メニューの料理すべてについて、学内の調理学実習室において調理を実施し、材料や分量が適切であるかの確認と料理写真を撮影した。そのうえで、二次審査としてプロジェクトメンバーの審査により学食での提供メニューを選考した。

3.1.1 メニューコンテスト第四弾

（1）メニューの募集から提供メニュー決定まで

メニューコンテスト第四弾は、図1の応募要項に示すスケジュールで進めた。2022年3月上旬より4月中旬をメニュー応募期間とした。この期間に、15件のメニューの応募があり、応募者は、15団体（のべ19人）であった。応募メニューを表1に示す。

前年度の第三弾までの審査方法の検討をもとに、一次審査は学内の調理学実習室において、応募メニューを実際に調理し、写真撮影を行った。使用食材と分量において経済性（価格）、調理方法により給食としての提供の可能性、盛り付けや器に対するアイディア、栄養系の学生のメニュー提案では栄養バランスなど、応募者のオリジナルメニューであることの確認ができた。15件すべてのメニューが一次審査を通過した。ただし、新型コロナウイルス感染拡大の予防のため、実習室に入室可能な人数を制限して調理を行ったため、予定よりも一次審査に時間を要した。学園創立100周年となる6月の提供を目指すためには、短時間での審査が必要という判断より、本プロジェクト構成メンバーによる二次審査にて、提供メニューを選考することとした。今後、応募メニューの選考において、審査期間の検討が必要であることを確認した。選考基準は、コンセプトに合致しているか、興味をひく料理か、給食として提供可能であるか、とした。なお、今回のメニューは、100周年をイメージするために、食品で「100」の形を作る、あるいはお祝い、記念という意味で、食材の種類が多い、調理方法が複雑で手の込んだものが見られたため、二次審査にあたり、実際に学食で調理を行う株）グリーンハウス様の店長および管理栄養士の意見を参考にした。

その結果、図2に示す定食の4メニューを、各日に給食として提供することに決定した。

学生食堂メニューコンテスト募集要項



“おいしい”アイデア大募集！
あなたの“おいしい”を学食メニューに

主催：プラスごはんプロジェクト

＋文字学園女子大学の食環境をさらに魅力的なものにするために**プラスごはんプロジェクト**を立ち上げました。
作ってほしい！食べてほしい！を応援するプロジェクトです。

第四弾 十文字学園100周年を記念するメニュー大募集！

2022年、それは十文字学園にとって創立100周年という記念すべき年です。プラスごはんプロジェクトでは、十文字学園100周年にちなんで学食メニューを大募集いたします。食材、味、盛り付けなど、あなたの創意をこらしたメニューで、100周年を盛り上げてみませんか。皆さまのご応募を心よりお待ちしております。

1. 募集スケジュール

- ・募集期間：3月5日（土）～4月15日（金）
- ・選考結果発表：5月を予定
- ・メニュー提供：6～7月の昼食として提供予定（期日は後日発表）

2. 応募対象者
十文字学園女子大学の学生、教職員のご個人またはグループ（ただし3名以下）

3. 募集内容
応募用紙に作成した学食レシピを記載し、応募してください。

1）メニューの条件

- ・学食で提供可能な定食（主食・主菜・副菜を組み合わせたもの）。練物とする。
- ・食材料費は1食あたり300円未満とする。

2）使用食材の条件

- ・通常の学食メニューで使用されるような食材を使用する

・食中毒のリスクを回避するために、生物（なまもの）は使用しない
※サラダなどに使用する生野菜は可

3）応募用紙 記入上の注意事項

- ・誰でも作ることができるよう、料理手順をわかりやすくまとめてください。
- ・メニューのおすすめポイントの記載内容も選考対象となります。魅力が伝わるようまとめてください。

4. 応募方法

- ・本メールに添付した応募用紙をダウンロードしてご利用ください。
※ 応募用紙には、定食用のもの、種類用のものがありますので、間違えないようご注意ください。
- ・応募はメールにて受け付けます。プラスごはんプロジェクト事務局のメールアドレス（plusgohan@jumonji-u.ac.jp）に応募用紙のファイルを添付して、送信してください。その際、件名は「**学食メニューコンテスト応募**」、ファイル名は**応募代表者の氏名**にしてください。

5. 選考

- ・一次審査として、学内での試作を行っていただきます（試作代300円を上限として支給、手順確認と料理写真撮影を行います）。その後、二次審査選考を経て、プラスごはんプロジェクトとして優秀な学食メニューを選考します。

6. 発表
大学HP、学内メール及び学生食堂内で発表します。採用された学食メニューの応募者（グループ）を表彰させていただきます。また、応募者（グループ）全員に参加賞を贈呈させていただく予定です。

7. お問い合わせなど
質問や不明な点などがありましたら、プラスごはんプロジェクト事務局のメールアドレスplusgohan@jumonji-u.ac.jpまでご連絡ください。

プラスごはんプロジェクト事務局
名倉秀子、木村靖子、村田浩子、岡本節子、
星野祐子、佐々木菜穂、中岡加奈絵、菅原沙恵子

メールアドレス：plusgohan@jumonji-u.ac.jp

図1 学食メニューコンテスト募集要項

表1 メニューコンテスト第四弾 応募メニュー

メニュー名（提供形態）		メニュー名（提供形態）	
定食	100周年プラスちゃんライスバーガー定食	定食	豆腐の和風ガバオライス
	お祝い押し寿司		鶏むね肉とキャベツのマヨ炒め
	プラスちゃんハンバーグ定食		彩りチャプチェ定食
	華やかさっぱり！ちらし寿司定食		ガバオ定食
	プラスちゃんと一緒に！100周年お祝いハンバーグ定食		お祝い！夏野菜のカラフルキーマカレー
	照り焼きちらし寿司	麺類	すき焼きうどん
	トマト定食		なすとツナのアラビアータベンネ ほうれん草とコーンのソテー
	祝 十文字ちらし寿司定食		

プラスごはんプロジェクト第四弾のご報告

2022.7.11



プラスごはんプロジェクトでは、十文字学園女子大学の食環境をさらに魅力的なものにするために、第四弾 学生食堂メニューコンテスト（2022年3月～2022年4月）を開催しました。第四弾のテーマは「十文字学園100周年を記念するメニュー」です。応募の中から、以下のメニューを学生食堂で提供することとなりました。（※食堂用に食材や分量を調整しての提供となります）

7月14日（木）	お祝い！夏野菜のカラフルキーマカレー
7月15日（金）	100周年プラスちゃんバーガー定食
7月21日（木）	祝 十文字ちらし寿司定食
7月22日（金）	なすとツナのペンネアラビアータ

主催：プラスごはんプロジェクト

図2 学食メニューコンテスト 第四弾 審査結果

（２）提供メニューを宣伝するツール

コロナ禍により、前年度からの学食では弁当容器による食事提供が継続していることを利用し、プラスちゃんくらぶ（文芸文化学科）の学生が「創立 100 周年記念」シールをデザインし、弁当容器に貼付した。図 3 に示すとおり、シールのデザインは 13 種類と多く、学食利用者にはどのシールにあたるかの期待感を出すことができ、メニュー売り上げ増加に貢献した。



図 3 プラスちゃんくらぶの学生によるデザインの弁当容器貼付シール

（３）学食メニューとして提供

第四弾は、定食の 4 メニューについて、7 月 14, 15, 21, 22 日の前期終了期間の提供となった。メニュー提案した学生自身が、おすすめのポイントを含めたメニューの紹介を行う POP を作成し、掲示した。提供日当日、メニューの提案者は、メニューと実際の給食を確認、検討した（図 4～7）。学生作成の POP は、それぞれ個性的で目を引くものであった。それが宣伝効果となり、当日の利用者数は通常時よりも 2～3 割増加した。利用者の 7 割が定食メニューを喫食した。とくに、パンやパスタを利用したメニューの人気は高く、プラスちゃんバーガー定食は最も販売数が多く、またペンネアラビアータ定食は提供時間の早い時点で完売となった。



図 4 お祝い！夏野菜のカラフルキーマカレーの POP とメニュー提案者



図 5 100 周年プラスちゃんバーガー定食の POP とメニュー提案者



図6 なすとツナのアラビアータペンネのPOPとメニュー提案者



図7 祝 十文字ちらし寿司定食のPOPとメニュー提案者

3. 1. 2 メニューコンテスト第五弾

(1) メニューの募集から提供メニュー決定まで

メニューコンテスト第五弾は、学食利用者にもっと野菜を多く摂取してもらうために、秋冬に向けて「やさいをたっぷり楽しもう」をテーマに実施した。募集期間は、8月中旬から9月中旬とした。この期間に、定食メニュー28件、単品1件の応募があり、応募者は、29団体（のべ35人）とこれまでに最も多くなった。応募メニューを表2に示す。

第四弾と同様に、学内の調理学実習室における応募メニューの調理と写真撮影による一次審査を行い、すべてのメニューが一次審査を通過した。今回のテーマは、野菜を多く摂ることであるが、応募のメニューを確認すると、野菜の摂取量が必ずしも多くないメニュー、また使用する野菜が提供の時期に適していないものも見受けられた。学食利用者の投票による審査では、これらを理解した上で、判断できるかが懸念事項となった。12月での提供という時間的な制限、給食提供の可能性も検討すべきとの判断から、第五弾では一次審査と本プロジェクト構成メンバーによる二次審査にて、提供メニューを選考することとした。二次審査では、給食での提供が可能であることとして、①食材が入手しやすいものか、②価格が適切か、③給食として大量調理が可能であるか、アピール度として、④ネーミングやキャッチコピーが魅力的か、⑤応募のコンセプトに合致しているかに重点をおき、そのほか、⑥外観、⑦独創性、⑧栄養の点から、総合的に審査を行った。その結果、定食の4メニューを選考した。

(2) 学食メニューとして提供

第五弾は、定食の4メニューについて、12月8、9、15、16日の年末の4日間の提供となった。12月8日「豆腐ハンバーグきのこ定食」、9日「野菜たっぷり！鶏肉の唐揚げ甘酢あんかけ定食」、15日「野菜たっぷり！！ビビンバ丼定食」、16日「サーモンとキノコのポテトマカロニグラタン」がそれぞれ提供された。メニュー提案した学生のPOPを掲示した。提供日当日、メニューの提案者は、メニューと実際の給食を確認、検討した（図8～11）。

表2 メニューコンテスト第五弾 応募メニュー

メニュー名（提供形態）		メニュー名（提供形態）	
定食	お野菜の満腹サンド	定食	鶏肉と秋茄子のみぞれ煮定食
	サーモンときのこのポテトマカロニグラタン定食		鯖の野菜あんかけ定食
	れんこん入りさっぱり鶏つくね定食		秋の味覚(豆腐ハンバーグきのこ)定食
	華やかさっぱり！ちらし寿司定食		集まれ野菜の森
	野菜たっぷり旨辛ユッケジャンクッパ		野菜たっぷりごはん
	照り焼きちらし寿司		肉じゃが定食
	鶏肉と4種の野菜とまいたけの甘辛炒め定食		秋のビビンバ井定食
	焼き魚定食		肉野菜の甘味噌炒め定食
	中華炒め定食		秋の味覚定食
	たっぷり野菜定食		中華井定食
	鶏肉の唐揚げ南蛮あんかけ定食		秋のクリームシチュー定食
	肉野菜炒め定食		冬の野菜たっぷり甘旨炒め定食
	麻婆豆腐定食	単品	生姜焼き定食
	秋の味定食		シチューをイメージ！ホワイトソース掛け野菜と肉の炒め物
	シチュー定食		

前回の第四弾よりも当日の利用者数が多く、通常時よりも3～4割増となった。また、利用者の8割が定食メニューを喫食し、メニューコンテストへの関心の高さがうかがえた。とくに、「野菜たっぷり！！ビビンバ井定食」は、本コンテストメニューで最も多い販売数となった。



図8 豆腐ハンバーグきのこ定食のPOPとメニュー提案者



図9 野菜たっぷり！鶏肉の唐揚げ甘酢あんかけ定食のPOPとメニュー提案者



図 10 野菜たっぷり!! ビビンバ丼定食の POP とメニュー提案者



図 11 サーモンとキノコのポテトマカロニグラタンの POP とメニュー提案者

3. 1. 3 大学ホームページによる情報発信

本プロジェクト活動では、メニューコンテストを学外（地域）にも宣伝し、近隣地域のかたにも学食での食事利用をとおして、健康維持増進を図ることを目指しているが、いまだ新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から、地域への働きかけは難しいと判断し、メニューコンテストの実施状況を大学ホームページに掲載するという情報発信にとどまった。ただ、第四弾については、大学ホームページ新着情報の掲載とともに、大学広報課と連携し、本学公式 YouTube チャンネル「キャンパスを描こう！」にて本活動を紹介した。食領域学科以外の広報担当の学生が、提供メニューを試食しながら見た目や味を魅力的に紹介するこの動画は、本学の学食利用のみならずメニューコンテストへの興味・関心を高める効果があり、次年度以降学外への宣伝にも積極的に利用していきたいと考える。

3. 2 提供メニューの栄養量の検討

プラスごはんプロジェクトの目的に、地域の健康増進における課題である『食生活』では、うす味、バランスのとれた食事をとる人の増加」の活動を挙げている。学食におけるメニューコンテストでは、この課題を解決するための一つの手段として、食事の栄養的な側面を理解しておくことが求められる。給食の提供においては、献立作成時の「エネルギー、たんぱく質、脂質、食塩相当量」の給与栄養量を提示することが省令で定められている。表 3 に、提供メニューの献立作成時の給与栄養量（計画時）と実際に提供された給食の給与栄養量（提供時）を比較して示した。給与栄養量（計画時）は、献立作成時に日本食品標準成分表 2020 年版（八訂）を用いて、使用食品とその使用重量からエネルギー量および各栄養量を計算した。給与栄養量（提供時）は、当日提供されたメニュー 1 食分を収集して試料とし、埼玉県食品衛生協会検査センターにてエネルギー量および各栄養量の分析を行った。

2020 年度の本プロジェクト提供メニューにおける分析結果¹⁾と同様に、エネルギー量と脂質が提供時では減少し、食塩相当量においては、計画時より増加したものの、減少したものなどばらつきがあることを確認した。計画時と提供時の給与栄養量の差は、先行研究にて報告されており²⁾、エネルギー量の減少が示されている。エネルギー量の減少は、脂質の減少の影響があることが推測できる。献立作成時の給与栄養量は、給食の栄養表示値として示されているが、当日の給食提供の調理過程や調味において調整が行われ、その際の増減が影響していることが推察される。さらに料理の栄養成分分析の件数を蓄積することで、料理における栄養成分値の変動の程度とその要因を明示することが可能と考える。

表 3 提供メニューの給与栄養量における計画時と提供時の比較

お祝い！夏野菜のカラフルキーマカレー			100周年プラスちゃんバーガー定食			豆腐ハンバーグきのこ定食			野菜たっぷり！鶏肉の唐揚げ甘酢あんかけ定食		
	給与栄養量 計画時	給与栄養量 提供時		給与栄養量 計画時	給与栄養量 提供時		給与栄養量 計画時	給与栄養量 提供時		給与栄養量 計画時	給与栄養量 提供時
エネルギー (kcal)	718	566	エネルギー (kcal)	762	500	エネルギー (kcal)	628	524	エネルギー (kcal)	868	750
たんぱく質(g)	24.4	25.0	たんぱく質(g)	25.2	26.1	たんぱく質(g)	27.5	24.9	たんぱく質(g)	28.3	25.0
脂質(g)	19.2	11.1	脂質(g)	36.2	20.2	脂質(g)	25.5	12.2	脂質(g)	35.3	24.1
食塩相当量(g)	3.7	4.6	食塩相当量(g)	4.1	2.2	食塩相当量(g)	5.0	3.1	食塩相当量(g)	5.3	3.5
なすとツナのアラビアータペンネ			祝十文字ちらし寿司定食			野菜たっぷり!! ビビンバ定食			サーモンとキノコのポトマカロニグラタン		
	給与栄養量 計画時	給与栄養量 提供時		給与栄養量 計画時	給与栄養量 提供時		給与栄養量 計画時	給与栄養量 提供時		給与栄養量 計画時	給与栄養量 提供時
エネルギー (kcal)	579	456	エネルギー (kcal)	687	534	エネルギー (kcal)	629	620	エネルギー (kcal)	493	342
たんぱく質(g)	23.2	18.0	たんぱく質(g)	27.3	24.6	たんぱく質(g)	24.1	20.3	たんぱく質(g)	24.3	14.9
脂質(g)	16.1	15.5	脂質(g)	16.9	9.9	脂質(g)	17.8	11.6	脂質(g)	16.1	9.4
食塩相当量(g)	3.6	4.0	食塩相当量(g)	5.7	5.2	食塩相当量(g)	4.3	3.5	食塩相当量(g)	3.5	5.0

3. 3 料理レシピ集（冊子）の作成

本プロジェクトでは、2020 年度より通算で 5 回の学食メニューコンテストを実施し、応募メニューの集積が定食、めん類、単品料理などあわせて 100 を超えた。今回、食関連学科学生の企画および編集により、これまでに集積した定食メニューから 11 品選定し、料理レシピ集（冊子）「おいしく食べよう 健康メニュー」を作成した。レシピ集に掲載した料理写真は、企画および編集した学生があらためてレシピをもとに料理を作り、見た目や盛りつけを工夫しながら撮影した。

また、本レシピ集は、近隣地域の高齢者等への配付も想定して紙媒体での情報提供としたが、新たな試みとしてメニューを作った学生が料理の作り方を紹介する動画を作成し、動画の QR コードを載せることで、メニューの作り方を動画で確認できるようにした。



図 12 料理レシピ集

4. 今年度の活動の成果

2022年度は、新型コロナウイルス感染状況も徐々に落ち着きをみせ、学食にも学生の姿がかなり戻ってきた。本プロジェクト活動も3年目となり、メニューコンテストの認知は進み、コンテストで選ばれたメニューが提供される際は学食の利用者数も増え、健康増進への意識づけに成果がみられている。POPや記念シールの作成などが、学食の利用への関心を高める効果をもたらしたと考えられる。学内においては、学食の利用をとおして、学生、教職員の健康増進に寄与する食生活（昼食）の仕組みづくりは浸透してきていると考える。

学生への教育的効果としては、メニューコンテストの応募は、本年度も食関連学科の学生にとどまってはいるが、コンテストの回数を重ねるごとに応募メニュー数は増え、第五弾では最も多い29件となり、学生の学食メニュー作成に対する興味・関心は高まっている。複数応募する学生も出てきており、メニュー内容のレベルは上がっている。また、POPのための料理写真の撮影スキルやデザイン力の向上も顕著である。メニュー応募の学生は、コンテストのテーマや学食利用者のニーズをもとに、メニューを考案し、さらには自ら作成のポスターでメニューを宣伝することで、提供当日の学食利用者の反応に喜びを感じるという、授業以外での専門性の学びを実感することができた。

また、今年度の活動では、プラスちゃんくらぶ（文芸文化学科）の学生による給食の容器に貼付する「創立100周年記念」シールのデザインの作成、本学YouTube動画「キャンパスを描こう！」に本プロジェクト活動が取り上げられ、広報課学生スタッフによる学食メニュー紹介が行なわれるなど、食を専門領域としない学生との新たな関わりをもつことができた。今後、それぞれの学科の学びをいかした関わり方を学生とともに企画していきたい。

本年度は、3年間のメニューコンテストで応募されたメニューについて、献立内容の質も良いものが集積したことから、それらを食関連学科の学生の企画および編集により料理レシピ集（冊子）にまとめることができた。学生は、レシピ集の利用者にとって料理の作り方がわかりやすいページレイアウトを考えることや、見た目や盛りつけを工夫しながら料理の写真を撮影することをとおして、将来の仕事などにもつながる視覚的情報の発信・編集のスキルを学ぶ場となった。次年度以降、本レシピ集は近隣地域住民との活動の場において配付し、地域への「栄養・食生活」の積極的な情報発信に有効な活用ができると考える。

4. 1 第四弾メニューコンテストに参加した学生の感想

4. 1. 1 お祝い！夏野菜のカラフルキーマカレー

前回に続き、2回目の採用ということで、大変嬉しく思っています。100周年をお祝いする気持ちから、華やかな見た目になるよう、カラフルキーマカレーを提案しました。オクラやかぼちゃなど色とりどりの野菜を用いたことで、カラフルさとともに、さまざまな栄養素も摂取することができます。友人を含め、多くの方々に食べていただき、「美味しかったよ」と声をかけられ、とても幸せな気持ちになりました。

4. 1. 2 100周年プラスちゃんバーガー定食

創立100周年をどのように表現するか、たくさん考えプラスちゃんバーガー定食を考案しました。プラスちゃんバーガー定食は、100周年という積み重なった歴史と、十文字学園女子大学の緑豊かな環境をサニーレタス・マスタードのピリ辛さと、はちみつの甘さがあるハニーマスタードチキンにしてハンバーガーで表現しました。学食でハンバーガーの提供が初めてと聞き、皆さんに食べていただいて「美味しい」と笑顔で食べている様子や、並んでいる最中に「早く食べたい」といった会話が聞こえてきてとても嬉しい気持ちになりました。コンテストに参加して自分に自信をもつことができました。

4. 1. 3 なすとツナのアラビアータペンネ

2人とも、メニューが選ばれるとは思っていなかったのですが、結果発表のメールに自分たちの献立名が載っていた時はとても驚きました。創立100周年のお祝いメニューから、トマトの赤とチーズの白で紅白を表現しました。実際にメニューが提供されているのを見て実感が湧き、形になったのがとてもうれしかったです。食堂で自分たちの考えたメニューを選んでくれている人を見て、こちらのプロジェクトに応募して良かったと感じました。また、試作時と少し違う盛り付けで提供され、大量調理での食事提供の工夫についても勉強にもなりました。

4. 2 創立100周年記念シール作成の学生のコメント

プラスちゃんのイメージカラーであるピンクを使いながら、シンプルなデザインになるよう心がけました。試行錯誤を重ねた結果、まとまりのある可愛らしいシールになったと思います。

4. 3 第五弾メニューコンテストに参加した学生の感想

4. 3. 1 豆腐ハンバーグきのこ定食

寒くなる季節にみなさんの心が温まることを願ってこの献立を考えました。主菜は、あっさりして食べやすい豆腐ハンバーグに、寒い時期にうれしい、「とろ〜りきのこソース」をかけました。主食にはさつまいも本来の甘さを生かしたさつまいもごはんを組み合わせました。自分が考えた献立を販売していただくのは初めての経験でしたので、販売日までとても緊張しました。当日は、販売開始と同時に私も学生食堂に入りましたが、お客様の列がみるみる伸びてゆく様子を見て、胸がいっぱいになりました。この貴重な経験を今後にかかしていきたいと思います。

4. 3. 2 野菜たっぷり！！ビビンバ丼定食

野菜は火を通すことでカサを減らし、たっぷり食べることができるよう工夫しました。この定食では約1/3日分の野菜を摂ることができます。ビビンバ丼は韓国料理で辛い印象がありますが、辛さが苦手な人でも食べられるよう豆板醤を少なくし、トマトの中華風ナムルはさっぱりとした味付けでメリハリをつけることで箸が進むよう工夫しました。ビビンバ丼の温泉卵が半熟で、混ぜれば混ぜるほど美味しかったです。トマトの中華風ナムルにワカメが追加されたことで彩りや味付けがよくなりました。列ができるほど並んでいただき、味も好評で嬉しかったです。

4. 3. 3 サーモンとキノコのポテトマカロニグラタン

実際に考えたメニューを多くのかたに食べて頂くことができ、とてもやりがいと嬉しさを感じました。今回は根野菜を中心に野菜をたっぷり使用し、寒い冬に温まれるようなメニューを意識しました。また、白やオレンジ、緑や黄色など彩りを良くして見た目からも美味しさが伝わるように工夫しました。学食のメニューでグラタンをあまり目にすることがなかったのでどのように提供されるのか楽しみにしておりました。サーモンとキノコのポテトマカロニグラタンがとてもクリーミーで、鮭の塩味やきのこの旨みと合わさっておいしく頂くことができました。

4. 4 料理レシピ集（冊子）「おいしく食べよう 健康メニュー」を企画・編集した学生の感想

①レシピ集に掲載する料理をほかの人がつくったレシピで調理するのは難しいと感じる点がありました。自分がレシピをつくる際は、ほかの人に分かりやすく伝えるように工夫することが必要であることを学びました。盛り付けや皿の種類を考え、料理の配置やレイアウトを工夫し、料理の写真を撮るのは想像以上に難しかったですが、とても良い経験になりました。

②学食でも提供されたメニューのため、手軽に作ることができて彩りなどの見た目にも意識を向けたレシピが多かったです。野菜を多く使っていることで栄養バランスの良いレシピになって

おり、レシピ集の作成をとおして自身の食生活を見直すきっかけになりました。テーマのコンセプトに沿って様々な工夫を凝らしたレシピを調理することでとても勉強になりました。

③定食形式で、和・洋・中華の料理を掲載し、色つき写真で美味しさが十分伝わるようなレシピ集にしました。写真の位置や主菜、副菜、汁物の色分けで統一して見やすくしました。手に取りやすいサイズですが、10種類以上のメニューが掲載されており、とても参考になるレシピ集になったと思います。

5. まとめと今後の課題

プラスごはんプロジェクトにおける活動は3年目を迎えたが、いまだ新型コロナウイルス感染予防の観点から、地域住民と直接関わり合う活動等は叶わず、大学ホームページなどの電子媒体の情報発信に限られた。

学内の活動における学生食堂を利用したメニューコンテストは前・後期の2回実施したが、学食を利用する学生や教職員の健康増進に対する意識づけと学生への教育効果がみられた。また、5回のコンテストにおいて集積したメニューをもとに、料理レシピ集を学生の企画・編集により作成できたことの成果は大きいと考える。

次年度以降、レシピ集で掲載したメニュー等を学生が地域在住者とともに実習できる料理教室の開催などを学生主体で企画・実施する。これをきっかけに、学生と地域在住者との交流を深め、地域在住者が実践している料理などのノウハウを学生に伝える場を設けることで、本プロジェクトの目的である食生活と健康について、地域との交信、共振をはかることができる。

最後に、本活動は、十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。「プラスごはんプロジェクト」に関係の学生に活動の場を提供いただき、その成長を支援してくださった株) グリーンハウス様をはじめ、すべての方々に感謝申し上げます。

(参考文献)

- 1) 名倉秀子、木村靖子、岩本珠美、岡本節子、村田浩子、佐々木菜穂、星野祐子、2020、健康増進に向けたプラスごはんプロジェクトからの地域への情報発信・交信・共振ーコロナ禍での学生食堂のメニューコンテストの取組みー、地域連携共同研究所年報 第6報、89-98
- 2) 名倉秀子、山崎芳江、栗崎純一、他11名、2017、学校給食における5献立の品質管理の検討、日本食育学会誌、11、1、25-34

多世代交流を可能とする地域の居場所づくり

Creating a place in the community that enables multi-generational exchange

佐藤 陽¹⁾ 山下倫実²⁾ 山口由美³⁾ 人見優子⁴⁾ 西村百絵⁵⁾
Akira SATO Tomomi YAMASHITA Yumi YAMAGUCHI Yuko HITOMI Momoe NISHIMURA

1) 十文字学園女子大学・人間生活学部人間福祉学科 2) 同・教育人文学部心理学科 3) 同・人間生活学部人間福祉学科 4) 同・人間生活学部人間福祉学科 5) 同・地域連携推進課ボランティアコーディネーター

キーワード: 多世代交流 地域の居場所づくり ボランティア体験プログラム
地域ボランティア活動 ふれあい体験 支え合い体験

要旨: 本学の学生の地域ボランティア活動体験の機会として、1つは、市内で多世代による地域の居場所づくりに取り組む3つの地域関係団体と連携し、その地域活動を体験するボランティア体験プログラム「地域ボランティア活動事業」として、受動的な「ふれあい体験」から、学生主体の能動的な「支え合い体験」に取り組んだ。もう1つは、特定の地域で地域関係者と実行委員形式で複数回の「支え合い体験」を地域の中で実施する実験的実践を実施した。この2つの実践により、体験学習展開方法は妥当であり、体験を通じて社会人基礎力を身につけられることは共通したが、地域活動に学生が継続的に貢献できるようになるためには、地域関係者とともに直に地域の中で複数回、企画運営にかかわる必要があることが示唆された。そして、コーディネーターや地域関係者が体験学習展開過程における支援として4つの視点を明らかにした。

I はじめに

超少子高齢社会という未曾有の社会に向かう中、核家族化している次世代を担う子どもたち、単身化が増えつつある高齢者、親亡き後の生活が懸念される障害のある人たちが交流し、互いを知り、理解し合う機会を創り、多世代が交流できる地域の居場所づくりが求められている。

こうした地域の居場所づくりとして、NPO法人新座子育てネットワークは「にいざ子どもの未来包括連携プロジェクト」として、地域のシニア世代を中心とする町内会の人たちが子どもを支える「子どもの居場所づくり、子どもひろば」に取り組んでいる。また、地域住民を中心に、さまざまな地域の社会資源が協働する新座市北部第二地区地域福祉推進協議会の「まったり木曜」は、障害のある人も含め、誰もが気軽に集える地域の居場所として機能している。

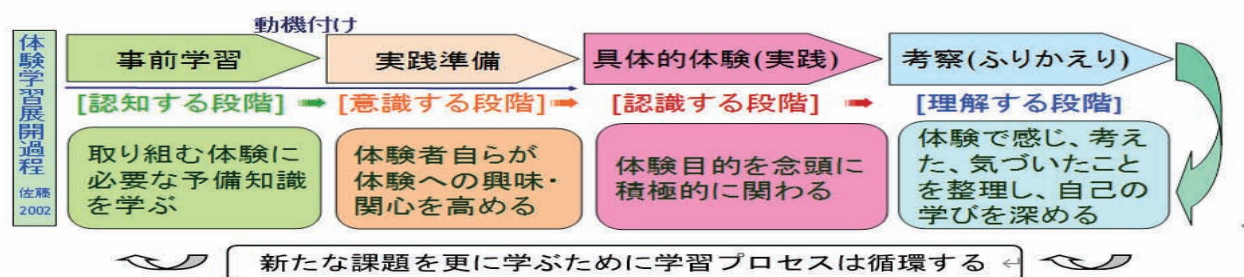
また、コロナ禍で人や社会とのかかわりが希薄化している学生が、地域の子どもや障害のある人、お年寄り等さまざまな立場の人と交流の機会をもつことは、学内では体験できない地域活動を体験(地域ボランティア活動)することになる。多様性を認め合える超少子高齢社会を認知しながら、学生がさまざまな立場の人と出会い、地域関係者とともに多世代交流の場に取り組むことは、学生の地域貢献につながる。

本研究は、ボランティア体験学習プログラム「地域ボランティア活動」事業の展開方法¹⁾(図1)を活用し、本学の学生が上記の地域の居場所を体験し、自らこの地域活動に継続的に参加し、地域貢献できるよう「多世代交流を可能とする地域の居場所づくり」を目的に以下の検討を試みた。

地域活動の体験機会(ふれあい体験)をつくり、その経験に基づき、学生が主体となって地域の方々と多世代交流する実践(支え合い体験)に取り組むことで、学生がボランティア体験を通じて、地域課題に直接かわり、問題解決に向けて継続的に学習しながら主体性を育み、グループ化して地域社会に貢献できるようになるか明らかにする。

また、学生サポーターとボランティアセンターで実施する地域ボランティア活動事業だけでな

く、地域ニーズである多世代交流を町会長等の有志と実行委員会を形成し、新座市内あたご地区の地域関係者と学生と教員が地域の居場所づくりとして、当初から「支え合い体験」に臨む実験的実践も試みた。



(図 1) ボランティア体験学習プログラム「地域ボランティア活動」事業の展開方法

本研究は、SDGs の「3 すべての人に健康と福祉を」「11 住みづけられるまちづくりを」「17 パートナリシップで目標を達成しよう」と関連する。

II 地域ボランティア活動事業の取り組み

1 地域ボランティア活動サポーター

昨年度の地域ボランティア活動事業の参加学生のうち 7 名（3 年 4 名、2 年 3 名）から、本年度も参加を希望した学生には、継続的に地域活動に関わりながら地域関係者と協力し、新たな参加学生と地域関係者をつなぐメンター役割（ボランティア体験の経験者として、初めて体験する人に助言やサポートをしてもらう）を担うサポーターとして 2022 年 3 月末から話し合いを重ね、プログラムの企画運営に加わってもらった。

2 事業運営を協働する地域関係者

地域活動で連携する地域関係者は、大学が所在する新座市内で活動している 3 団体(NPO 法人新座子育てネットワーク、新座市北部第二地区地域福祉推進協議会、あたご地区みんなのひろば☆きらり)と、地域ボランティア活動事業のサポーターになった学生の要望から、昨年度オンライン体験で事業参加いただいた活動団体(坂戸市よりあい＊ええげえし)にご協力いただいた(表 1)。

表 1 地域関係者との打ち合わせ

3月11日(金)	NPO法人新座子育てネットワーク、新座市北部第二地区地域福祉推進協議会へ事業協力の打診
5月14日(土)	よりあい＊ええげえし 事業説明、打ち合わせ
6月1日(水)	NPO法人新座子育てネットワーク事業説明、打ち合わせ
6月7日(火)	みんなのひろば☆きらり代表者と顔合わせ
6月8日(水)	サポーターと地域の人たちとの顔合わせ
7月14日(木)	新座市北部第二地区地域福祉推進協議会 見学・挨拶、打ち合わせ

3 2022 年度地域ボランティア活動事業展開について

本年度から登校が再開され、課外活動についても基本的な感染対策を徹底したうえで活動可能になった。コロナ禍の活動ではあったが、安全を配慮しながら、Slack（ビジネスチャットツール）などを活用して事業を実施し、以下のようなスケジュールで行なった（図 2）。

事業の前半部分「フェーズ 1」（事前学習、ふれあい体験、ふれあい体験振り返り）の段階は、ボランティアセンターが中心となり、事業後半「フェーズ 2」（支え合い体験に向けての準備、支え合い体験、支え合い体験と全体振り返り）は、学生主体になって地域関係者と協働し、イベント開催に向けて企画運営を学生が担い、地域関係者と調整しながら実施することになった。

「フェーズ 1」において、サポーターは、地域の方や学生がつながるイメージを想定して、【地域とつながる 人とつながる 心を結ぶ】をキャッチコピーにして活動を全学生に広報し、「ボラ

ンティア論」で紹介した。受講生からは「学生が活動紹介することで興味をもった」「自分と同じ学生が企画運営したのがすごいと思った」と、ボランティア活動を身近に感じたという感想が多く寄せられた。その後、「事業説明会」を実施し、23名（6学科1年生9名、2年生7名、3年生7名）の学生が出席した。その後、サポーターは質問会を設け、説明会に参加できなかった学生もフォローした。その結果、事業に20名（学科内訳：健康栄養1名、食物栄養2名、人間福祉7名、心理10名 学年：1年5名、2年6名、3年9名）が申し込んだ。サポーターはその後、参加者同士の関係づくりのため交流会を実施し、22名が参加した。また、昨年度オンライン体験のみのサポーターは、本年度の地域活動の場となる「みんなのひろば☆きらり」と「子どもひろばのびっこひろば野火4」に参加し、地域でさまざまな人と関わる楽しさを実感した。



(図2) 活動に向けたスケジュール

そして、さまざまな地域活動を体験する「ふれあい体験」を8月3日(水)から9月1日(木)の間、オンライン体験3プログラム14名参加、地域活動14プログラム(図3)延べ18名が参加し、全日程を無事に終えられた。その後、9月10日(土)に体験の振り返りを実施し、学生14名、地域関係4団体12名、教職員2名が参加して、体験を振り返り、次の支え合い体験に向けて、地域の課題や学生に期待することなどを地域の方から話してもらった。

NO	日時	活動名	内容	場所	持ち物	参加人数	備考
1	8月27日(土) 10:00~14:00	みんなの広場inあたご	子どもや高齢者たちとの交流	あたご広場 新座市あたご3-7-1		3	
2	8月3日(水) 9:00~12:00	子どもひろば のびっこひろばあたご・菅沢	小学生との遊びや学習の見守りなど	あたご・菅沢集会所 新座市あたご3-13-6		1	
3	8月10日(水) 9:00~12:00	子どもひろば のびっこひろばあたご・菅沢	小学生との遊びや学習の見守りなど	あたご・菅沢集会所 新座市あたご3-13-6		1	
4	8月17日(水) 9:00~12:00	子どもひろば のびっこひろばあたご・菅沢	小学生との遊びや学習の見守りなど	あたご・菅沢集会所 新座市あたご3-13-6		0	1名欠席
5	8月20日(土) 9:00~12:00	子どもひろば のびっこひろば野火4	小学生との遊びや学習の見守りなど	野火止4丁目集会所 新座市野火止4-19		2	
6	8月24日(水) 9:00~12:00	子どもひろば のびっこひろばあたご・菅沢	小学生との遊びや学習の見守りなど	あたご・菅沢集会所 新座市あたご3-13-6		1	
7	8月4日(木) 9:30-12:00	まったり木曜臨時立ち寄り所	バザーを通して地域の人たちと交流	スペースともに 新座市新座2-16-1		1	
8	8月4日(木) 9:30-15:00	まったり木曜臨時立ち寄り所	バザーやビンポンを通して地域の人たちと交流	スペースともに 新座市新座2-16-1	室内履き ※昼食については備考欄参照	1	
9	8月17日(水) 10:00-12:00	出張遊びの広場	子どもたちとの遊びや交流	新座小学校 新座市新座3-4-1	水遊びをする可能性があるため、着替えやタオルなど	3	
10	8月18日(木) 9:30-12:00	まったり木曜臨時立ち寄り所	バザーを通して地域の人たちと交流	スペースともに 新座市新座2-16-1		1	1名欠席
11	8月25日(木) 9:30-15:00	まったり木曜臨時立ち寄り所	バザーやビンポンを通して地域の人たちと交流	スペースともに 新座市新座2-16-1	室内履き ※昼食については備考欄参照	1	
12	8月28日(日) 14:00-16:30	遊びの広場 ※雨天中止	子どもたちとの遊びや交流	東裏公園 新座市大和田1-23-19	水遊びをする可能性があるため、着替えやタオルなど	0	2名参加予定だったが雨天中止
13	9月1日(木) 9:30-12:00	まったり木曜臨時立ち寄り所	バザーを通して地域の人たちと交流	スペースともに 新座市新座2-16-1		2	
14	9月1日(木) 9:30-15:00	まったり木曜臨時立ち寄り所	バザーやビンポンを通して地域の人たちと交流	スペースともに 新座市新座2-16-1	室内履き ※昼食については備考欄参照	1	

(図3) 地域活動体験一覧

「フェーズ2」として、支え合い体験に向けてサポーターは、振り返り時に多くの意見がでていた「縁日」と「工作」の二部構成で実施するため2グループに分かれ、それぞれ内容を詰め、全体については参加者の代表学生中心で進めていくこととなった。しかし、当初想定した役割分担は異学部異学科異学年の学生間で時間が合わないため機能せず、参加者の代表とサポーターで役割を再構成し、なんとか事業を成し遂げたいという学生の思いをボランティアセンターが支えた。開催に向けたチラシは地域関係者から地域の方たちへ呼びかけていただき、対面実施に向けて準備された。次第にSlack等、学生間のやりとりも活発になり、常に誰かがボランティアセンターに来て準備や話し合いが行われるようになった。学生たちは「高校では文化祭ができなかったから、文化祭の準備をしているみたい。なんだか楽しい」と話していた。コロナ禍で、学校行事の体験が一切できなかった学生たちにとっては、高校生活でできなかったことを取り戻しているようにコーディネーターには見えていた。昨年のように途中で辞めてしまう学生はおらず、最後まで自分なりに出来ることにかかわり、当日、実習や就活で参加できない学生はいたが、「支え合い体験」前日まで20日以上準備に参加学生が携わった。

「支え合い体験」は、「わっしょい！ささえ愛まつり2022～多世代deおもいでづくり～」として、11月19日(土)10時～12時、学生13名、地域関係者2団体26名(大人20名、子ども6名)、教職員2名が参加して実施された。前半は、縁日をテーマに4グループ、“わなげ”、“お手玉投げ”、“お菓子釣り”、“新聞棒入れ”をスタンプラリー形式で実施し、後半は「森のカーニバル」をテーマに一人ひとりが折った折り紙を模造紙に貼り付け一つの作品を完成した。縁日は、個人で楽しめるものもあれば、グループ内での対抗戦もあり、大人も本気を出して盛り上がっていた。工作は、「ふれあい体験」の一つ「みんなのひろば☆きらり」に参加した学生たちのアイディアで、「参加者と一つのものを作りたい」との思いを実現した。難易度別にいくつか用意していたが、折り紙の見本を見ながら大人でも難しく、あちらこちらから「難しいよ」との声が聞こえたが、それぞれ教え合いながら作成していた。直前まで打合せをしていたおかげで、学生が連携し落ち着いて対応していた。初めは緊張していた学生たちも地域の方たちが楽しんでくださっている様子をみて、表情も徐々に和らぎ、学生自身も楽しめている様子が伺えた。今回、6名の子どもたちが参加してくれ、一組の親子は地域団体の活動にまだ参加したことがなかったが、地域の

方の声かけにより今回参加して下さった。イベントを通して、同じ町会の人が出会い、一緒に話している姿も見られ、今回のイベントが地域の住民同士の新たな交流のきっかけにもなっていた。



写真1 わっしょい！ささえ愛まつり 2022～多世代 de おもいでづくり～



写真2 活動の振り返りを終えて

その後、「支え合い体験」と事業全体の振り返りを11月19日(土)13時～15時、学生13名、地域関係者5名、教職員2名で実施した。振り返り終了後、地域の方から、「自分たちのアイディアだと活動内容に変化がなく、支え合い体験で使用したレク道具を自分たちの活動でも使用したいのだけではないか」と声をかけていただきお譲りした。後日、地域の方から「早速、活動に取り入れてみた」と連絡をいただいた。「支え合い体験」、振り返りを通して、地域の方たちが笑顔で楽しんでくださっている様子や自分たちが準備してきたことがうまくできたこと、また自分たちのアイディアを地域の活動の参考にして下さったことなどが、学生の事業達成感につながった。

4 事業担当コーディネーターの振り返り

本事業の企画運営をサポート者と地域関係者と協働して、サポーターと参加学生に寄り添い、全行程を支えたコーディネーターは、学生の全体の感想から、本事業を通じてやりがいや楽しさが得られ、「ふれあい体験」での経験が「支え合い体験」のプログラム(工作)に活かされ、実践による学びがさらに地域実践につながったことを確認した。また、途中で辞めていく学生が本年度少なかったのは、学生同士の運営準備や多様なかわりで作られた雰囲気が、緩やかな学生間のつながりを生みだし、この場が安心感を得られる居場所になっていたのではないかと考えている。しかし、学生はこの場を思い出作りの場と捉え、「支え合い体験」で完結し、学生が地域活動の継続につながらなかった理由は、「就活や授業、実習準備で忙しくなった」「予定が合わない」と答えた人が多く、その他、「交通費が負担」「支え合い体験を終えられ満足した」と答えていた。当初の事業目的の参加学生同士で地域活動につながりグループ化することは成し得なかった。しかし、3名の学生が個別に地域活動に参加するようになった。一人は、「ふれあい体験」でも子どもとかかわる地域活動に参加し、実習が始まるまで毎月参加していた。参加動機や参加を通して感じていることとして、「普段関わらない世代と関わることで、子どもたちの過ごし方を知ることができて、色々と学ぶことがあり、続けたいと思ったから」と述べている。今後も「子ども達と触れ合いたいから」と活動参加を前向きに捉えている。もう一人の学生も「ふれあい体験」で子どもとの地域活動に参加し、「支え合い体験」後から参加し始め、参加理由は「ふれあい体験に参加した時と支え合い体験がとても楽しく、自分の性格である人見知りを直していくことができているから」、「活動がとても楽しく、今後も活動に参加していきたい」と述べている。もう一人の学生は、「北二事業では、障害がある方ともふれあえると聞き、少しでもふれあい学んでみたいと思ったため参加したいと思った。きたにフェスタに参加してみて、障害があるなし関係なく交流できるフェスタは、今後の障害者理解のためにも重要だと感じた」と記している。

コーディネーターは、学生が本当の意味で自発的・主体的に地域活動に取り組めるようになるには、学生の負担を減らしながら、他者や社会(地域)に目を向けられるような介入の仕方やプログラムの改善が必要である、と事業を振り返り改めて認識した。

Ⅲ 地域ボランティア活動事業の参加学生の学びを考察する

1 サポーターは運営の難しさを学びながら、2つの体験の意向をスムーズに支える役割を担った

参加学生の承諾を得て、①事前学習（7月9日）、②ふれあい体験（8月～9月）、③ふれあい体験振り返り（9月10日）、④支え合い体験、地域ボランティア活動の振り返り（11月19日）の計4時点（図2）でFormsに感想を書いてもらい、80件提出された。また、④支え合い体験、地域ボランティア活動の振り返りでは、学生と地域の方でグループワークを行ない、発表資料も作成された。この学生の感想や発表資料を振り返り、地域ボランティア活動の意義や今後の課題について整理した。

今年度の新たな試みとして、昨年度も地域ボランティア活動に参加した学生を「サポーター」と位置づけ、初めて参加する学生のメンター的な役割を果たしてもらった。事前学習後の感想ではサポーターからは「地域ボランティア活動を通して、他学科の学生や先輩と仲良くなりたい」という期待が高かいことが伺えた。初めて活動を行う学生は、「学外の方と交流したい」という期待が高く、サポーターとは異なる傾向であった。今年度は、「ふれあい体験」から「支え合い体験」へスムーズに移行する学生が多かった。これは地域ボランティア活動の経験者の何気ない言葉から活動への不安が減り、何かあったら教えてくれる先輩が「ただ」いてくれることへの安心感から生まれた間接的な効果と考える。また、「リーダーになってみて、難しいこともあったけれど、よく進むだけでなく、うまく物事が進まない経験もできてよかった」、「他学科との関わりで新しい視点を得た」など、活動の中で難しいことがあることも失敗ではなく、難しいことを経験することによる学びがあること、困難な中でも人と関わることで得られるものがあることなど、経験したからこそその学びもあったと考える。

2 「ふれあい体験」で大学での学びの意義に気づき、社会から期待される能力が萌芽する

次に、地域ボランティア活動のうち受動的な体験と能動的な体験から得られた学びについて考察する。まず、受動的な「ふれあい体験」によって得られるものとして、「若い世代が必要とされていることへの気づき」、「異なる世代と関わる時のコツ」、「支える側に支えられている実感」、「地域の方々が支え合う理由に関する理解」を挙げた。これらの実感や気づきが得られるだけでも、社会の一員としてどのように貢献していくかを考えるきっかけとなり得る経験であり、地域ボランティア活動の意義として大きいと考える。また記述の中で、「対象となる方に関する知識をもっと大学で学んでおくべきだ」とか、「大学で学んだコミュニケーションに関する知識が役立った」という記述もあり、地域ボランティア活動に参加することによって、大学の学びの意味に気づくという相乗効果も期待できる。加えて、地域ボランティア活動に携わる人の多様さが、様々なコミュニケーションを生んでおり、自分自身のこれまでの関わり方の振り返りや、どうしたら上手くいくのかの試行錯誤を促す効果があり得る。また、地域ボランティア活動をしている人々、企画運営に参加している人々、一緒に参加する他の学生の振る舞いを見ることで、自分もやってみようという意欲が掻き立てられる可能性もある。以上により、まずは受動的な参加であっても、コミュニケーション力や傾聴力などの他者と関わる能力や、課題を発見し、解決を目指して学び続ける能力など社会から期待される能力について成長の兆しが感想からも認められており、地域ボランティア活動に参加してみることに意義があると考えられる。

3 「支え合い体験」として地域の中で学ぶことで主体性や実行力が育まれる

その経験を踏まえた能動的な「支え合い体験」からは、「多世代交流を支えられた喜び」、「今後の活動のアイデアを提供できた嬉しさ」、「自分自身の成長感」を得ていた。大きな違いはやはり積極的に関与したことによる成長感である。「成長」という言葉を自分自身に対して使うことは「ふれあい体験」の感想ではほとんど見られなかった。成長はある意味で痛みを伴うものであり、うまくいかなかったことや失敗、自分自身が抱えるコンプレックス、誰かと一緒に目標を達成する難しさなど、様々な感情的な葛藤と向き合うことになる。「支え合い体験」の準備をやり遂

げ、多世代交流を支える側になれたという自信を持つことで初めて、「今までできなかったことができるようになった」という成長感を感じられたのかもしれない。興味深いのは、この難しさの中に「地域ボランティアに携わる人」や「地域ボランティアの対象者」が入っていないことである。また、「支え合い体験」後のグループワークであがってきた今後の課題は、期限を守ること、役割分担をすること、計画的に進めること、対面ミーティングと Slack を上手に使い分けることや情報の整理を丁寧にするなど、本来ならば大学の中でも十分に育むことができるグループでの課題の取り組み方に関するものであった。

コロナ禍で3年間、友人関係を築くチャンスを失い、集団で何かに取り組む活動も制限されてきた。そのため、リーダーやフォロワーとしての振る舞いを経験したことがなく、それどころか学生間でたわいないおしゃべりをしたり、何をしたりするわけでもなく一緒にいる、ごく自然な対面のコミュニケーションさえ、戸惑いを感じる学生も多かったかもしれない。また、Zoom や Slack といったオンラインを使ったコミュニケーションも、自らオンラインツールを使って、誰かと関係を築いたことはないのかもしれない。そして、一番の問題はこの困難さの個人差が大きいことである。ある学生は対面が得意、ある学生は文字でのコミュニケーションは苦手、ある学生はオンラインでのコミュニケーションが得意だが対面が苦手と、個人によってコミュニケーション能力が凸凹していることであるように思う。そのため、それを支援するコーディネーターもどのように場を活性化したらよいのか、どのように作業を示せば学生たちが安心して役割分担できるのか、自主的な意思決定を促すにはどうしたらいいか、悩むことが多かったように見受けられる。このような地域ボランティア活動を行っていくうえでの基礎的な能力を下支えしていくことが、実は地域ボランティア活動を継続的に行う自信を育んでいくうえで重要なかもしれない。

総じて、地域ボランティア活動に挑戦することで、自己理解を深めたり、今まで見えてこなかった社会の課題や異なる世代の魅力に気づいたり、社会には若い世代を必要としている人がいて、自分は十分に社会に貢献する力が眠っていることを学生たちが実感できたことが伺えた。特に、「支え合い体験」においては、主体性や実行力など実際の取り組みの中で育まれる能力が向上しており、大学から地域の場に出たみて、多様な人々を支えることに真剣に取り組んだ結果であると考えられる。地域ボランティア活動を行う仲間との間で葛藤したり、人を「支える」という正解がない取り組みの中で試行錯誤したり、様々な経験を経て学生たちは成長していく。このような学びは大学の中だけで経験することは難しく、支え支えられることを受容してくださる地域の方々が存在があってこそ実現するものであることが感想から確認された。

IV 地域の居場所づくりに向けた実験的実践の試み

1 地域ニーズに応え多世代交流サロンに取り組む

新型コロナウイルス感染症拡大の中、「集まる場を求める声」があり、2022年5月より、新座市あたご三丁目地区と清瀬市A団地を中心とした地域にお住まいの方々と、本学の学生と教員と一緒に活動をする、だれもが立ち寄れる多世代交流サロン「みんなのひろば☆きらり」を開始した。全体をコーディネートする実行委員に本学教員2名、商店街会長、ひろば管理者、地区会長の計5名を置き、実際に活動を実施する運営委員には、本学学生と地域住民が担うこととした。そして学生の運営委員長を中心に、学生の募集、リーフレットやチラシの作成、活動準備を行い、2022年5月より月1回ずつ、第3あるいは第4土曜日にテーマを設定して開催した。目的は、(1)地域の方が知り合いになること。お互いのことを理解すること。(2)地域の方が生活する上での課題について確認し、一緒に解決する方法を考えること。(3)「みんなのひろば☆きらり」が地域の方の愛着のある居場所になることを考えること。当該地域の住民が、この場所を利用することの了解を得たうえで、だれでもが集えるサロン活動を行った。人間福祉学科7名、健康栄養学科1名、社会情報デザイン学科2名が集まり、その後の参加・不参加の希望者の増減を経て13名の学生運営委員で、2023年3月25日まで毎月開催し11回の活動を実施した。



写真3 第2回七夕飾り作り



写真4 第4回ハンドケア

2 地域の社会資源を活用し回を重ねるごとに認知されるようになる

教員の実行委員は、地域から健康体操の希望があったことから、健康栄養学科教員の協力を得て授業内で3年生が考案したチェアエクササイズを実施した。先に学生運営委員が教えていただき、大学内で練習したり、動画を観ながら個人練習をしたりした上で、地域の方と一緒にいった。少々難しいくらいの動きに達成感があつた様子で、感嘆の声や笑い声が上がり、笑顔で体操を行うことができた。また、ハロウィンを活動場所である商店街を中心に行ない、仮装した参加者は、商店街の店舗を周ってもらい、ポイントカードにスタンプを集めていくことにした。商店街の活動に賛同している18店舗の協力を得て、活気を失いつつある商店街に地域に住む人たちが訪れることで、顔見知りになる機会を得ることができた。またお店の方からは、「このような企画は大歓迎です。子どもが来てくれて嬉しい」との声が聞かれた。子どもたちは、ある店舗ではご厚意でお団子をいただき、最後に参加賞としてお菓子をいただき、楽しい時間を過ごすことができた。

活動の実施は、自分たちだけで行うことは難しく、地域の参加者の協力はもちろん、大学や地域の社会資源を上手く活用しながら運営した。社会資源活用の交渉には、実行委員が入ることで、思いがけずスムーズに事がすすむことがある。様々な方に活動を理解していただきながら、さらに地域とのつながりを広げることとなり、大変有効な資源の活用であったといえる。

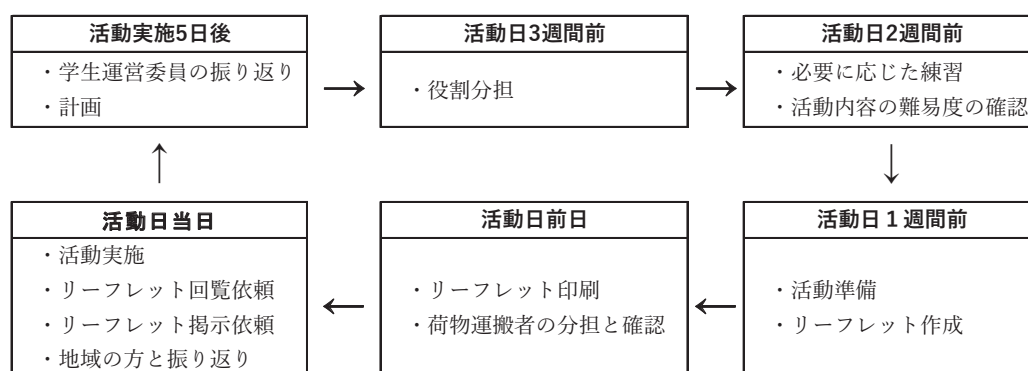
学生は最初こそ戸惑い、日頃かわかることの少ない世代と交流する難しさを感じていたが、意思疎通が図れた時の喜びを実感していた。子どもたちは、シニアの昔話を聞きながら、シニアにも子ども時代があつたことの驚きや生活の知恵を得ることができていた。世代間の交流は少しずつ深まり、参加者の口コミからの更なる参加者が徐々に増え、地域の定期的な活動として認知されてきたことで、多世代交流を可能とする地域の居場所になっていたといえる。

3 地域の方々をつなぐ学生運営委員の役割と意識の変化

この場を運営する課題は、子どもの保護者世代の地域運営委員の希望者がおらず、学生運営委員が相当数必要になることだった。学生運営委員は、少ないながらも確保されたが、保護者世代は、有職者が多く、忙しいことや土・日くらいは休みたいこと、子どもの習い事で参加が難しいことなどを理由に参画いただくことはできなかった。しかし社会福祉協議会や老人会、子ども会に協力いただきながら、活動をすすめることができた。

教員実行委員の役割は、学生運営委員への「主体的」な取り組みをサポートすることと、活動実践を見守り、励ますことであった。基本的には、学生の考えや行動を妨げないことを意識しながらも、困難な側面には手を差し伸べ、適度な距離を保ちながらかわってきた。時には教員側が、間に合うのか、実施できるのかと心配をすることもあつたが、「どうなっているのか」を確認することはあっても、「どうしなさい」と指示することはなく、相談にはのるが、あくまで実施主体は学生運営委員であるとの立場を示してきた。当日の活動は、教員がそばにいてことで大きな問題を生じたことはない。しかし、学科も学年も異なる学生には、それぞれ活動以外にも、実習やサークル、アルバイトなどの都合もあり、参加学生がそろわない月も生じ、準備がままならぬ

まま当日を迎えたこともあった。また学生の一部には、はじめから「当日やればよい」との意識が大きくなり、何も準備をせずに当日を迎えようとするものがあつた。11月頃からは、学生の当日参加が少ないことに加え、準備が不十分なことで更に人の手を必要とする状況となり、学生が本学ボランティアセンターに相談する姿もあつた。このような状況に危機感を覚えた上級生から、振り返りの時間に、早めの計画や準備がゆとりある実践へとつながることが伝えられ、仲間からの声に運営委員全体の意識に変化が生じた。学生自ら「主体的」に行動することの必要性が発言されるようになったのは、活動開始から実に8ヶ月程経過してからのことで、先輩からの助言をきっかけに、学生たちの姿勢は大きく変化した。活動の後半時期の学生運営委員の実施プロセス（図4）では、参加者数が少ないからこそ、十分な計画と準備を施す事で、当日の負担が激減した。そして、準備の時間を大切にすることは、学生間の連絡が密となり、準備を通して交流が生まれることにもつながる相乗効果となった。通常の大学生活では知り合うことのない仲間と時間を共有し、仲間意識を強めることで、「計画→準備→実施→振り返り」という一連の活動全体が負担なことではなく楽しい活動の一つとなり、よいサイクルが生まれたと考える。



（図4）活動後半の学生運営委員会の実施プロセス

学生は、自ら楽しみ、試行錯誤しながら、学び得る力量として、主体性、チームワーク、リーダーシップ、協調性、実行力、課題設定、解決能力、想像力、傾聴力、発信力など、この実験的実践を通して身につけることが可能であることが確認された。

V 地域の居場所づくりに紡ぐ2つの実践から-地域ボランティア活動事業と実験的実践-

1 地域ボランティア活動は参加者の学びに生かされつつ地域活動への継続は個人単位

学生は「地域ボランティア活動」に参加したことで、普段かかわらない、異学部異学科異学年の学生とかかわれたことが楽しさややりがいになり、地域の方から、自分たちの関わりを評価し感謝してもらえた経験によって達成感を得ていたことは、サポーターを中心とする参加学生の様子から確かにうかがえた。「ふれあい体験」によって、自分たち若者が社会に必要されていることを実感し、異なる世代の人たちとの関わり方を知り、自らも支えられる体験を通じて、地域では互いに支え合う必要性があり、大学での学びの必要を地域の方々との関わりから再確認していた。さまざまな気づきから、学生自身が社会の一員としてどのように地域で貢献していくか考えるきっかけを「支え合い体験」の実施過程を通じて追認した。本年度は、「ふれあい体験」の参加者14名が「支え合い体験」に13名つながり、昨年度に比べ離脱者がほとんどおらず、何気ない声かけ、いてくれることへの安心感等、間接的なサポーターの関わりが、初めて参加した学生に効果したと考えられる。しかし、アンケートで学生が活動の対象者となる方への不安や困りごとが全く記述されていないのは、「支え合い体験」のテーマを「おもいでづくり」としており、そこに活動を継続する姿勢は垣間見られなかった。多様な人と関わるボランティア体験をしたにもかかわらず、イベント的に企画運営することに主眼をおき、地域関係者とのやりとりを重視しなかった学生の態度からも分かる。コロナ禍の3年間、対人関係・社会関係の制限が影響し、何かを集団で成し遂げる上で必要なことを「地域ボランティア活動」の機会に経験し、学校での受動的

な学びに慣れてしまい、自ら進んで何かをするということも、今回のボランティア体験を通じて初めての経験になった学生が少なくないと感じられた。

この体験学習は、自らの成長を促し、その経験を活かし、地域に出向き活動するモチベーションを高めることを試みたが、学生は他者を通じて自己に着目することが主となり、活動の結果や感想等からは、自分ではない他者への関心をもつ認識の段階には至らなかったと見られる。しかし、その後、「子どものひろば」に2名、「北二福進協」の活動に1名つながった。特に後者の学生は、その活動に参加している重度障害のある女性の母親と出会い、その生活支援にもつながっていた。このことから、直接交流がなされた本年度の「支え合い体験」までつながった13名のうち、3名が地域活動に継続している。

2 地域活動を学生が継続するには地域関係者と連携し複数回の体験機会を地域の中でつくる

実験的実践プログラムの検証からは、教員や地域関係者をロールモデルとしてプログラム運営にかかわり、次第に地域の方と顔見知りになり、自分たちのその場における役割も分かるようになり、出会う人との交流を学生自身も楽しめるようになっていた。こうした地域の方との関係を紡いだのは、地域の方々が積極的に学生に声をかけ、学生とのかかわりを楽しみにしてくれたことを関係者から聞くことでやりがいにつながるということもあったと思われる。こうした点は、地域ボランティア活動でも同様で、地域関係者が意識的に学生への声かけ、かかわりが楽しいことを伝える等、意思表示があることで、学生たちは自分の交流する場での存在意義を認識していた。

しかし、その場の交流は楽しみだが、その場づくりの準備等には関心を持ちにくく、実験的実践では、地域関係者と運営委員として対等な立場なのだが自覚は乏しいようであった。一方、「支え合い体験」では、イベント実施のみで完結し、学生が地域で多世代交流の場づくりをしていくことには目が向かなかった。だが、実験的実践では、地域課題に関わる地域関係者と協働して実行委員会を形成し、取り組む準備から活動まで企画運営に学生が携わりながら、多様な関係者とのかかわり合うことを地域で継続的に展開してきたことから、学生自ら地域の居場所づくりに関与し、課題解決に向けて地域の一員として主体的に取り組むようになっていた。その結果、参加学生は、次年度も継続して運営委員に携わりたいと意志を示している。

つまり、学生に「他人事」でなく「我が事」として取り組む姿勢を育むには、実験的実践のように直に地域の中で課題に取り組む。そのような活動を複数回ボランティア体験するような機会を地域関係者とともに実施しなければ実感できないと考えられる。

3 地域活動につなぐには体験学習プログラム展開方法に自己理解等に気づき学べることを含める

本研究により、学生がこうした地域課題の解決に向けて継続的に地域活動に参加していくためには、体験学習の枠組みを活用して、「振り返り」の機会を通じて、学生が学生間や立場の違うさまざまな地域の方とのやり取りから、自分の経験を内省化し、その「気づき」を活かし、継続的な地域の居場所づくりの活動に、その地域の中で複数回かかわりながら、学生同士と地域の関係者がつながることから、学生が地域活動で役割を担い得ると考える。本年度の2つの実践のプロセスの中で、地域関係者に対しては、若いチカラが地域を活性化し得ることに気づいていただき、学生を地域で支える姿勢が育まれる機会になっていた。また、学生は地域活動のボランティア体験を通して、大学での授業の学びの意義や必要性、そして専門的知識の有効性を地域の方々とのかかわりから再確認できることも改めて分かった。そして、この2つの実践は、特にコミュニケーション力や傾聴力などの他者と関わる能力や、課題を発見し解決を目指して学び続ける能力など、社会から期待される能力について成長の兆しが認められ、直接的な地域の多様な人との関わりにより、主体性や実行力など実際の取り組みの中で育まれる能力が向上することが分かった。それは、本学の建学の精神につながり、社会人基礎力²⁾を培う機会になるといえる。しかし、そのスキルを育むためには、他人事ではなく自分事と捉えられる自己理解等の基礎的な力を学べ

るように、体験学習にプログラムして展開する必要があることを確認することができた。

VI 地域ボランティア活動の体験学習展開過程に活かす4つの視点-今後に向けて-

本論の検証を踏まえて、学生が自信を育みながら、自発的に主体的に地域ボランティア活動として、継続的に地域活動に取り組めるようになるには、以下の4つの視点に向けた支援をコーディネーターと地域関係者が連携して、地域ボランティア活動の体験学習展開過程に活かす必要があると考える。

- ① 学生が関わる多様な他者の魅力に気づき、自己理解につなぐ機会をつくる
- ② 今まで見えていなかった社会の課題に気づく機会をつくる
- ③ 地域社会が若い世代を必要としており、学生が社会に十分に貢献する力があることを知る機会をつくる
- ④ 体験の場は大学ではなく、実際に課題に取り組む地域の中で、それに携わる地域の方々と実施する

今後の課題として、この4つの視点を体験学習の展開に取り入れることから、学生が継続して地域社会に貢献できるインクルーシブボランティア(多様な人々を排除せず包含して支え合いともに生きていけるようにする)を体験的に理解していくことの可能性について検討する。

本稿は、本研究の成果をまとめた『2022年度(令和4年度)地域連携共同研究所 研究プロジェクト 多世代交流を可能とする地域の居場所づくり報告書-令和4年度ボランティアセンター「地域ボランティア活動」事業報告-(佐藤陽・山下倫実・山口由美・人見優子・西村百絵)』を活用している。

-
- 1) 佐藤陽(2002)「福祉教育実践方法としての体験学習における学習援助者役割に関する考察」『日本地域福祉学会 日本の地域福祉第15巻』、63-72.
 - 2) 経済産業省が主催した有識者会議において、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を「社会人基礎力(3つの能力・12の能力要素)」として定義している。この社会人基礎力の3つの能力「前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング)、チームで働く力(チームワーク)」を本論の地域とつながる意義と結びつけている。[経済産業省 (<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2021.9.29>)]

栄養管理技術の提供による持続可能な開発目標(SDGs)への試み ～糖質管理スイーツの開発を通じた地域社会との関わりについて 第2報～

Towards Sustainable Development Goals (SDGs) through the Provision of Nutritional Management Technologies: Exploring the Relationship with Local Communities via the Development of Low-carbohydrate Sweets - Part 2

國井 大輔¹⁾
Daisuke Kunii

落合 葉南¹⁾
Hana Ochiai

高梨 理子¹⁾
Riko Takanashi

石沢 美和子²⁾
Miwako Ishizawa

吉山 裕子²⁾
Yuko Yoshiyama

石井 由紀子³⁾
Yukiko Ishii

1)十文字学園女子大学 人間生活学部 食物栄養学科 2)NPO 法人シンフォニー 3)料理研究家（フリーランス）

キーワード：糖質管理・食品開発・SDGs

要旨：一般的なスイーツには糖質が多く含まれ、過体重やメタボリックシンドローム、糖尿病の人々の利用には注意が必要である。しかし、嗜好品であるスイーツは、おいしくて、心を満たし、人を笑顔にする食べ物ひとつであるため、上手に利用する必要がある。

本プロジェクトでは、おいしい！の笑顔と健康をつなぐプロジェクトの第2弾として、昨年同様、糖質管理技術によって、おいしくて身体に負担が少ない糖質管理スイーツの開発・販売を、地域事業者と共に実現させた。

この取り組みは、SDGsの4つの目標（「3：全ての人に健康と福祉を」「8：働きがいも経済成長も」「9：産業と技術革新の基盤をつくろう」「17：パートナーシップで目標を達成しよう」）に該当し、今年度も、障がい福祉サービス事業所（就労継続支援B型）であるNPO法人シンフォニー（埼玉県新座市）と協働し、糖質管理スイーツの開発・販売を展開した。

協働開発した「おから豆乳カップケーキ（桑葉粉末入り）」は、従来品に比べ、おいしさはそのままで糖質を約49%減らすことができた。高付加価値化されたスイーツは利用者にも好評で、商品開発を通じた地域社会との関わりや、栄養管理技術によるSDGsへの試みとしても、一定の成果を得ることができた。

授産製品の商品化では、経済活動というより福祉活動の意味合いが強いが、本学学生にとっては、SDGsを意識した社会活動として、一定の教育的価値を得ることができたと考えている。このような取り組みは、本学地域連携共同研究所の趣旨に合致している活動であると考えており、引き続き、本学が担う役割を意識した活動を続けていきたい。

1. 背景

健康の維持増進、ならびに疾病リスクを減らしていくためには、個人の状態に合わせた食事療法が欠かせない。嗜好品であるスイーツは、おいしくて、心を満たし、人を笑顔にする食べ物ひとつであるだけでなく、リラックスやリフレッシュができたり、ストレス管理でも利用されている¹⁾。スイーツを食べることで「幸せな気持ちになる」「気分転換になる」など、スイーツ摂取による一定のストレス改善効果が見られており、コロナ禍も相まって、テイクアウトできるスイー

ツの店も増え、新たなスイーツの楽しみ方も定着してきている²⁾。

しかし、一般的にスイーツは、エネルギーが高く、様々な疾病予防の観点からも、利用には注意が必要である。特に、肥満やメタボリックシンドロームを含め、糖尿病や食後高血糖症状などの「糖代謝異常」がある人は、スイーツを含めた糖質の摂り方に注意しなければならない。現在、当研究室では、従来の「エネルギー管理食事療法」と合わせて、個別に対象者の状態を見ながら、糖質の摂取量や摂り方を管理した「糖質管理食事療法」も早期から検討していくべきだと考えており、スイーツ開発でも糖質を管理した商品設計を行って、利用者の選択肢を増やす取り組みをしている。

そこで、本プロジェクトでは、昨年同様、地域事業者と糖質管理スイーツを開発・販売し、利用者へのアンケート調査から内容をフィードバックしていくことで、本学による地域社会との関わりや栄養管理技術による SDGs³⁾ への試みについて検討することとした。

なお、本プロジェクトは、SDGs の 4 つの目標（「3：全ての人に健康と福祉を」「8：働きがいも経済成長も」「9：産業と技術革新の基盤をつくろう」「17：パートナーシップで目標を達成しよう」）に該当し（図 1）、2022 年度十文字学園女子大学地域連携共同研究所研究プロジェクトに採択されている。



図 1) 本プロジェクトの開発目標

2. 方法

1) 実施体制

昨年同様、本プロジェクトの実施に当たり、製造販売事業者として、障がい福祉サービス事業所（就労継続支援 B 型）である NPO 法人シンフォニーで実施した。その他、素材提供事業者として、トヨタマ健康食品株式会社⁴⁾、株式会社ブラクストン⁵⁾、外部有識者として料理研究

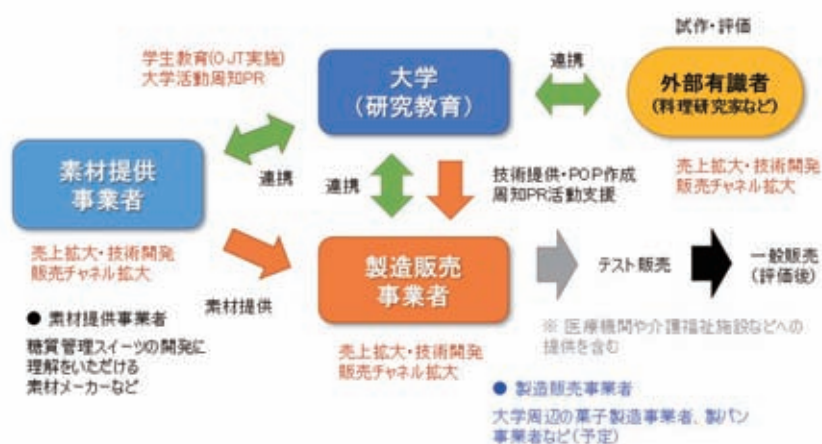


図 2) 本プロジェクト実施体制図

家である石井由紀子氏等の協力を得て実施した。（図 2）

また、本学学生の取り組み意義としては、次の 3 つとした。①事業者等と新商品の開発（試作等）を実施することで、管理栄養士として実際の商品化へのプロセスを学ぶ。②大学の持つ技術資源を活用することで周辺地域の事業者等との産学連携の推進を図り、地域貢献・地域発展に繋げる。③SDGs の観点からハンディキャップを持つ人達に技術提供することで経済活動を促し、社会共生を支援する。

2) 試作

開発に先立ち、本学学生による試作を実施した。試作の方向性としては、①配合の見直しによる糖質量の調整（1回量あたり糖質目安量 10g 程度）と、②糖質吸収遅延作用がある生理活性物質を配合すること、の2つの糖質管理技術を用いた。

一般的なカップケーキの配合をベース（①ベース配合）に、外部有識者との意見交換を経て（写真1）、小麦粉をおから粉、アーモンド粉、食物繊維で代替したもの（②おから粉）、生理活性物質として桑葉粉末入れたもの（③桑葉粉末）、ルビーウォルナッツをトッピングしたもの（④くるみ）、甘味料にマルチトールを配合したもの（⑤マルチトール）、低糖質チョコレートを配合したもの（⑥低糖質チョコ）の6種類の試作を実施した（資料1）。また、それぞれのテスト区で原価計算を行い、製造コスト（目安）の確認をした。

3) テスト販売

試作後は官能評価等を行い、得られたデータを基に、製造事業者で最終的な商品へと調製した。商品のテスト販売については、製造事業者の実店舗のほか、マルイファミリー志木店⁶⁾（写真2）でも実施した。また、テスト販売に合わせて、消費者の嗜好やコストなどに関する調査を実施した（販売時に調査用はがきを配布：図3）。



写真1) 外部有識者との打ち合わせ



写真2) マルイファミリー志木店

～ アンケートのお願い ～

この度は、「桑葉粉末入りおから豆乳カップケーキ」をご購入いただき誠にありがとうございました。今後の商品開発の参考にさせていただきますので率直なご意見を聞かせて頂ければ幸いです。

設問	回答選択肢(○□に✓を入れる) ※○は1つ、□は複数選択可
① 年代	○～20代 ○30～40代 ○50～60代 ○70代～ ○答えたくない
② 性別	○男性 ○女性 ○答えたくない
③ 住所	○埼玉県 ○東京都 ○その他 ⇒ 市区町村()
④ 購入動機	☐ 美味しそう ☐ 健康に良さそう ☐ 素材がめずらしい ☐ POP(説明文章)を見た ☐ 大学の共同開発 ☐ 店員の勧め ☐ 知人の紹介 ☐ SNS で見た ☐ その他()
⑤ 食べた感想	○美味しい ○普通 ○あまり美味しくない(理由:)
⑥ 商品価格感	○高い ○普通 ○安い
⑦ 買いやすい価格	☐ ～199円 ☐ 200～299円 ☐ 300～399円 ☐ 400～499円 ☐ 500～599円 ☐ 600円～ ※普段使い1袋当たり
⑧ 希望や意見など	例) チョコレート系で健康的な菓子が欲しい など

ご協力ありがとうございました！
そのままポストに投函ください

図3) 調査用はがき（裏面）



図4・5) 左：店頭ポスター



右：販売時に配布したチラシ

設問内容は次の通りである。(○は1つ、□は複数選択可)

- ① 年代 (○～20代 ○30～40代 ○50～60代 ○70代～ ○
答えたくない)
- ② 性別 (○男性 ○女性 ○答えたくない)
- ③ 住所 (○埼玉県 ○東京都 ○その他⇒市区町村名)
- ④ 購入動機 (□美味しそう □健康に良さそう □素材が
めずらしい □POP(説明文章)を見た □大学との共同開
発 □店員の勧め □知人の紹介 □SNS で見た □その
他)
- ⑤ 食べた感想 (○美味しい ○普通 ○あまり美味しくない
(理由))
- ⑥ 価格感 (○高い ○普通 ○安い)
- ⑦ 買いやすい価格帯※普段使い1袋当たり (□～199円
□200～299円 □300～399円 □400～499円 □500～599
円 □600円～)
- ⑧ 意見や希望など (自由記述)

また、テスト販売に際し、店頭ポスターや説明チラシの
作成を行い、商品の特徴や本学のプロジェクトであることを
PRした。(図4・5)

3. 結果

研究室にて試作を実施した結果(写真3)、試作した6つ
のテスト区における栄養計算(1個あたり)では、「①ベー
ス配合」で、エネルギー161kcal、たんぱく質3.0g、脂質
7.0g、糖質21.7g、食物繊維0.4g、「②おから」で、エネ
ルギー147kcal、たんぱく質18.1g、脂質8.8g、糖質14.7g、



写真6) テスト販売の様子

食物繊維3.6g、「③桑
葉粉末」で、エネ
ルギー140kcal、たんぱく
質3.3g、脂質6.8g、
糖質16.1g、食物繊維
1.8g、「④くるみ」

で、エネルギー155kcal、たんぱく質4.0g、脂質11.2g、糖
質14.1g、食物繊維2.9g、「⑤マルチツール」で、エネ
ルギー169kcal、たんぱく質9.0g、脂質10.8g、糖質14.0g、食
物繊維3.0g、「⑥低糖質チョコ」で、エネルギー148kcal、
たんぱく質3.1g、脂質8.6g、糖質15.6g、食物繊維4.2gと



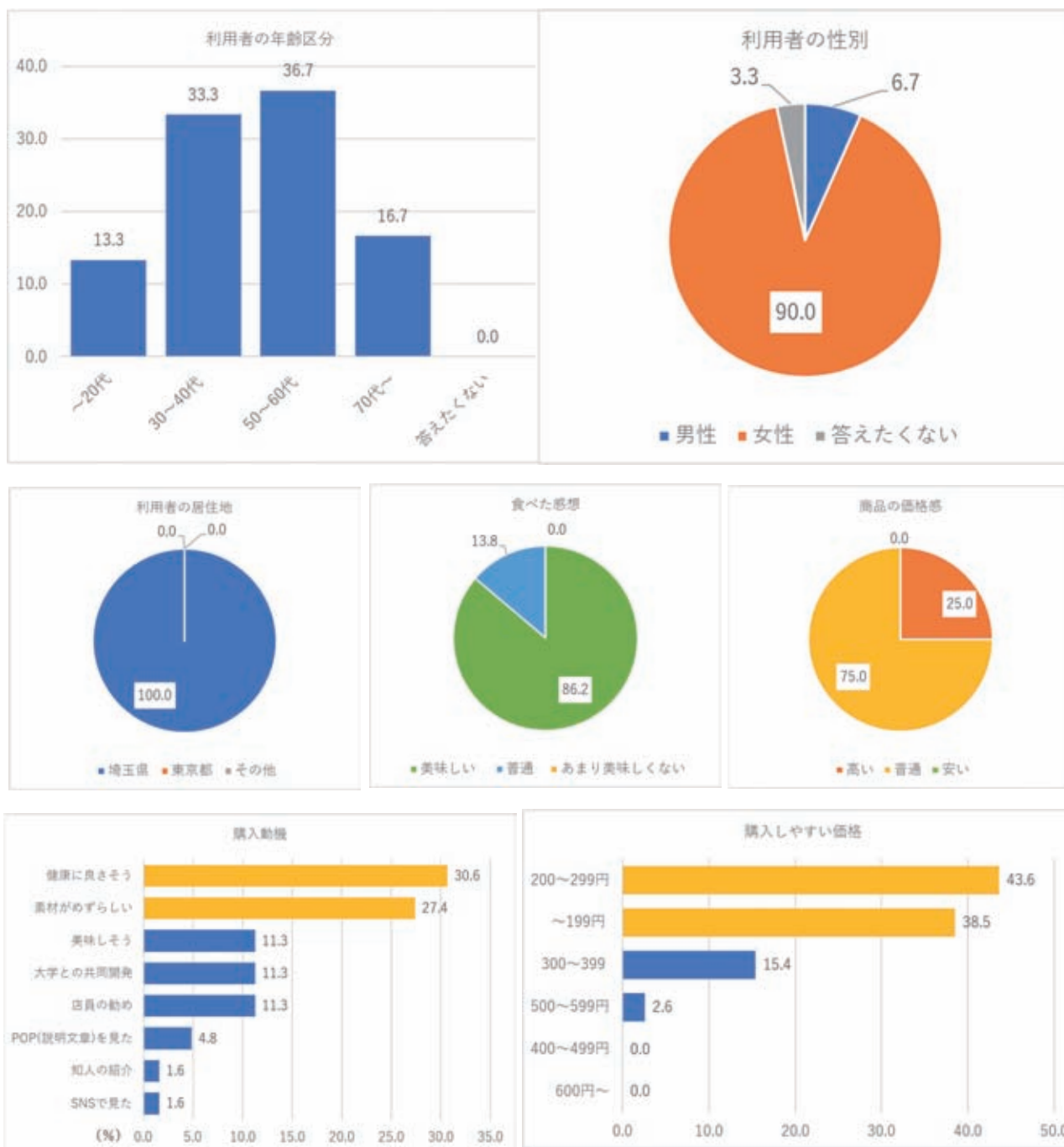
写真3) ゼミ内での試作



写真4) 製造販売事業者との打ち合わせ



写真5) 最終商品



なり（資料 2）、ベース配合と比較して、25.8～35.5%糖質量を抑えることができた。

また、試作品 1 個当たりの原価計算は、「①ベース配合」で 38.5 円、「②おから」で 77.2 円、「③桑葉粉末」で 60.2 円、「④くるみ」で 73.5 円、「⑤マルチトール」で 74.2 円、「⑥低糖質チョコ」で 90.5 円となり、①ベース配合と比較して、1.6～2.3 倍のコスト高になった（資料 3）。

試作後の官能評価では、全てのテスト区で「味」「食感」「香り」「外観」において、いずれも良好な結果が得られたため、得られたデータを基に、製造事業者との打ち合わせを実施した（資料 4・5・6）。

最終的な商品では、小麦粉の代替品として、おから粉、アーモンド粉を配合し、臭みをマスキングするためにブランデー、生クリームを用いた。また、甘味料にはマルチトールも配合した。

テスト販売に用いる商品は「おから豆乳カップケーキ（桑葉粉末入り）」として、1 個 250 円（税込）で販売することとした。（写真 5・6）

喫食後のアンケート調査については、2023年6月1日現在、売り上げ総数98個に対して30通の返信（回収率30.6%）があり、次のような回答が得られた。

まず、試験販売における購入者の年齢は50～60代が36.7%と最も多く、次いで30～40代の33.3%であった。また、購入者の性別は90.0%が女性で、居住地は埼玉県のみで、店舗販売のため近隣住民の利用が多かった。

購入動機については、「健康に良さそう」が最も多く（30.6%）、次いで「素材がめずらしい」（27.4%）「美味しそう」「大学との共同開発」「店員の勧め」（11.3%）となり、糖質管理スイーツに求めている購入者の好みの傾向が分かった。

また、喫食した86.2%が「美味しい」と回答し、13.8%は「普通」と回答し、「あまり美味しくない」と回答した購入者がいなかった。

今回のテスト販売では、1個250円という価格設定であったが、商品の価格感については、75.0%が「普通」と回答したものの、25.0%が「高い」と回答した。購入しやすい価格を聞いた調査で43.6%が200～299円以下を希望しており、次いで38.5%が199円以下を希望していることが分かった。

4. まとめ

1) 糖質管理スイーツの開発

本プロジェクトにおける商品化では、製造事業者の既存品と比較して、おいしさをそのまま、エネルギー量を4.6%、糖質量を48.6%減少させた。1個当たりの糖質量は11gとなり、喫食後の高血糖が抑えられる程度まで糖質量を管理することができた（表1）。糖質には、マルチトールを使用したか、おからパウダーとアーモンド粉の配合調整で、生地ダレも抑えながら、しっとりしたスポンジに仕上げることもできた。また、生クリームを配合することで、コクを出すこともできた。

1個当たり	エネルギー (kcal)	たんぱく質(g)	脂質(g)	糖質(g)	食物繊維(g)
既存品	219	3.0	12.7	21.4	0.9
開発品	209	3.5	14.4	11.0	2.1
増減(%)	-4.6	16.7	13.4	-48.6	133.3

表1) 最終製品における栄養成分の比較

また、桑葉粉末を配合することによって、抹茶のような風味を出したり、大きめに砕いた希少性の高いルビーウォルナッツによって、色のコントラストも引き立ち、見た目のアクセントを出すことができた。

開発した商品の評価も高く、購入動機も「健康に良さそう（30.6%）」「素材がめずらしい（27.4%）」と最も高く、今後の商品開発にフィードバックしていきたい。

なお、商品価格については、高いと感じている購入者が25%いることから、授産商品への理解を促すと同時に、クラウドファンディングなどの資金調達の方法などを利用して、持続可能なビジネスモデル化を検討していきたい。

2) 地域連携と大学における実学教育

本プロジェクトでは、大学における地域連携の一環として、単なる商品開発を通じた社会貢献活動というだけでなく、様々なハンディキャップを持つ人たちと協働の機会を持つことができた。様々なハンディキャップを持つ作業者が真剣に作業に取り組む姿を目の当たりにして、本学学生の実学教育としても貴重な経験になった。(写真7・8)

多様化する価値観の受け入れと社会問題への取り組みの経験は、本学学生にとって、今後の社会生活を送るうえでも柔軟な思考や視野の拡大につながる。本プロジェクトにおける地域連携は、商品開発だけに留まらず、社会共生の点からも極めて意義深い。

SDGsの目標である「3：全ての人に健康と福祉を」「8：働きがいも経済成長も」「9：産業と技術革新の基盤をつくろう」「17：パートナーシップで目標を達成しよう」についても、一様の成果が得られた。

栄養管理技術は、身近な食を通じた社会貢献活動に結びつきやすく、結果も消費者や地域社会の人々に認知されやすいことが多いため、今後も栄養管理技術の提供を通じた、地域社会と大学の連携を進めていきたい。



写真7) 学生による製造現場見学



写真8) 製造販売事業者の皆さんと

5. 謝辞

本プロジェクトの実施に際し、取り組みの趣旨に賛同いただき、快く食材の提供をいただいた素材提供事業者様、コロナ禍のなかで製造販売を引き受けてくださった製造販売事業者様、そして、コロナ禍で大学生活もままならないなか試作などに励んでくれた当研究室の学生諸君。本プロジェクトに関わっていただいた全ての皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

6. 参考文献

- 1) 嗜好品摂取の心理学的効果と幸福感及び満足度との関係. パーソナリティ研究 28 (1), 87-90, 2019-07-01
- 2) 株式会社クロス・マーケティング「スイーツに関する調査 (2021 年)」
<https://www.cross-m.co.jp/news/release/20210407/>
- 3) SDGs <https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/about/>
- 4) トヨタマ健康食品株式会社ホームページ <https://kenkoshokuhin.jp/>
- 5) 株式会社ブラクストンホームページ <http://www.blaxton.jp/>
- 6) マルイファミリー志木ホームページ
https://www.0101.co.jp/079/?from=01_pc_st079_top_head_logo

12 方法 ② 研究室での試作 (カップケーキの配合)

※1: パリッソニア (伊藤忠商事)
※2: まるごと食品 (トラダマ商事)
※3: ルビーウォールアップ (ハウス食品)
※4: 低糖質チョコレート (株式会社西野)

配合割合 (%)

材料	① ベース配合	② おから	③ 桑葉	④ くるみ	⑤ マルチトール	⑥ 低糖質チョコ
卵	溶き卵 34.2	14.8	17.7	15.2	14.7	11.8
	卵から粉	7.3	3.5	5.7	5.5	5.9
	アーモンド粉	7.4	3.5	5.7	5.5	2.0
	黄砂糖	2.0	3.5	1.9	1.8	5.9
甘味料	シロ糖 17.1	7.4	10.6	7.6	1.8	3.9
	還元麦芽糖	7.4	3.5	7.6	7.3	11.8
	牛乳 12.8	—	3.5	5.7	5.5	—
	無糖粉乳	14.8	10.6	9.5	11.0	15.7
	糖質粉末	0.8	3.5	—	1.5	—
	ルビーウォールアップ	—	—	9.5	9.2	—
	低糖質チョコ	—	—	—	—	9.8
	ベーキングパウダー	1.7	1.5	1.5	1.5	1.6
	油	21.4	18.4	17.7	18.9	18.3
	無塩バター	12.8	11.0	10.6	11.4	11.0
合計	100	100	100	100	100	100

資料 1) 試作品の配合表

20 結果 ② 研究室での試作 (栄養計算)

数値は、1個分 (生地50g目安) の計算値

	エネルギー (kcal)	たんぱく質 (g)	脂質 (g)	炭水化物 (g)	糖質 (g)	糖質減少率 (%)	食塩相当量 (g)
①	161	3.0	7.0	22.1	21.7		0.4
②	147	18.1	8.8	18.7	14.7	-32.3	3.6
③	140	3.3	6.8	19.7	16.1	-25.8	1.8
④	155	4.0	11.2	17.4	14.1	-34.9	2.9
⑤	169	9.0	10.8	17.4	14.0	-35.5	3.0
⑥	148	3.1	8.6	20.2	15.6	-28.1	4.2

昨年の結果を参考にした今回の配合では、いずれのテスト区においても、ベース配合①と比較して、おいしさを維持しながら、1個当たり (生地50g) 25.8~35.5%の糖質を減少させることができた。

資料 2) 試作品の栄養計算

19 結果 ② 研究室での試作 (原価計算)

ベース配合と比較して、1.6~2.3倍の原料価格になった。

※原料材料費のみ

材料	100gあたり	①	②	③	④	⑤	⑥
卵	溶き卵 ¥30	205	89	106	91	88	7.1
	アーモンド粉 ¥714		104.2	50.0	61.4	78.5	84.3
	卵から粉 ¥200		29.4	14.0	22.8	22.0	8.0
	黄砂糖 ¥196		7.8	13.7	7.4	7.1	23.1
甘味料	シロ糖 ¥30	103	4.4	6.4	4.6	1.1	2.3
	還元麦芽糖 ¥100		14.7	7.0	15.2	14.6	23.6
	牛乳 ¥20	5.1		1.4	2.3	2.2	
	無糖粉乳 ¥20		5.9	4.2	3.8	4.4	6.3
	糖質粉末 ¥500		7.5	35.0		15.0	
	ルビーウォールアップ ¥223				42.4	41.0	
	低糖質チョコ ¥500						98.0
	ベーキングパウダー ¥625	21.3	18.8	18.1	18.8	18.8	20.0
	油 ¥47	20.1	17.3	16.6	17.8	17.2	18.5
	無塩バター ¥300	76.8	90.0	63.6	68.4	66.0	70.8
合計 (円)		154.1	308.9	240.6	293.9	296.7	362.0
製品1個あたり原価 (円)		38.5	77.2	60.2	73.5	74.2	90.5
①と比較した倍率 (倍)			2.0	1.6	1.9	1.9	2.3

資料 3) 試作品の原価計算



資料 4) 試作品の様子

18 結果 ② 研究室での試作 (官能評価)

試作後に試食を行い、「味」「食感」「香り」「外観」で官能評価を実施した。

官能評価	① ベース配合	② おから	③ 桑葉	④ くるみ	⑤ マルチトール	⑥ 低糖質チョコ
味	—	◎	◎	◎	◎	◎
食感	—	○	◎	◎	◎	○
香り	—	○	○	○	○	◎
外観	—	◎	○	◎	○	○

◎: 非常に良い ○: 良い △: 普通 ×: 良くない

昨年の試作のデータを参考に今回の配合を設定したため、今回の試作では、ベース配合と比較して、どのテスト区分においても良好な結果を得ることができた。この結果から、粉体と液体の割合や、甘味料の配分など、事業者試作の参考とした。

資料 5) 試作品の官能評価

27 結果 ② 研究室での試作 (総合評価)

おいしさと糖質量のバランスは、製品コストを考慮して、判断する必要がある。今後、今回の結果をもとに、製造販売事業者と協議していく。

テスト区	① ベース配合	② おから	③ 桑葉	④ くるみ	⑤ マルチトール	⑥ 低糖質チョコ
血糖バランス	◎	○	◎	◎	○	○
糖質量 (g) <1個あたり>	21.7	14.7	16.1	14.1	14.0	15.6
増減 (%)		-32.3	-25.8	-34.9	-35.5	-28.1
血糖値への影響★	-	◎	○	◎	◎	○
製品コスト (倍) <①との比較>		2.0	1.6	1.9	1.9	2.3

★ベース配合と比較して、1個あたりの糖質量と食塩相当量で食後高血糖のリスクを判断した

資料 6) 試作のまとめ

地域共生社会にむけたコミュニティ形成の試み
—多様な主体の連携による地域活動を事例として—

Toward the realization of the whole community symbiosis society
-A Case Study of Community Activities through Cooperation among Diverse Groups-

星野 敦子¹⁾

Atsuko HOSHINO

1) 十文字学園女子大学教育人文学部・児童教育学科

キーワード：地域コミュニティ、子育て支援、地域共生社会、生涯学習

要旨：地域団体「チームキャロット」を核として、大学や地域の学校、他の地域団体等が連携して開催した「野火止用水灯明まつり」を事例として、多様な主体が連携して地域コミュニティを形成する過程と成果について検討した。その結果、「灯明まつり」を通して、地域コミュニティが連携した成果として、以下の5点が明らかとなった。①メンバーの高齢化など、マンパワーの不足に対して、適宜学生や商工会青年部が支援を行い、滞りなく、事業を進めることができた。②灯明袋の製作については、事前にメンバーと学生が共に小学校へ出向くなど、準備の段階から支援体制が機能していた。③地域連携科目「地域で学ぶ」の受講生については、単にボランティアに参加するだけでなく、事前に「チームキャロット」の講義を受講し、「灯明祭りの意義と歴史」「チームキャロットとは」などについて学んでいることで、活動に対する興味関心を高め、参加学生のモチベーションの向上につながった。④「子育て支援のためのフードパントリー」を組み合わせることで、多くの子育て世帯が参加し、結果的に「灯明まつり」について広く知ってもらうことにつながった。⑤灯明まつり当日だけでなく、その後の「アート展」の活動につなげることができ、アート展開催についても、学生と「チームキャロット」、及び新座市が連携して活動することができた。

1. はじめに

埼玉県新座市は、地域住民によるボランティア活動が盛んで、多くの地域団体が活動を継続し、地域の活性化や市民生活の支援を行っている。新座市民総合大学は、市制30周年事業として2000年度に始まった独自の生涯学習制度である。設置の目的は、「市民が自分を高め、地域を高める学習の場を創出し、学んだことを地域で生かし、市民一人ひとりが生き生きとした人生を送れるようにするため」であり、発足当初から学習の成果を地域に活かすことが明確に示されている。講座内容、施設ともに3大学の協力を得ており、各大学で最低1学部を担当し、教員がコーディネータを務めて講座を運営している。新座市民総合大学の大きな特徴の一つは、希望する修了生に対して「サポーター委嘱」を行い、地域で活躍できる人材として位置付けている点である（星野、2016）。

新座市民総合大学について、主として環境系の学部を対象とした評価分析を見ると（星野、2017）、開設から18年目の段階で、修了生がサポーターとして、また独自の団体を立ち上げて活発に活動している状況が明らかとなった。また調査結果から、現在のボランティア活動に楽しさや生きがいを感じており、同時に地域の課題解決につながる活動を意識的に展開している状況も把握されている。ボランティアとして活躍している修了生は、関連する複数の団体に所属して幅広く活動している可能性が高いこともわかった。活動頻度にはややばらつきがあるものの、第1期生から2017年に至るまで、修了生が地域でのボランティア活動を継続している点は特筆すべきことである。

本論文においては、市民総合大学をきっかけとして設立された地域団体「チームキャロット」を核として大学や地域の学校、他の地域団体等が連携して開催した「野火止用水灯明まつり」（以下「灯明まつり」）を事例として、多様な主体が連携して地域コミュニティを形成する過程と成果について明らかにすることを目的としている。

2. 「チームキャロット」と「灯明まつり」

2.1 「チームキャロット」について

「チーム・キャロット」（代表 高畑 正）は、2014年1月に新座市民総合大学観光学科の修了生が中心となり結成され、子どもたちの夢や希望を形に、コミュニティの活性化、野火止用水の知名度の向上を目指して活動している。名前の由来は、設立当初、児童センターで『にんじんうどん作り』を行ったことから「キャロット」と命名したとのことである。（新座市コミュニティ推進課ボランティア・地域活動支援室、2017）。会員は現在25名である。

2015年3月には、「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」（通称：HUGネット）」が設立された。これは、十文字学園女子大学が、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC）に採択されたことを契機としてスタートした地域人材ネットワークである。チームキャロットも設立と同時にメンバーとして加入し、現在に至るまで中心的な団体として活動を支えている。子ども自然体験活動のほか、野火止用水や雑木林の環境保全活動、並びにメンバーの一人は事務局長として会の運営を担っている（星野他、2020）。

2.2 灯明まつりの概要

「灯明まつり」は「チームキャロット」が団体のメイン活動として継続しているものである。白い紙袋に絵や願い事を書いて、袋の中にLEDライトを入れて並べ、夕暮れにはライトを点灯する。表1は、2014年に開始して以降の灯明祭りの経緯を示している。

表1 野火止用水灯明まつりの経緯

年度	灯明の数	開催場所	開催時期
2014	300	西分集会所近辺の野火止用水沿い	6月初旬
2015	600		
2016	1200		
2017	1700		
2018	2000		
2019	1600		
2020	中止		
2021			
2022	650	ふるさと新座館前広場	6月初旬
2023	未定		10月下旬

出典：チームキャロット「キャロット通信」より著者作成

2014年にスタートした「灯明まつり」は、新座市内における市民まつり「ホテルの夕べ」に合わせて開催していた。「ホテルの夕べ」は西分町内会の「野火止ホテルの里を作る会」が管理・運営しているドーム内でホテルを見学できる催しで、同時に西分町内会の夏祭りも開催されている。2020年と2021年は新型コロナウイルスの影響により中止となった。

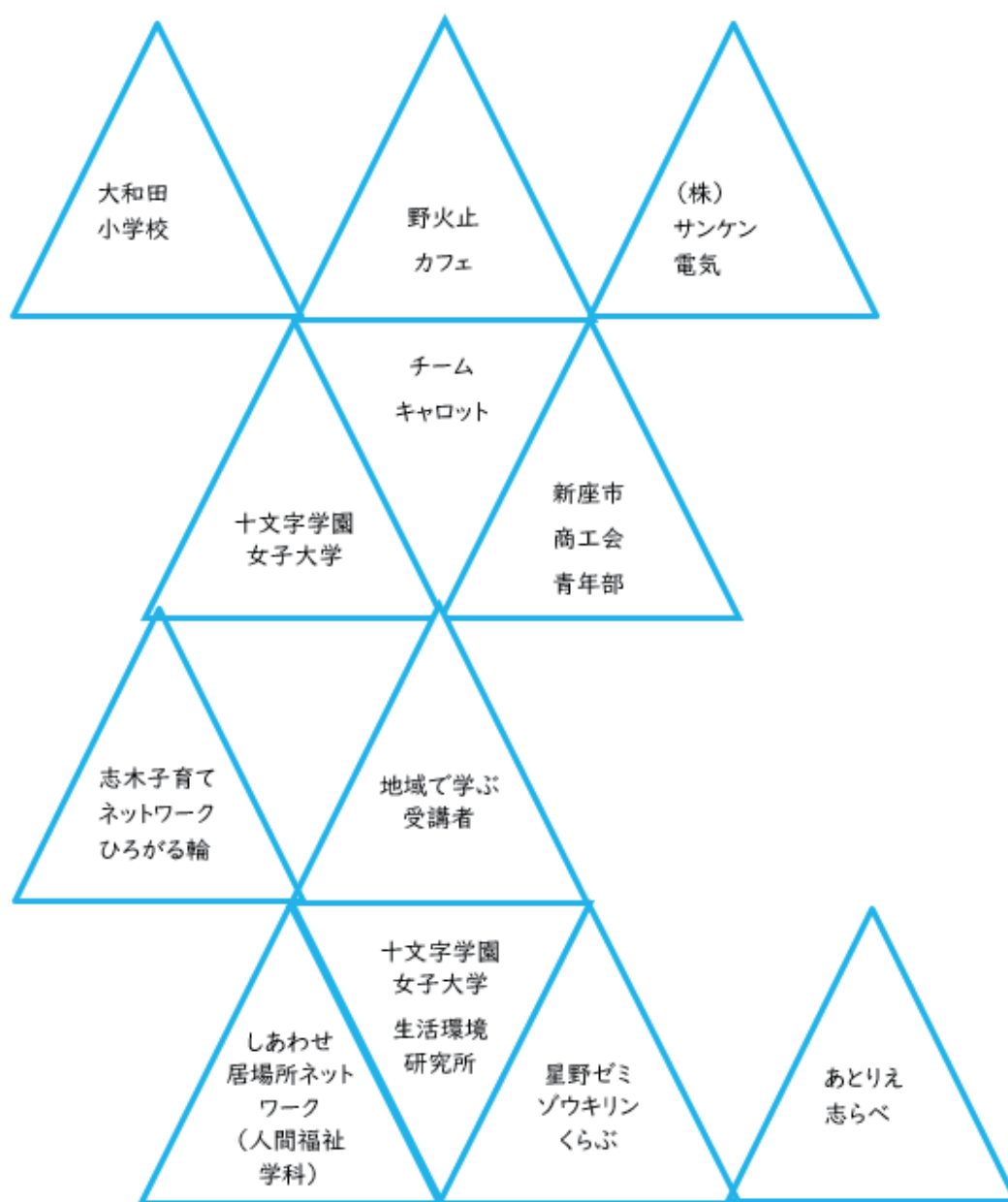
2022年に再開するにあたり、これまでの運営上課題となっていた点についての見直しを行った。灯明を並べていた野火止用水沿いは、夕方になると真っ暗になり、せっかく子どもたちが書

いてくれた絵や夢がわからなくなってしまうことや、会員の高齢化による準備、後片付け作業の困難さなど、場所や運営上の課題が明らかとなった。そこで、思い切って会場を「ふるさと新座館前広場」に変更することとした。これまでは、市や西分町内会のお祭りの参加者が灯明祭りにも参加してくれたが、場所を変えることで、集客が十分にできないのではないかという懸念がもたれたため、2022年度については、積極的に他の団体に働きかけをして、コラボ企画を増やす努力をした。その結果複数の団体が協力し、推定400名以上の来場者を得た。

3. 地域コミュニティの形成

「チームキャロット」は「灯明まつり」だけでなく、地域における様々な活動に関わってきた。また、他の団体の会員となって活動している会員も多い。2022年度に「灯明まつり」の開催場所を「ふるさと新座館前広場」に変更するにあたり、十文字学園女子大学生活環境研究所をはじめとして、多数の団体が活動に参加することとなった。

図1は、2022年度の「灯明まつり」における地域団体の連携について示している。



出典：著者作成

図1 野火止用水灯明まつりにおける地域団体の連携

2022年度の「灯明まつり」では、十文字学園女子大学のほか、「野火止カフェ」、新座市商工会青年部などが連携している。特に十文字学園女子大学と「野火止カフェ」は灯明まつりの手伝いだけでなく、独自の活動を展開している。

【野火止カフェ】

- ・ 「野火止カフェ」は年に数回、野火止用水沿いの西分集会所近くで野外カフェを開催している。
- ・ 灯明まつりにおいても、カフェを開催し、来場者にコーヒーや甘酒などをふるまっていた。
- ・ 「チームキャロット」の複数の会員が「野火止カフェ」の会員となっている。

【新座市商工会青年部】

- ・ 新座市内の経営者、個人事業主等のうち、45歳以下のメンバーで構成されている。
- ・ 灯明を並べたり、片づけたりすることを支援している。

【(株)サンケン電気】

- ・ 灯明の中に入れるLEDライト「ペットボトル」を生産し、灯明まつりの際に貸し出している。
- ・ 「ペットボトル」は太陽光で充電し、暗くなると自動発光する。また色が数分ごとに変化し、一定時間が経つと自動的に消灯する。
- ・ 石川県輪島の棚田の電飾イベントでも利用されている。

【大和田小学校】

- ・ 大和田小学校を含む市内のいくつかの小学校（2年生）が「灯明袋」に絵や夢などを書いて、提供している。
- ・ 大和田小学校については2022年5月30日にチームキャロットのメンバーと十文字学園女子大学の学生が学校に行き、「灯明まつり」について説明を行い、灯明袋を書いてもらった。
- ・ 2年生ということもあり、自分ではどのように書いたらいいかわからない児童もいるので、そのような場合には学生が個別で支援を行った。



【写真1 写真2】大和田小学校で2年生の児童に「灯明まつり」について説明し、灯明袋に夢や希望を書いてもらう様子

4. 「十文字学園女子大学生生活環境研究所」の活動

4.1 活動組織

図1に示したように、2022年度の「灯明まつり」では、「十文字学園女子大学生生活環境研究所」（以下、「生活環境研究所」）の活動に複数の団体に関わり、多様な活動を生み出している。学生組織としては、研究所代表である星野のゼミに所属する学生、地域連携ボランティアサークル「ゾウキリンくらぶ」の学生、地域連携科目である「地域で学ぶ」を受講している学生、「しあわせ居場所ネットワーク」に所属する学生などがある。「しあわせ居場所ネットワーク」は十文字学園女子大学人間福祉学科の矢野景子講師を中心とする、学生有志により構成されている。

地域連携科目「地域で学ぶ」においては、事前に「チームキャロット」のメンバーにより、「灯明まつり」についての講義をしていただいた。講義を受講して、興味を持った学生が今回活動に参加することになった。

「志木子育てネットワークひろがる輪」は、志木市内の子育て支援を目的とした非営利特定法人であり、以前より子育て応援フードパントリーにおいて、協力関係にあった。「灯明まつり」では、「子育て応援プチパントリー」を開催し、支援していただいた。

表2は、各団体の活動について示している。

表2 「灯明まつり」における「生活環境研究所」の参加組織と活動内容

NO	組織	主な活動内容
1	星野ゼミ学生	ウクライナ支援活動「手形でウクライナのひまわり畑を作ろう」お菓子ビュッフェ
2	志木子育てネットワーク ひろがる輪	子育て応援フードパントリー
3	ゾウキリンくらぶ	ペットボトル輪投げ
4	しあわせ居場所ネットワーク	釣りあそび バルーン
5	「地域で学ぶ」受講者	「灯明袋」を当日描く子どもたちの支援
6	あとリエ 志らべ	ひまわり畑の絵の製作指導

出典：著者作成

「子育て応援フードパントリー」は、新座市内の商店会のフリースペースや大学内で継続して実施しているもので、商店会での開催は、「コミュニティ型」として子育て中のすべての方を対象として、食料品や日用品などを配布している。大学で開催しているものは、「ケア型」として、公式LINEに登録しているひとり親または多子世帯に対して行っている支援活動である。「灯明まつり」において実施したのは、対象を限定しない「コミュニティ型」のパントリーで、50世帯分の配布を行った。

来場した子どもたちのための企画としては、「ペットボトル輪投げ」や「釣り遊び」「バルーン」などがあり、景品としてお菓子がもらえるなど、親子で楽しんでもいただけるような工夫を行った。また、好きなお菓子が選べる「お菓子ビュッフェ」も好評であった。当日来場した子どもたちに「灯明袋」に夢や絵をかいてもらう企画もあり、「地域で学ぶ」を受講している学生たちが個別で支援を行った。



【写真 3】子育て応援パントリー受付



【写真 4】手前から、「ペットボトル輪投げ」
「お菓子ビュッフェ」「フードパントリー」



【写真 5】「しあわせ居場所ネットワーク」に
よる、釣りなどのお遊びコーナー



【写真 6】夕暮れ時に「灯明袋」を点灯した様子

4.2 ウクライナ支援活動

2022 年度の「灯明まつり」に参加するにあたり、ゼミの学生からは「何かウクライナ支援につながるできないか」という意見があった。そこで、来場した子どもたちに手形を押してもらい、その手形を使ったひまわりの絵を作ろうということになった。「手形でウクライナのひまわり畑を作ろう」と題して、「手形を押すときに、みんなでウクライナの平和を祈ろう」という想いを形にするイベントを開催することにした。

手形を押すときに、絵の具を使うと洗うのが大変で、衣類が汚れるなど保護者に迷惑がかかることから、志木子育てネットワークのご助言を得て、水性クレヨン「キットパス」を利用することになった。これにより、手形を押した後、濡れティッシュでふきとれば手は概ねきれいになり、衣類に付着する心配もなくなった。当日は子どもたちだけでなく、新座市の並木市長など、約 300 名の方が手形を押して、ウクライナの平和を祈ることができた。

【ウクライナのひまわり畑アート展】

開催期間：2022年7月15日から7月20日

場所：新座市役所市民ギャラリー

共催：新座市教育委員会

新座市在住の画家、森志らべさんの指導を受け、手形をベースにひまわりの花の絵に仕上げ、**「ひまわり畑アート展」**を開催した。同時に灯明祭りや手形イベントの様子がわかる写真パネルを掲示した。パネルのうち1枚は商工会青年部の作品。来場者のべ数、約150人。



【写真7】手形を押す子どもたち



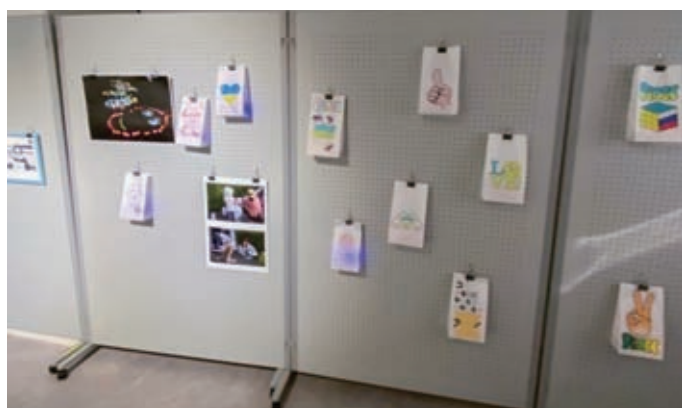
【写真8】手形を押す並木新座市長



【写真9】アート展に訪れた学生



【写真11】ゼミの学生の作品
「希望のヒマワリ」



【写真10】アート展で展示された灯明袋

5. まとめ

「チームキャロット」の「灯明まつり」は2014年にスタートし、その後展示する灯明の数を増やすことに力を入れて継続されてきた。しかしながら、メンバーの高齢化や開催場所の問題などを受け、新型コロナウイルスの影響で2年間の中止期間を経て、改めて「灯明まつり」の本来的な目的を再認識したように見える。「灯明まつり」の目的は地域コミュニティの創出であるが、特に以下の2点が重要となる。

- 1) 「灯明袋」を書いてくれた子どもたちやその家族が集い、楽しい時間をすごせること
- 2) 参加するメンバーの負担になることなく、その場に集うすべての人が楽しめること

2022年度の「灯明まつり」を通して、地域コミュニティが連携した成果は以下の5点にまとめることができる、

- ① メンバーの高齢化など、マンパワーの不足に対して、適宜学生や商工会青年部が支援を行い、滞りなく、事業を進めることができた。
- ② 灯明袋の製作については、事前にメンバーと学生が共に小学校へ出向くなど、準備の段階から支援体制が機能していた。
- ③ 地域連携科目「地域で学ぶ」の受講生については、単にボランティアに参加するだけでなく、事前に「チームキャロット」の講義を受講し、「灯明祭りの意義と歴史」「チームキャロットとは」などについて学んでいることで、活動に対する興味関心を高め、参加学生のモチベーションの向上につながった。
- ④ 「子育て支援のためのフードパントリー」を組み合わせることにより、多くの子育て世帯が参加し、結果的に「灯明まつり」について広く知ってもらうことにつながった。
- ⑤ 灯明まつり当日だけでなく、その後の「アート展」の活動につなげることができ、アート展開催についても、学生と「チームキャロット」、及び新座市が連携して活動することができた。

「灯明まつり」は1日のイベントであるが、すでにいくつかの地域で、「灯明まつり」を模したイベントが展開されている。これを機に多世代が互いにつながり、支援しあう活動モデルが示唆されている。地域活動を契機とする地域共生社会に向けた多世代交流にさらに期待したい。

<参考・引用文献>

- 星野敦子（2015） 大学と行政の連携による地域人材育成制度の評価、地域活性学会 第7回研究大会年会論文集. 2015, p219-222.
- 星野敦子（2016） 新座市における大学との協働による人材育成一域に貢献する人材を育てる一、産学官連携ジャーナル Vol. 12 No. 2, pp20-22
- 星野敦子（2017） 新座市における人材育成のための生涯学習制度と地域ボランティアの展開、十文字学園女子大学紀要 Vol148, p255-267
- 星野敦子、星野祐子、名塚清、佐藤弘信、星野敦子（2020） 地域人材育成と地域環境保全を目指したネットワークの構築、地域連携共同研究所年報 第5号、pp39-48
- 文部科学省（2013） 「人材認証制度のニーズ及びマッチングに関する調査研究」
- 新座市コミュニティ推進課ボランティア・地域活動支援室（2017）「にいざの地域活動だより」 第55号



十文字学園女子大学

地域連携共同研究所年報 第8号 (2022年度)

発行日 2023年11月

発行 十文字学園女子大学 地域連携共同研究所
〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
TEL 048-477-0555 (代)

印刷・製本 株式会社たじま
〒357-0045 埼玉県飯能市笠縫353-3



